

マリオネットクロニクル

ダークネス-紅-

秋月あきら

「ぎゃああああつ！」

苦痛に震える叫びは、灰色の空から降りしきる豪雨に掻き消された。

アスファルトを殴っては四散する雨粒たち。

左右を囲む高いビルの壁。

帝都エデンの裏路地はいつもより濃厚な狂気を孕んでいた。

廃気に汚染された滴が長い黒髪を滑り落ちた。

長い髪から覗く形相は人に非ず、般若面 をつけた少女がそこにはいた。

「貴様のようなゲス野郎は殺してやる！」

狂気で毒づく少女の罵声が眼前の怪物に浴びせられた。

壁にもたれ掛かり、ぐったりと座る少女の前には、人の顔を持った怪物が舌なめずりをしていた。顔は人であるが、ひと目で異形だとわかる。五本の指は赤紫の触手であり、一メートル以上もあるそれで少女の躰をまさぐる。

学園の制服が濡れて少女の躰に張り付く。雨に濡れて透けた服から白いブラと肌が見え、生肌に張り付く服に不快感を生じる。だが、目と鼻の先で行われる恥辱を前に、そんなことなど忘れ去られた。

触手は少女の胸部を鷲掴みするように巻きつき、ナメクジのようなねっとりした粘液を先端から噴出している。

少女は動けなかった。

決して恐怖心のためではない。

股関節の骨を脱臼させられ、起死回生しようにも動くに動け

ない状態だった。それに加え、一〇本もの触手が四肢を拘束して放さない。

躰の自由を奪われ、抵抗のできない少女にできることは、ただ叫ぶことであつた。

「殺してやる、殺してやる！ 性器を切り落とし、目玉を抉り出し、舌を引っこ抜いてやる。貴様は苦しみながら地獄に墮ちるんだ……キャハハハハ！」

その言葉の虚しさを発した本人にはわかつていた。相手に罵声を浴びせたところで、少女 妹を助けられないことを「姉」は痛感していた。

触手が伸び、般若面 を外そうと力が込められた。

「やめる面に触れるなあああっ！」

悲痛な「姉」の叫びに怪物が耳を傾けることはない。

めりめりと悪寒の走るなにかが剥げる音がする。

「紅葉ちみじの顔は貴様のようなゲスが触れていいものじゃない！」

同時に轟く雷鳴。

雷光が妹の名を呼んだ 般若面 に翳を落とし、その形相をより怨念の宿つたものにした。

触手は震撼する紅葉の腕を押さえ、般若面 を剥ぎ取るうとする力を強める。

めりめり……めりめり……と、般若面 と皮膚の間で奇怪な音が立てられ、それは皮膚をも剥ぎ取ってしまいそんな行為に思えた。

「殺してやるーッ！」

“姉”の悲痛とともに、般若面 は引き剥がされた。

尋常な感覚を持ち合わせている者ならば、その“顔”を見て眼を剥くか、もしくは背けただろう。

鬼女の憤怒と嫉妬を表し、二本の角と裂けた口から牙を覗かせる 般若面。その下の素顔は醜悪で悲惨なものだったのだ。

顔半分は端整で才女の相を見せているのだが、その半顔は大火傷を負ったように、皮膚が赤くケロイド状に爛れていた。

女性ならずとも、人前に晒すことを躊躇う傷痕だろう。それもまだ思春期の中にいるうら若き乙女だ。傷痕は顔だけでなく心にも深い傷を残しているに違いない。

触手は 般若面 をガラクタのように地面に投げ捨てた。

雨に打たれる 般若面 の眼から一筋の雫が零れ落ちる。その色はなぜか紅く染まっていた。

氣を失っている妹が恥辱されるのを近くで感じながら、無力な自分を“姉”は呪った。

呪われた運命を背負い、妹と共に地を這って死に物狂いで生き延びた。それもここで終止符が打たれてしまうのか。しかし、悪魔に魂を売ろうとも“姉”は諦めを知らなかった。

人生で幾度も味合わされた姉妹の屈辱。それには常に血が付き纏った。

復讐に捧げた血の制裁。

“姉”は妹を守るためにこの世に黄泉返った。

全ては妹と復讐のために……。

だからこそ、こんなところで妹の貞操を奪われるわけにはい

かなかった。

一緒に戦うと決めた。今までも怪我を負わせれたことはあった。しかし、妹の心にこれ以上の傷を負わせるわけにはいかない。

“姉”は神ではなく、悪魔の顕現を祈った。

忍び寄る風が裏路地を抜けた。

雨音の中であって、その足音は死の叫びのように甲高く響き渡った。

茶色いローブを頭からすっぽりと被った長躯の美影身。そのローブの奥で白い仮面が嘲笑っていた。

傀儡士紫苑。

この界限では名の知れた殺し屋だった。

少女の躰に跨る怪物に向けて、紫苑の指先から神速で輝線が放たれた。

「ぎやあああつ！」

怪物の奇声が木霊し、指から伸びていた五本の触手が同時に切断され、鰻のように地面の上で暴れ踊った。

白い仮面の奥から中性的で澄んだ　それでいて相手を威嚇する低い声が発せられる。

「理性を失った怪物が……目障りだ」

紫苑が鼻で嗤った瞬間、憤激した怪物がヒトの面から舌をだらしなく垂らし、狂気の形相で襲い掛かってきた。

刹那、紫苑の放った煌きが宙に傷をつくり、それは叫び声のような風を鳴らしながら徐々に広がりを見せた。

宙にできた闇色の裂け目からなにか聴こえる。

悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

「闇よ、喰らえ！」

怪物を指さし紫苑が叫んだ。

裂けた空間から 闇 が叫びながら飛び出す。

まさにそれは闇色の風。

闇 は生き物のように動き、怪物の足を掴み、腕を掴み、胸をも掴んだ。

自由を奪われた怪物は残った指から五本の触手を紫苑に目掛けて放つ。

白い仮面の奥で紫苑はなにを思う？

紫苑の放った輝線は怪物の眉間から股間まで奔り、その軀を真っ二つに断ち割ってしまったのだ。

怪物を丸呑みにした 闇 が恐怖を叫びながら裂け目に還っていく。

「これで終わりだ」

紫苑が呟くと、 闇 の還った裂け目は完全に閉ざされた。

なにが起こっていたのか、“姉”は見ることはできなかった。しかし、感じた。

恐ろしい力を持った者が圧倒的な力で怪物を葬ったことを。

もしかしたら本物の悪魔かもしれないと“姉”は思った。悪魔は代償になにを姉妹から奪う？

紫苑の仮面は壁にもたれ掛かり、気を失っている少女に向けられた。だが、その視線はすぐに地面に投げられている。般若面に向けられる。この般若面から凄まじい妄執に駆られた怨念を感じ取ったのだ。

紫苑は直感した。

この面は憑いている。

ゆつくりと織手を伸ばし、紫苑は鬼気を纏う。般若面を拾い上げた。

その刹那、紫苑の脳に直接流れ込んでくる濁流にも似た意識。《助けて頂戴、お願い。妹の命だけでも助けて頂戴！》

それは悲痛に懇願する女の声だった。

《アタシの魂ならくれてやる。だから頼む……妹は……妹は助けてやってくれ！》

紫苑の仮面は“姉”の声を聴きながら、壁に持たれる妹

紅葉の顔を見ていた。

「姉妹の魂……私が預かるう」

この日、姉妹は紫苑に拾われた。

太陽が燦然と輝くある年の夏。世界は変わった。

突如として起きた聖戦の果てに東京は死都と化し、首都は東京から霊的磁場の強い京都へと移された。

人智を超えた“存在”が繰り広げる戦いを見た人々は、その戦いの意味を理解できず、終戦後もなにが戦っていたのか、わからずじまいだった。

戦いの最中、ある者は天使を見た、ある者は悪魔を見たと言
い、終結のときに救世主が現れたという意見では一致が見られ
ている。

しかしながら、多く残された謎は謎のままであり、どちらの
“存在”が勝利を治めたのかすらわかっていない。真相を解き
明かそうとする歴史学者は今も熱い激論を交わしている。

この聖戦と呼ばれる戦いの終戦と同時期、関東には女帝と名
乗る者が巨大都市を築いた。それが帝都エデンだ。

女帝こそが聖戦の救世主だと云われるが、どちらに属してい
た“存在”なのか、それともまた別の“存在”なのか、女帝の
周りには謎が取り巻いている。

謎が多い指導者の下でも、都市は発展した。それは女帝の絶
対的な力と、彼女がもたらした“魔導”のためだ。

帝都エデンは世界政府に反対されながらも独立国家を名乗り、
魔導の力がもたらした恩恵は科学との融合により、帝都エデン
を発展させた。

眠らぬ大都市ハウジユ区はアンダーグラウンドの巣窟であり、
リニアモーターカーが停まるギガステーションハウジユがある
ことから観光客の足も途絶えない。

喧騒に満ち溢れたハウジユ区に隣接しているのが、住宅都市
であるカミハラ区だ。

カミハラ区にある帝都随一の大病院、そのほど近くにある神
原女子園高等学校。

学園の鐘が鳴り響き、放課後の喧噪がやってくる。

紅葉は学園の聖堂にいた。

円形の大きな薔薇窓から光が差し込み、聖母像の前で跪く紅葉の顔を優しく照らす。

陽に照らされる紅葉の顔は才色兼備であり、肌理も細やかに白く美しい。その“傷痕一つない”端正な顔立ちは、まるで神による造形のようであった。

優しい陽の光は暖かい。

しかし、この場所にあるのは救いの暖かさではなく、静寂の寂しさと、冷たい空気の重さ。懺悔をする紅葉の心は暗い闇に呑み込まれそうだった。

「もーみじっ！」

明るい女の子の声で世界は一転した。

名を呼ばれながら後ろから抱きつかれ、紅葉はいつものように少し顔を赤らめながら笑顔で振り向く。

紅葉の肩には友人であるつかさのニコニコ顔があった。

この女子高ではじめてできた友達。

ショートカットでボーイッシュな雰囲気のかさは性格も活発で、転校してきた紅葉に最初に声をかけたのもつかさだった。それ以来、つかさと紅葉は一緒に過ごす時間が多くなったのだ。そして毎日、放課後に紅葉がこの場所に通っていることを知っているのは、つかさただひとりだった。

「ねえねえ、早く帰る」

「うん、ごめんね、いつも待たせちゃって」

「別に気にしなくていいってば！ ウチが勝手に待ってるだけ

だしさ」

「うん」

元気よくしゃべるつかさに、紅葉は大人しく小さな声で返事をしうなずいた。

いつも夢げで大人しい紅葉だが、ここにいるときはいつも以上に元気がない。そんな紅葉の手を引いて、この場所から連れ出すのはつかさの日課だった。

つかさの手がそつと紅葉の手に乗せられる。すると紅葉の体温がほんのりと上がった。

「……つかさ？」

いつもなら強引に紅葉を外に連れ出すつかさだが、今日はいつもと少し違った。

太陽のように眩しく笑うつかさ。

「紅葉が懺悔をしなくていい日が早く来ればいいのにな」

「……うん」

そこにある笑顔を見ていると救われる。

聖堂で懺悔をしているときに、つかさに声をかけてもらう。

あの瞬間に少しだけ罪から解き放たれた気になれる。けれど、本当にそれで罪が贖えたわけじゃない。心が晴れることはなく、罪の重圧だけが増していくのだ。

罪を重ね続ける限り、この重圧は紅葉の心を蝕んでいく。

手が鮮やかな罪色に染まり、手を洗っても洗っても穢れは拭えない。罪の侵食は身体の奥深くまで達し、心が闇に蝕まれていく。

“姉”は言う、復讐を果たすまで終わらない。

妹は言う、わたしは嫌。

妹のためならば命すら捨てる姉。けれど、事に復讐となれば、“姉”は嫌がる妹の意見を聞き入れることはなかった。それが妹のためにもなることだと信じて疑わないからだ。

「紅葉？」

「んっ？」

自分を呼ぶ声によって、紅葉は現実世界に引き戻された。

そこには心配そうな顔をして紅葉を覗き込むつかさの姿があった。

「どうしたの、いつもより深刻な顔してたけど？」

「うん、なんでもないの、気にしないで……」

相手を気遣いではなく、触れられたくない秘密を隠してしまいたかった。

「紅葉がそんな顔していると気にするに決まってるじゃん」

「大丈夫、大丈夫だからねっ？」

紅葉はにこやかな顔でつかさに笑いかけた。心の奥を笑顔で隠してしまう。いつも笑顔でいれば、周りを心配させずに済む。

全て笑顔で隠してしまえばいい。

「そっか、ちょっと心配したけど、紅葉の笑顔見て安心した」

「うんうん、つかさのおかげ」

「ウチの？」

「つかさがわたしの傍で、いつも笑いかけてくれるから」

「あははは、なんかそんなこと言われると照れるよー」

髪のを弄びながら照れ笑いを浮かべるつかさの手を、紅葉の両手が優しく包み込んだ。

「ありがとう、本当にありがとうつかさ」

「そんな何度もお礼言わなくていいよ。なんで言われてるかもわかんなし」

「うん、でも、言いたかったの。つかさは大切な人だから、ずっと傍にいて欲しいから」

「ウチも紅葉のこと大切だよ。紅葉のこと大好きだもん」

この言葉を聞いた紅葉の身体は体温を上昇させ、血流が激しく流れ出し、顔をほんのりと桜色に染めた。

少し真顔になったつかさの顔が、迫るようにして紅葉の顔に近寄った。

「紅葉って本当にキレイな顔してるよね」

恋人に囁くような声を聴いて、紅葉は耳までも真っ赤にした。これ以上、近づかれたら心臓の鼓動も聴かれてしまうかもしれない。

息を呑んだ紅葉の瞳をつかさの瞳が見つめている。どこまでも澄んだつかさの瞳は魔力がこもっているようで、その瞳で見つめられていると勘違いしそうになる。

不思議な胸の感情に紅葉は戸惑った。

つかさの指先が赤みを差す紅葉の頬にそっと触れた。

「嫌、駄目っ！」

声をあげた紅葉は、自分の頬に触れていたつかさの手を激しく振り払い、怯えるようにして一步後ろに下がった。

そんな紅葉を見て、つかさがすぐに取り繕う。

「あつ、そうか、ごめん。本当にごめん。紅葉って顔に触られるの嫌いだったよね」

「いいの、悪気があつたわけじゃないでしょ？」

顔を触られるのが嫌い。

紅葉は顔に触られることを極端に嫌悪して、自分ですら顔に触れない。その徹底した異常なまでの嫌がり方から、最初はかにかわれたりもした。けれど、紅葉があまりにも嫌がり、時には泣き出してしまうことから、周りの友達たちも今では気を遣ってくれていた。

「ごめん紅葉。紅葉がキレイな顔をしてるから、ちょい気がかりなことがあつただけ」

「なに？」

「最近ね、強姦事件は流行ってるし、中でも最悪なのが女の顔が剥がされるって事件。被害者はみんなキレイだっていうから、ウチ心配でさ」

「心配してくれてありがとう」

紅葉はつかさの両手を包み込むように優しく握った。

再び見詰め合う二人。

そこへ聖堂の扉を開けて誰かが入ってきた。

「ご、ごめんなさい」

女子生徒はおどおどしながら見詰め合っている二人を見て、急に慌ててスカートを蹴り上げながら逃げ出してしまった。ハツとした紅葉はつかさの手を離し、後ろに一歩引いた。

「なにか誤解されちゃったかも。今の草薙さんだよな？」
困った顔をする紅葉。

紅葉たちと同じクラスの草薙雅。あまりしゃべったこともなく、一年生のときはその存在すら知らなかった。小柄で華奢な躰つきをしていて、いつも独りでクラスの片隅で過ごしていることが多いようだった。

誤解を解かないと明日からクラスで顔を合わせるのが気まずい。と、顔を紅くしながら紅葉は思ったのだった。

聖堂から走って逃げた雅は下校途中だった上級生の群れに突っ込んでしまった。

肩と肩が当たったことに気づき、雅は伏し目がちであたふたして謝る。

「ご……ごめんなさい」

すぐにこの場を立ち去ろうと背を向けた雅の肩が掴まれ引き戻された。

「ちよつとアンタさあ、なんか態度がムカツクんだけど」

鋭い目つきが並んでいる。

三人の女子生徒に囲まれ、雅はすぐに逃げることを諦めた。

ぶつかつたのがリーダー格だったらしく、三人組は執拗に雅を小突いてきた。

「もつとちゃんと謝んなさいよ」

代わり代わりに雅は肩を何度も小突かれ、足をもつれさせそうになりながら後ろに少しずつ下がった。

正門近くで下校途中の生徒たちも多くいるにもかかわらず、三年生にからまれて蒼い顔をする雅を皆、見ない振りをして大きく迂回しながら通り過ぎていく。

目の前の三人組よりも、雅は周りの人々を憎んだ。

どうしてみんな自分を助けてくれないの？

歪んだレンズで見ると、世界中の人々が今は全て敵に見える。こんなとき、雅を助けてくれたのは兄だけだった。

震える拳を抑えながら、雅は上目遣いでささやかな抵抗をしようとした。

だが、上級生の手が眼前に迫り、頬を握りつぶすように口をぎゅつとされてしまった。

「財布出しなよ、それで許してあげっから」

脅えた表情で雅は持つていた鞆の中に手を突っ込んだ。

そのとき、上級生の背後から誰かが声をかけた。

「放してあげてください」

凜としたその声の主は紅葉だった。

恐れることなく上級生に近づいていく紅葉に、間近にいたつかさが心配を抱いた。

「ちよい紅葉ったら、もあ！」

普段の紅葉は大人しいのに、こういうときはいつもこうなのだ。つかさよりも紅葉が先に前へ出る。

上級生は振り向きざまに雅を地面に押し倒し、紅葉に眼を飛ばした。

「なにアンタ？」

「下級生を苛めるのが楽しいのですか……武田先輩？」

紅葉の口調は明らかに毒気を含んだ喧嘩腰だった。過去にも数回、衝突をした仲なのだ。

武田朱美の悪い噂は生徒数の多いこの学校でも広く知れ渡り、暴力団の彼氏がいることも有名だった。そのため、表立って朱美のことを悪く言う者もいなければ、積極的に歯向かう者もいなかった。

しかし、紅葉は違った。

事の発端は去年の学園祭に遡る。紅葉のクラスが出していた屋台で、朱美が金を払わずに飲食物を持っていこうとしたのを、紅葉が強引に止めたのがはじまりだった。

一步も引かない紅葉の肩を朱美の横にいた仲間が小突いた。

「いつもちょっかい出しやがって」

続けてもうひとりの仲間も紅葉の肩を小突いた。

「ムカツクんだよ」

下つ端の香織と由佳。朱美を恐れていない紅葉には取るに足らない存在だった。

朱美の手のひらが高く上げられ、つかさが止めに入る間もなく、バシンと音を立てて叩かれた紅葉の頬は赤く染まった。

頬を片手で押さえた紅葉の眼が狂気を孕んだ。だが、その瞳は大きく見開かれ、驚きの表情へと変わる。

紅葉の目の前でつかさの拳が朱美の頬を抉つたのだ。

殴られるままに地面に手をついた朱美を見下すつかさ。

「ごめんウチ、フェミニストじゃないんだよねー。それにさ、

紅葉に手出したらウチが承知しないって前にも言ったじゃん？」

「覚えてないね！」

舌打ちがどこからか聴こえたのと同時に、朱美たち三人がまとめてつかさに飛び掛かった。

三対一では躲かし切れず、三発目の朱美のパンチがつかさの腹を殴り上げた。しかし、つかさは顔に苦痛を浮かべることなく、チャンス逃さず思いっきり朱美の顔を正面から捉えた。眼を剥いて脅えた表情をする朱美の鼻先で、つかさの拳は止められた。

「まだ続ける気なら殴るよ。やならさっさとウチらの前から消えて」

つかさの言葉に息を呑んだ朱美は数秒の沈黙を置いて、なにも言わず仲間を引き連れて立ち去った。これで完全に終わりとは思えないが、ひとまずは終わりだ。

機嫌良さそうに鼻で笑いながらつかさが振り返ると、紅葉が雅の怪我の手当てをしていた。

先ほどに雅が地面に押し倒された際、荒れたアスファルトで手のひらに怪我を負っていたのだ。

紅葉は白いハンカチを出して雅の傷口を押さえていた。

「草薙さん大丈夫？」

「あ、ありがとうございます」

視線を泳がせながらも雅は好意的な表情で紅葉を見ていた。その頬は照れたように少し赤みを刺している。

「わ、わたしなんかを助けてくれて……あまみや雨宮さんって優しい人
だったんですね」

「わたしのことは紅葉でいいよ。それに、あの人たちを追い払
ってくれたのは、わたしじゃなくてつかさだよ」

紅葉に顔を向けられ、つかさは照れ臭さそうにはにかんだ。

しかし、つかさに向けられた雅の視線は、紅葉に向けられて
いたような好意は含まれていなかった。

クラスでいつも独りの雅は知っていた。明るく社交的なつか
さだが、周りの人間をよく観察している雅は気づいていた。紅
葉が近くにいないと、つかさはたまに冷めた態度を取ることが
あるのだ。

今回のことも、紅葉が近くにいらなくてつかさだけだったら、
進んで雅を助けてくれただろうか？

助けてはくれるかもしれない。しかし、それを雅は好意と感
じることはできなかっただろう。

雅はつかさのことをあまりよく思っていなかった。

自分を見る雅の眼差しにはつかさも気がついていた。まるで
敵を見るような目つきだ。

そして、つかさは視線だけを動かし、地面に落ちて開いてい
る革の靴を見た。

ナイフの柄が少し見えていた。

雅はつかさの視線に気づいたのか、慌てて靴を拾い上げた。

「あの、わたし、用があるので失礼します。助けてくれて、あ
りがとうございました。ハンカチは洗って返します」

紅葉からハンカチを奪い取り、何度か頭を下げて雅は逃げるように立ち去ってしまった。

つかさの深い瞳は雅の背中を射抜くように見据えていた。

モニターにスクリーンサーバーが映し出されている。

幾重にも折り重なる赤いラインが奇妙なアートを描き出す。

部屋の明かりは点いていなかった。

真つ暗な部屋での明かりはデスクトップパソコンだけ。

モニターのライトを浴びながら、青年は椅子にもたれ掛かりながら目を瞑り、遙か遠くに意識を集中させていた。

「草薙雅……解せないな。あの瞳、僕らに似ている」

青年は紅葉がつかさに隠している秘密を知っている。

しかし、紅葉はつかさの秘密を知らない。

フェアではない。それは“紫苑”が紅葉たち姉妹を拾った、

その瞬間からだ。

復讐で胸を燃え滾らせながらも、それを成就できぬまま、死に絶える運命にあった姉妹の命を救ったのは紫苑だ。

妹の生を妄執に駆られ強く願い、紫苑に懇願したのは“姉”

の紅葉だ。

紅葉の妹への愛が紫苑の心を動かしたのか？

紫苑はそれを否定する。

紅葉が妹を愛しているのは事実だろう。しかし、あのとき紫苑が感じたものは、溶岩が煮え滾るような憎悪の念。そうではなくて紫苑は姉妹を救わなかった。

紫苑と呉葉が共通し、固執する胸中の念　それは復讐。

「僕らは似ている。共通の敵を持ち、相手を地獄に叩き墮とすと誓った。だから、僕は君に手を貸し、君も僕の為に動く」

目を瞑りながら青年は呟いた。

たとえ自分が息絶えようと、復讐を終わらすつもりはない。

それを紫苑よりも強く魂に抱いているのは呉葉だ。彼女自身がそれを一番わかっている。

愛する者への想いが、敵への憎しみを呼び、復讐の渦をつくった。

呉葉は妹の紅葉を想い、彼は誰を想い戦う？

「……いつか必ず」

その言葉は青年の脇のベッドで安らかに眠る傀儡に向けられたものだった。

白いドレスに身を包み、人間と見間違うほどのしなやかな身体つきをした傀儡。

しかし、その傀儡には顔がなかった。

指先を世話しなく動かし、そこに意識を集中させていた青年の耳が微かに気配を感じた。

「アリスか？」

目を瞑りながら青年が尋ねると、ドアを開けて小柄な少女が部屋に入ってきた。

「失礼いたします愁斗様」

名を呼ばれ、覚醒したように愁斗は瞳を開けた。

メイド服を着た金髪の少女。カールした長いまつ毛の下で輝

く大きな瞳は魅惑的に蒼く、フランス人形のような顔立ちは創られたように端整だ。

愁斗は指を細かく動かしながらアリスに尋ねる。

「なにか用かい？」

「またお人形で戯れているのでございますか？」

外見はいたいけな少女なのに、その音声には毒がこもっていた。けれど、愁斗は気にしたふうもなく艶然としている。

「僕が“つかさ”を操るのがそんなに気に喰わないのかい？」

「いいえ、滅相もございません」

即答でアリスは否定した。

「ただ、つかさ様は大嫌いでございます」

「うふふふ、そうか。つかさと僕はあくまで別の人間だ。けど、紫苑と僕は二人でひとつ。絶対運命共同体だ」

「わかっております」

「ならいいんだ。さあ、おいでアリス」

誘うように片手を伸ばした愁斗の手を、アリスが舞踏の申し出を受けるように取った。

そして、そのままアリスは抱き寄せられ、愁斗の膝に寝かせられた。

「つかさはさつき紅葉と別れ、今眠りについた」

髪を撫でられながらアリスは微笑んだ。

今だけは愁斗の両手はアリスに構っている。それがアリスにとって至福のときだった。

しかし、アリスは愁斗との関係が一線を越えないことも知っ

ている。二人の関係は主従関係であり、上辺だけの愛しか注いでくれない。

主人が本当に愛しているのは世界でただひとりだけ。

アリスの蒼い瞳はベッドで眠る傀儡に向けられ、夢想は刹那にリアルへと引き戻された。

「愁斗様、ご用件を申し上げるのを忘れておりました」

「どんな？」

アリスの髪を撫でながら、愁斗は優しい眼差しをしていた。

「源^{みなもと}家を襲撃した一人の潜伏先がわかりましてございます」

「やつと一人目か。名前を探るまでが長かったけど、さすがは帝都の情報網だね。それでどこに？」

「ホウジユ区のマンションで愛人と同棲中でございます。愛人の名前は草薙^{さなえ}早苗、マンションの名義はその愛人の物になってございます」

「……草薙」

その苗字に愁斗は聞き覚えがあった。

運命か偶然か？

思いを馳せ、遠い眼差しをする主人にアリスは疑問を抱く。

「なにかございましたか？」

「いいや、別に。その草薙という女、彼女もD^{ダイクネスクライ}Cの関係者かい？」

「まだ草薙早苗までは調べてございません」

「そうか……。とにかく紫苑に行かせよう。そこで女に尋ねればいいこと」

愁斗が指先を動かすと、ベッドで眠っていた傀儡がゆっくりと上体を起こした。

覚醒める傀儡 紫苑。

つかさとエレベーターで別れたのが、つい先ほどだったように感じる。

夕食を済ませ、シャワーを浴び、趣味の裁縫を終わらせた紅葉はベッドに潜った。

ベッドの周りには紅葉が作ったぬいぐるみたちが並んでいる。その中に似つかわしくない恐ろしい形相をする 般若面。

紅葉はそっと立て掛けてあった 般若面 を手に取った。

般若面 を持つ手からエネルギーが吸われ、換わりに“姉”の意識が紅葉の中に流れ込んでくる。

《こんにちは紅葉》

「うん、こんにちはお姉ちゃん」

優しい“姉”の声を聴くと、紅葉は涙が出そうなほどほっとする。

本当はひとりでいるときは、ずっと“姉”と話していたいが、摂理は思い通りには働かない。

“姉”との会話は 般若面 に触れなければならぬ。すると、般若面 に紅葉のエネルギーが流れ、“姉”は眠りから覚める。眠りから覚めるというのは例えて、実際は意識があるが、動くことも話すことも聴くこともできない。ただ、考えることと超感覚で感じるだけだ。

エネルギーを吸われることによって、“姉”との会話はとても疲労感の伴い、一時間も会話をすれば、汗だくになるほどの疲労感に襲われる。話し込んでしまった翌朝は起きるのが辛く、学校に遅刻しそうになったことも何度もあった。

会話はたわい無いものが多く、紅葉が日記のように出来事を話していくことが多い。

友達に教えてもらったおもしろい話、授業のことなどを話し、そして話は聖堂でのことになった。

「そうだ、今日ね、つかさに大好きって言われちゃった。それを聞いたら、凄いドキドキして、不思議な気分になっちゃった」

《……そうなの》

「それでねそれでね、つかさの顔が近づいてきて……キスされるのかと思っちゃった。わたしって可笑しいでしょ、キスされてもいいかなって少し思っちゃったし」

《そう》

少し赤面しながら話す紅葉に呉葉はつまらなそうに返事をした。

妹の心の中でつかさが日に日に大きくなっていくことを“姉”は感じていた。いつか妹を奪われてしまうのではないかという、そんな恐怖すら“姉”は抱いていた。

紅葉と呉葉　姉妹の絆は絶対だ。

しかし、昔の紅葉だとしたら呉葉だけだったのが、今では呉葉が一番になってしまった。

“姉”の存在は今やオンリーワンではなくなってしまったのだ。

つかさに嫉妬する自分に虚しさを感じるが、それでも“姉”は嫉妬せずにはいられなかった。

《憧れよ、紅葉はつかさに憧れているだけよ》

「でも……」

《アタシたちは男を憎んでいる。だから余計に勘違いしてしまっただけよ。アタシたちは二人きりなの、決してアタシは紅葉を裏切らない》

「つかさだってわたしのこと裏切ったりしないのに……今日だってわたしのこと助けてくれた」

紅葉の声は弱々しく、瞑った瞳から薄っすらと涙を滲ませていた。

「今日もまた武田さんと喧嘩になっちゃって、そのときもつかさが助けてくれたの」

《またあいつ、なにされたの？》

「ついにビンタされちゃった」

《殺してやる！あの女、ズタズタに刺し殺してやるわっ！》
紅葉の躰が大きく跳ねる。“姉”の憎悪が紅葉の心に激流のように流れ込んできた。精神的な力なのに、思わず躰まで押されそうになってしまふ。

般若面に宿った“姉”の魂。その魂は般若面の顔に相応しく、憤怒と嫉妬、怨念が渦巻いていた。けれど、紅葉は優しい“姉”を知っている。

世界で誰よりも優しくかった姉。

いつから姉はこんなふうになってしまったのだろうか？

果たして 般若面 に宿った“姉”は本物の姉なのか？

過去の悲劇を思い出すたびに、紅葉は端整な顔のその下で、傷の疼きを感じた。

揺らめく炎と彩られた罪色が重なり合う。

「お姉ちゃん……わたし……こんな面を掘ってはいけなかった

……お姉ちゃんを黄泉返らせてはいけなかった」

《なんていうの！ 紅葉はなにひとつ間違ったことをしていないわ！》

「でも、わたしは叔父さんを殺した！」

《それは……アタシの仇を……》

「わからない、わからないよ！ 気づいたら叔父さんを八つ裂きにした……」

心の底から涙が溢れ出た。胸が苦しくて息が詰まり、紅葉の眼からは涙が止め処なく零れ落ちた。

“姉”はその涙を拭ってあげることができなかった。

《紅葉が悔いることではないわ。あんな豚、八つ裂きにされて当然なのよ。あの豚は紅葉の前でアタシを犯して楽しむような外道だったのよ、八つ裂きぐらいじゃ足りないわ！》

紅葉は 般若面 を包み込むように胸で抱いた。

「お姉ちゃん、わたし疲れちゃった……もう、寝るね」

《……おやすみ、愛しているわ紅葉》

「おやすみなさい」

般若面 はぬいぐるみたちの中に立て掛られた。

いつも以上に疲れてしまったように感じる。

紅葉は膝を抱え込んで頭から掛け布団を被った。

意識はすぐに闇の中に堕ちた。

世界は深く暗い闇の中で閉ざされ、紅葉は世界でたった一人になっってしまった。

夢の中で呆然と立ち尽くす紅葉。

暗くて、怖ろしくて、胸が締め付けられる。闇はヒトの心を巢食い、古代から畏れられ、ヒトは光で闇を照らし続けた。

漆黒の中に紅蓮が灯り、空気が水面のように揺れた。

ケタケタと嗤う声。

紅い光に包まれた黒い猫がそこにはいた。

「久しぶりだな紅葉、どうだい調子は？」

男とも女とも判断つかないしゃがれた声で猫は言い、またケタケタと嗤う。

この黒猫に名前はない。だから紅葉は“名無し猫”と呼んでいた。

「調子なんて聞かなくても、あなたはわたしのことを全部知っている。あなたいつたい何者なの？」

「ケケケツ、さあてね、俺様は俺様だ。俺様以外の何者でもない」

自分の夢の中に度々現れる“名無し猫”。

ならばこれも紅葉の一部なのか？

そう思っているのならば、『あなたはいつたい何者なの？』

とは問わない。

“名無し猫”は紅葉の知らないことも知っているのだ。

「おい、そういうえば今日、武田朱美に叩かれただろ？」

「だからなに？」

「ムカついただろ、相手のこと殺したいと思ったんだろ？」

「そんなこと思っていない！」

「嘘つくなよ、俺様はおまえにことは全部知ってるんだ。俺様が代わりに奴らを殺してやるよ」

「駄目、そんなこと駄目ぜつたい！」

紅葉は恐れた。

夢の住人の戯言に、なぜそこまで恐れるのか 否、それが戯言ではないからだ。

“名無し猫”が殺すといったら、必ず人が死ぬ。

もちろん夢の住人である“名無し猫”が、直接に手を下すわけではないが、事故、殺人、自殺、あらゆる理由で今まで何人も死んだ。

人の心や運命を操る。もしかしたら、今と同じように他人の夢枕にも立っているのかもしれない。そんなふうには紅葉が推測していた。

ケタケタを嗤う声が耳にへばり付く。

「まずは誰を殺して欲しい？」

「誰も殺さないで！」

「そうだな、リーダーの朱美はメインディッシュに取って置くか。周りから殺していったほうが恐怖を煽れるだろ？」

「なんで、そんなにわたしのことを苦しめて楽しいの？」

「ああ、楽しいね」

嫌みつたらしく嗤い、「名無し猫」は牙を剥いて叫ぶ。

「まずは香織を殺す！」

息を荒立てながら、紅葉は眼を覚ました。

べつとりと汗が全身から滲み、不快感が肌を侵す。

このままでは香織が殺される！

息を整えながら、紅葉はベッドから起き上がり、立て掛であつた 般若面 を手に取つた。

「お姉ちゃん、力を貸して！」

茶色いローブを羽織り、白い仮面はマンションの三階あたりを見上げていた 紫苑だ。

マンション敷地内の芝生から、三階に潜む住人の部屋を伺っていたのだ。

部屋はカーテンで隠され、中の様子までは地上から察することができない。けれど、明かりが漏れていることから、おそらく中に人はいるのだろう。

その予想は当たっていた。

部屋の中には男と女、それもベッドの上で裸になって抱き合っていた。

四十前の男は若者に負けぬ鍛え抜かれた体躯を持ち、逞しい背中には悪魔に引つかかれたような十字の傷があつた。

傷痕を隠すように彫られた刺青。左右対称の蝙蝠の羽と、そ

の中心に『D』と『C』の刺青が彫ってあった。

魔導結社ダークネスクライ。

D C はダークネスクライの頭文字を取った略称であり、帝都を中心に暗躍する魔導結社の名前だった。その活動は主に帝都政府へのテロ行為。過激なものが多く、住民が犠牲になることをいとわない最悪のテロ集団だ。

帝都政府からD C の幹部たちは、『生死を問わず』で懸賞金つきの指名手配をされている。だが、その幹部の多くは顔や経歴が一切不明の者も多く、顔がわかっている者も本当に幹部なのか怪しい部分が多い。

今、女を抱いている男はD C の元団員で、通り名は“金剛^{こんじょう}”。肉体を強化する魔導に長けていることで知られていた。“金剛”に跨る女は自ら腰を動かし、積極的に“金剛”を誘っている。

女は一方的に燃え上がっているようで、“金剛”は付き合わされているだけのようだった。

「ねえ、いつものように奥まで衝いて！」

激しく女は誘うが、“金剛”は疲れたように女の腰を両手で持ち上げ、ついに女を自分の上から退かしてしまった。

「あたしまだイッないのよ！」

叫ぶ女を尻目に“金剛”はズボンのチャックを閉めてベルトを通していた。

「だからなんだ？」

野太い声で威圧する“金剛”に女はヒステリーを起こした。

「この甲斐性なし！ あんたの股間についてるモノは女もイカせられないお飾りよ！」

「ふん、この淫乱売女が」

「木偶の坊、あんたなんか死んじまいな！」

「金剛」はまったく動じず、つまらない話題を変えた。

「お前の探していた子供が見つかったぞ」

その言葉を聴いた女は腹の傷をなぞるように擦った。

傷を見るたびに腸が煮えくり返る。

「この傷見てよ、自分の子供に刺されるなんて信じられる？」

「その話は何度も聴いた」

「何度言っても気がすまないのよ。奴隷がご主人様に逆らって

いいわけないじゃない」

女の話に耳を傾けずに、「金剛」はなにかを察して身構えていた。

ベランダに続く窓硝子が弾け飛び、影が部屋の中に飛び込んできた。

女は突然のことにシートを手繰り寄せて体に巻いた。

白い仮面の主は女に興味も示さず、巨軀を持つ「金剛」に意識を集中させていた。

「通り名は「金剛」 D C の元団員だな？」

氷のように澄んだ紫苑の音が響き渡った。

相手を敵と知り、「金剛」はすでに手足に力を込めている。

「D C なんて聞いたことねえな」

「ならば思い出せ、一〇年ほど前のことだ」

「昨日の晩飯も覚えてない」

「男を連れ去り、その妻を殺し、家に火を放った。それが晩飯と同じ価値か？」

「そうだ」

「金剛」は下卑た笑いを浮かべた。紫苑の示唆で「金剛」は過去を鮮明に思い出したのだ。それに紫苑も勘付いた。

「思い出したか？」

「ああ、いい女だったな。ケツから犯してやったあとに首を絞めて殺した」

「外道が」

紫苑の手から輝線が放たれ、巨軀から象の鼻のような太い腕が床に落ちた。

絶叫があがり、カーペットに広がる赤い血。

「金剛」は血が噴き出す腕を押さえながら床に両膝をついた。その額には脂汗がべつとりと滲み出している。

全身を痙攣させる「金剛」の前に凜然と立つ紫苑。その無表情の仮面が悶絶する。「金剛」を見下している。

「ひとまず止血してやろう」

紫苑の手が神速に動き、切断された「金剛」の腕を妖糸で縛り上げた。

「簡単には殺さない。お前を恨んでいる者は他にいる」

冷酷な仮面を見つめる「金剛」の瞳は震えていた。鍛え上げられた巨軀も今では小さく見える。

「知ってることなら話してやる。だがな、あのときの俺はまだ

下つ端で、上に言われるがままに動いていたんだ。詳しい話までは知らねえよ」

「源家を襲撃したメンバーの数と名前。そして、襲撃の理由」

「メンバーは俺を含めて三人だ。俺と、鴉」こと影山彪彦かげやまあやひこ、それに“傀儡士”の秋葉蘭魔あきはらんまだ」

「……そうか、噂は本当だったということだな」

誰が源家を襲撃したのか、すでに噂として紫苑の耳に入っていた。けれど、それを信じられずに今まで引きずってきた。襲撃のメンバーだった男の言葉を聴いても、まだにわかに信じがたい。

沈黙し動かなくなつた紫苑の隙を衝いて女が部屋の外に逃げようとした。

だが、愁斗はそれを許さない。

「動くな、この距離ならば確実に殺せる。お前にも訊きたいことがある」

輝線が女の鼻先を通り過ぎ、女はぴたりと足を止めて床にへたり込んだ。

「あたしはただの愛人だよ。その男が過去にやったこととはなんの関係もありやしなさいさ」

「別件で訊きたいことがある。名前を草薙早苗と言つたな、雅という女を知らないか？」

「訊いたこともないね」

注視したが嘘を付いているような様子はなかった。拷問してたしかめる方法も残っているが、そこまで興味のあることでは

い。紫苑の仮面は“金剛”から放されていないのだ。

「まだ襲撃の理由を聴いていない」

「俺は詳しい話は知らないっていったる？」

頭から水を被ったように汗で髪の毛を濡らしている“金剛”

の眼は憔悴しきっている。それでも紫苑は追求をやめない。

「知っていることだけでいい。現場にいてなにも知らないということはないだろう？」

「さらった男は面作り師だった。それもただの面作り師ならD

C が目を付けるはずがねえ。そいつの彫る面はただの面じゃねえって話だ」

「それだけか？」

「十分話したじゃねえかよ！」

「そうか……お前を恨んでいる者は他にもいると言ったが、やはりその者にお前を引き渡すわけにはいかなかった」

“金剛”の首を刎ねようと紫苑の手から妖系が放たれた。だが、“金剛”の首が落ちることはなかった。

「残念だったな。ここに乗り込んできたってことは俺の技も調べて来たんじゃないのか？」

下卑た笑いを浮かべ、急に立ち上がった“金剛”は紫苑にタツクルし、吹っ飛んだ紫苑を尻目に部屋の外へと逃走を図った。

“金剛”の名に相応しい金剛力で紫苑は壁に叩きつけられ、苦痛も漏らさずすぐに体勢を整えたが、壁に叩きつけられたタイムラグで“金剛”を部屋の外に出してしまった。

紫苑は部屋に草薙早苗を残し、マンシヨンの廊下に飛び出し

た。

象が走るような地響きが聴こえる。

“金剛”の背中を追って紫苑が駆ける。

古いマンシヨンは繁華街が多いホウジュ区の外れにあった。

近くには細かい路地も多く、夜の今に逃げ込まれたら見失う可能性もある。

マンシヨンの廊下に銃声が響いた。

三八口径の銃弾が紫苑のロープに背後から風穴を開けた。

紫苑の後方でリボルバーを構え、足を広げて立っていたのは草薙早苗だった。

銃弾を喰らっても怯まない紫苑に二発目の銃弾が放たれた。

だが、それは紫苑の横の鉄柱に弾かれた。

狙撃手の相手をしている暇などない。紫苑は廊下の鉄柱に妖糸を巻き付け、その妖糸をロープのように使って三階から駐車場に降りた。

辺りに“金剛”の気配はない。

聴こえる音は自分を狙う銃弾とヒステリックな女の声。

魔気を帯びた風が流れてくる。紫苑はその方向へと足を進め、シャッターを下ろした店が並ぶ道へと出た。

異様な気配がする。

商店と商店の間の細い路地の奥からだ。“金剛”の気配ではないとわかったとき、路地の奥から帽子を目深に被ったＴシャツ姿の男が駆け出してきた。

路地から出てきた男は紫苑と目を合わせることなく、紫苑も

また男を追う理由もなかった。

男が去った直後、暗い路地の奥から女の叫び声があがったのだ。

紫苑がすぐに駆けつけると、汚い地面に裸体を晒して横たわる女のすぐ横で、なんと紅葉が蹲っていたのだ。

頭を抱えて蹲っていた紅葉は人の気配に気づき、顔を上げて驚いた表情をつくった。

「どうして……紫苑さんが？」

「同じ質問を返す」

淡々と紫苑は言った。

裸体の女の躰には大量の白濁した液がぶちまけられ、辺りは雄臭かった。

女の首には指の痕が痣になってありありと残っている。

紅葉は“名無し猫”の予告殺人を阻止しようと香織の行方を捜していたのだ。そして、彼女はここで屍体となって見つかった。

紫苑が呟く。

「近藤香織か……」

その呟きを紅葉は聞き逃さなかった。

なぜ名前を知っているのか？

それを問いたです前に、紫苑は深い闇の中へと姿を消した。

翌朝、寝不足で覚醒しなかった頭が、ニュースの報道で起こされた。

被害者は所持品から神原女学園高等学校に通う三年生の近藤香織さん。

アナウンサーの声がそう告げたとき、紅葉は重たい頭を抱えた。

続けて予想していなかった事態が起きた。

猪原由佳が連続猟奇殺人鬼に殺されたニュースが流されたのだ。

三人組のうち、二人までもが殺されていたのだ。

“名無し猫”は近藤香織の殺害を予告したが、猪原由佳まで殺されていたのだ。紅葉は自分の読みが甘かったことを悔やんだ。

いつも紅葉は“名無し猫”に出し抜かれる。

交通事故で運転手を殺してやると“名無し猫”が言ったときも、死んだのは運転手だけではなく、被害者の女性は一命を取り留めたが、宿していた生命が流産するという悲劇が起きた。

あるときはある人物を自殺に追い込んでやると言い、その人物は“名無し猫”が言ったように屋上から自殺をした。だが、屋上から落ちた人物は死なずに、地上でその人物に不幸にも当たってクッションになった子供が死んだ。

ヒントを与えられながらも、いつも不幸を食い止めることができない。紅葉はそのたびに自分の無力さを知り、心が闇に堕ちていきそうな気分になる。

紅葉と“名無し猫”の間には、ひとつの約束事があった。“名無し猫”の存在は決して他人に口外してはいけない。それを

破ったとき、紅葉の大切なモノが消える。ただの脅しかもしれないが、もしも本当だったらと考えると、紅葉は“名無し猫”との約束を破ることができなかった。

その約束が紅葉をさらに苦しめる。

問題を自分の中だけに抱え込み、誰にも相談することができない。一番頼りにしている“姉”にすら隠し事をしなくてはいかなかった。

落ち込んでいる場合じゃない。

紅葉は 般若面 を手に取った。

「お姉ちゃん、行ってきます」

《いつてらっしゃい、紅葉》

“姉”が寂しくないように、手作りのぬいぐるみたちの中に般若面 を置く。

鞆を持って紅葉は玄関を駆け出した。

エレベーターで降り、マンションの外に出ると、いつもの笑顔が紅葉を出迎えた。

「おっはよ、紅葉！」

空は生憎の曇り空だったが、つかさの笑顔は太陽のように眩しい。

「おはよう、つかさ」

朝靄が住宅街を包み、幻想的な雰囲気醸し出しているが、この霧はホウジユ区の瘴気、マドウ区の魔気、そしてミヤ区の結界風がぶつかり合って発生しているのだという。

紅葉たちが歩いているこの場所はカミハラ区だが、ちょうど

隣接した三つの区に挟まれた中心に位置しているのだ。そのため、夜に増幅したエネルギーが朝になって流れ込んできて霧と化す。人体に害を及ぼす霧であるが、帝都に長年住んでいる者には、抗体ができているために無害なのだという。

学校に向かう道すがら、紅葉は昏い顔をしてつかさに尋ねる。

「ねえつかさ、今朝のニユース見た？」

「あの人気歌手が実は獣人だったっていう？」

「ううん、それではなくて、近藤香織さんと猪原由佳さんが殺されたニユース」

「あー、あれねー。ちよつとビックリだったよね、まさか二人が今流行の殺人鬼二人に殺されるなんて」

「それも同じ日に……偶然なのかな？」

偶然にしては出来過ぎている。やはり“名無し猫”の差し金なのだろうか？

「てゆかさ、あの二人が死んだのに、リーダーの武内はしぶとく生きてるよね」

知り合いが死んだというのに、軽く笑うつかさの口調はまるで他人事だ。

紅葉は殺されていた近藤香織の屍体を目の当たりにしてしまった。紫苑が先に姿を消したように、紅葉も誰かに見られて事件に巻き込まれる前に現場を離れた。だから、長く屍体を見ることはなかったが、白目を剥いて苦しそうに口を開け、変わり果てた香織の屍体は、いつまでも瞼の裏に焼きついてしまっている。

紅葉の手は人を殺めたことがある。

初めて殺した相手は両親を失った姉妹を引き取った叔父。そのときのことは記憶になく、滅多刺しになっている叔父を見て、自分が殺したことに紅葉は気がついた。

そのあとも幾度となく紅葉の手は罪色に染まったが、すべて般若面 を被っているときだった。

紅葉は 般若面 を被っているときの意識がない。そのために殺しの記憶を持っているのは“姉”の呉葉だ。だが、紅葉の手が穢れていることにはわがりがない。

互いに支え合ってきた姉妹だからこそ、紅葉は“姉”の罪を自分の罪として受け止めていた。いつも放課後、学園の聖堂で祈りを捧げているのはそのためだ。

大きな帝都病院の横を通り過ぎ、同じ制服を着た生徒たちが増えてきた。

ほどなくして学園の正門が見えてきた。

二人が歩く前に知り合いの後姿があった 草薙雅だ。

紅葉が声をかけようと駆け寄ると、声をかける前に雅が振り返り、二人の姿を見た雅は逃げるように早足で歩いていってしまった。

教室に入ってから角の席に座る雅に紅葉が声をかけた。

「おはよう、草薙さん」

「お、おはようございます」

背中を丸めて雅は震えていた。

「震えているけれど、大丈夫？」

優しく尋ねた紅葉に雅は席から勢いよく立ち上がって喚く。
「心配しないでください！ わたしは、わたしなら平気ですから、平気なんです」

とても平気には見えない。取り乱しているのは明らかで、震えた声は怒りではなく脅えのようだった。

頭を抱えて雅が廊下の外に歩き出す。それを止めようと紅葉がすると、雅は血走った眼で睨んできた。

「わたしは平気ですから、少し保健室で休んできます」

「ならわたしもついていく」

「ひとりで平気です。わたしはひとりで平気なんです！」

雅は髪の毛を掻き乱しながら廊下を走っていつてしまった。

呆然とする紅葉の横につかさがやって来た。

「どーしちゃったんだろね？」

「わからない、けれどなにかに脅えていたみたい」

紅葉は近藤香織と猪原由佳が死んだニュースを雅に尋ねるつもりだった。けれど、あんな状態では下手に刺激しないほうがいいだろう。

柳眉を眉間に寄せながら紅葉は自分の席に着いた。

才色兼備な紅葉が難しい顔を見ると、世界がひっくり返るような大問題を考えているように見えてしまう。あまりの大問題を抱えているようで、力になってあげたいという言葉すらかけられない。

しかし、つかさは気軽に声をかける。

「なーに考えてるの？」

「二つの事件のこと。近藤さんを殺したのは連続婦女暴行魔で、現場には過去の事件と同じ精液が残っていた。殺しの手口は過去の被害者たちと同じで強い力で絞殺」

「同じ日に殺された猪原由佳は別の連続猟奇犯の犯行でしょ？」

「そうなの、こっちの殺人鬼は女性を襲い、乳房や性器を抉り、顔の皮を剥ぎ取ってどこかに持ち去っている」

「連続殺人鬼って自分のポリシーみたいなもの持つてるから、犯行の手口は一貫してるって言うのね。猪原と近藤が友達同士で地獄送りにされても、犯人はまったく別人だよ。警察も二つの事件をまったくの別件で扱ってるらしいし」

それは紅葉もわかっている。けれど、同じ日に三人組の二人が殺され、「名無し猫」も事件に絡んでいる。だから事件にはまだ先があるように思えてならないのだ。

「名無し猫」にまた出し抜かれそうで怖いのだ。

不安な表情をする紅葉の手をそとつかさが握った。

「大丈夫？」

「う、うん」

握られた手が熱を運び、つかさの瞳に見つめられると安心する。この妙な感覚を「姉」は懂れだと言った。果たしてそれが本当にあっているのか、紅葉にはわからなかった。

人が多い教室だということもあり、紅葉はさりげなくつかさの手を退かした。あのままだったら顔まで赤くなつて周りに気づかれてしまう。

「大丈夫だから。でも、気になるの……事件のことが。あとで武田さんに会いに行こうと思うの」

「やめときなよ！」

しかし、三人のうちの二人が死んだ以上、残った一人になにか起きないと言えなかった。

自分は事件に巻き込まれてしまった。紅葉はその運命を受け止め、事件を追うことを心に深く誓った。

雅は保健室には行かず、無断で学校を早退してしまっていた。靴は教室に置いてきてしまったが、今からでは取りに戻れない。

教室にはもう行きたくなかった。

学校にも戻りたくない。

周りの生徒たちがみんな自分を変な眼で見ているような気がする。そんな気がして雅は耐えられなかったのだ。

このまま家に帰ろうとか、それともどこか遠い場所に行こうか、迷いながら雅は歩いていた。

学校の制服を着て昼間から歩いても不審に思う者はこの街にはいない。

大きなゲームセンターの前を通り過ぎそうとしたとき、開いた自動ドアからカップルが出てきた。

雅は躰を強張らせた。

ゲームセンターから出てきたのは、武田朱美とその彼氏だったのだ。朱美の彼氏といえば、暴力団と噂されている彼だ。そ

の風貌は肩幅も広くがっしりした身体つきでも、眼つきは狼のように鋭い。

朱美は雅を見つけた途端、早足で近づいてきて胸倉を掴んだ。「昨日はおまえのせいであんなに殴られたじゃねえか！」

第一声から朱美はキレていた。その左頬には特大のガーゼが張られている。

胸倉を掴まれて脅えきった雅は眼を泳がせて唇をわなわたと震わせた。

「う、ううう、う、ごめんなさい」

「この傷の治療代出しなよ」

「あの、お、お財布は学校に置いてきてしまいました」

無用心にも雅は鞆ごと財布を学校に忘れてきてしまっていたのだ。けれど、朱美がそんな言い分を信じるはずもない。

「嘘付くんじゃないよ！」

朱美の左手が高く上げられ叩かれるとわかってても、胸倉を掴まれたままの雅にはどうすることもできず、強烈な平手打ちを頬に喰らって口から唾が飛んだ。

唾は運悪く朱美の顔にかかり、激しく朱美を激怒させた。

「あんた誰に向かつて唾吐いてんのよッ！」

再び振り上げられた朱美の手首を握ったのは大きな手だった。その手の持ち主はなんと朱美の彼氏だった。

「おい、それくらいでやめとけよ」

止めに入る優しさを見せる彼氏だが、その口元は嫌らしく歪んでいた。

「財布がないっつーなら、別の方法で払ってもらえばいいだろ」

彼氏がなにをしようとしているのか朱美はすぐに察し、やはり朱美も嫌らしく笑みを浮かべた。

朱美の彼氏は脅える雅に顔を近づけて眼を飛ばした。

「おい、黙ってついて来い。可笑しな真似したり逃げたりしたら、どこまでも追いかけて殺すぞ！」

雅は電気が走ったように身を大きく震わせ、こくりと小さく頷いて見せた。

朱美が顔で通りに向こうを指した。

「あっちにあるカラオケボックスでよくない？」

「そうだな」

朱美の彼氏も同意し、雅は腕を痣ができるほど強く握られ、引きずられるようにしてカラオケボックスの店舗があるビルまで連れて行かれた。

上へ向かうエレベーターの中で朱美の彼氏が雅にドスを利かせて囁く。

「店員に変な目で見られねえようにしろよ」

エレベーターのドアが開き、雅は動悸を抑えられなくなっていた。

特に意図もなく店員の目が向いたときも、雅は挙動不審に前髪で目を隠すように瞬時に俯いた。

三人は個室に案内されて店員がいなくなると、立ったままの雅を朱美が小突いてソファアに座らせた。

「なにされるかわかってよな？」

朱美に訊かれて雅は何度も首を横に振った。

「なら俺が今から教えてやるよ」

舌なめずりをした朱美の彼氏が雅の上に乗ろうとしてきた。

瞬きもしない雅の瞳に映る野獣の顔。その顔を雅は他にも知っていた。同じ眼をした野獣に雅は何度も犯された。

こっちの獣のほう人間らしい顔をしていると気づいたとき、雅の気持ちは幾分か余裕ができた。けれど、雅は知っている。

こういう男は嫌がったフリをしたほうが燃えるのだ。

「止めて、イヤ……触らないで！」

一生懸命、雅は迫真の演技をした。

嫌がる雅を見て朱美があざ笑っている。

「処女のはずないでしょ？」

馬鹿にした言い方だ。

朱美はケータイを取り出して、カメラ部分を雅に向けた。

「せっかくだから動画を撮ってネットにばら撒いてやるうかし

ら」

「お願いやめて……」

涙ぐむ雅の股座に大きな手を伸ばし、朱美の彼氏は驚いたように口を半開きにした。

雅が艶笑し、大声で叫ぶ。

「お兄ちゃん助けて、お母さん助けてー！ーッ！」

朱美は眼を剥いた。

絶叫があがるが、防音の個室から廊下に響くことはない。

返り血を浴びた朱美はあまりの惨劇に気を失ってしまった。そのとき、個室でなにが起こったのか？

数時間後、店員が呼んだ警察官がこの部屋に駆けつけた。個室に踏み込んだ瞬間、異臭が血の海から臭い立った。

血の海に横たわる裸の男女。

朱美とその彼氏が死んでいた。

床に浸る血は全て男のものらしく、首を噛み千切られ、性器も消失していた。

朱美は犯された様子で、大量の精子をぶちまけられていた。そして、顔の輪郭には爪で付けられたような引っかけ傷がいつも付いていた。

後の鑑識でわかることだが、現場に残されていた精子は、二ユースでも取り沙汰されている“あの”現場に残っていたものと同質だった。そう、近藤香織をレイプして殺害した婦女暴行魔と同じものだったのだ。

しかし、今回の事件が起こったことによって謎が増えてしまった。

男も一緒に死んでいた。それも躰の一部、特質的な性器というものが消失していた。加えて、女は犯されただけではなく顔に傷を残されていたのだ。

今まで同じ手口を守って犯行に及んでいた犯人だけに、今回の犯行には疑問が提唱され、捜査方針の転換も迫られる事態だった。

そして今まで現場の証拠と、現場付近で度々目撃された帽子を目深に被った男だけが事件の手がかりだった。それが今回、重要な参考人がいることが店員の証言でわかったのだ。殺された男女と一緒にいた女子高生だ。

もちろん現場にはその女子高生の姿はなく、店員もロビーを通っていないと証言する。

廊下の奥の非常口が開いていたことから、そこから外に出てしまったのだと推測された。

だが、なぜ姿を消さなければならなかったのか、それは女子高生を見つかるまでわからなかった。

カラオケボックスから家に逃げ帰って来た雅は、なにも見えない真つ暗な部屋で二人に苛まれていた。

「許してお兄ちゃん、怒鳴らないでお母さん」

闇に閉ざされた部屋に雅の声だけが部屋に響いた。すると、野太い男の声が返ってきた。

「お前はオレのモノなんだ。それを他の野郎に抱かれようとしやがって」

「違う、お兄ちゃん聞いて、わたしはお兄ちゃんのモノです。わたしが愛してるのはお兄ちゃんだけなの」

鼻を嚙る雅の声を掻き消して年配の女がしゃべる。

「あんたって子はすぐ泣くんだから、泣き止まないと殴るわ

よ

「やめて、殴らないで！」

「すぐに脅えた声を出して、あんたってほんとに弱虫な子だね。あたしの子供とは思えないよ。ひとりじゃなんにもできない子なんだから」

「……わたしひとりでも平気だもん」

「あたしとこの子が助けなかつたら、今ごろどうなっていたか考えな！」

お母さんに怒鳴られ、恐れる雅は部屋の角で体育座りをして小さくなつた。

いつもこうだ。雅はお兄ちゃんとお母さんにひとりじゃなにもできないと思われている。昨晚も二人に苛まれ、今朝の学校では紅葉や他のクラスメートの前で取り乱してしまった。

全てお兄ちゃんとお母さんがいつも傍に付きまといっているせいで。だが、雅に反抗するような勇氣はない。力にモノを言わせるお兄ちゃんと、怒鳴つてばかりのお母さん。雅の心は恐怖によつて支配されていた。

お兄ちゃんを昨日の話を掘り返してきた。

「昨日だつてお前のためにあいつを犯して殺してやったんだぞ」

その言葉にお母さんも続く。

「あたしだつてあなたのためを思つてあの女を殺してやったのよ」

あたかも雅のためと言っているが、雅は二人が己の快樂の為に犯行を楽しんでいることを知っている。

お兄ちゃんは女を犯して、首を絞めたときの相手の死相を見

て喜ぶ。

お母さんは自分以外の綺麗な女が嫌いで、顔を剥いで胸を抉って女の価値を下げて殺すのが好き。

それを知っているながら、雅は身近な者の犯行を黙認した。警察に駆け込もうという発想すら思わない。あまりに幼い頃から、お兄ちゃんとお母さんに苛まれてきたためだ。雅に取って二人の存在は絶対だった。

お母さんは未練がましい声を出す。

「昨日の女は楽しんで殺せたけど、今日はあんたがあんな場所で襲われるから、女の顔を剥ぐこともできなかったわ。爪で剥ごうとしたけど無理だったのよね、代わりに男のモノを喰ってやったけど。あの女の顔を剥ぎたかったわ……代わりにあんたの顔を剥ごうかしら？」

含み笑いが闇の中で木霊した。

すぐにお兄ちゃんの声が笑いを掻き消した。

「おい、雅に手え出したらクソ婆殺すぞ！」

「あんたそれが親に利く口？ あんたも所詮はあたしの所有物なのよ。奴隷なら奴隷らしくあたしに口答えなんかするんじゃないよ！」

「やめて二人とも！」

雅が叫んだ。

昔からお兄ちゃんとお母さんの仲は悪い。喧嘩をするとたまに雅が止めに入るが、いつも矛先は雅に変わってしまう。

ヒステリー気味にお母さんが叫ぶ。

「あんたは黙ってなさい！」

お兄ちゃんの矛先も雅に向いていた。

「お前を庇ってやってんだぞ、静かにしてる。それともオレにカマって欲しいのか？」

低い声で威嚇したお兄ちゃんは急に下卑た声を出した。

雅は恐れた。 また犯される。

「やめて、わたしそんな気分じゃない」

「そんなこと言っておレに犯されるのが好きなクセに」

「そんなこと……ない」

言葉で否定しても、雅の躰は正直に疼いてしまっている。火照る肌をお兄ちゃんに舐められることを想像する雅がいた。

「お兄ちゃん、駄目、駄目……気持ちいいの、もっとしてください！」

喘ぎながら雅の意識は白濁に呑み込まれようとしていた。

だが、突然のチャイム。

やましいことをしていた雅は慌てて立ち上がり、部屋のドアを開けた。

闇に閉ざされていた部屋に光が木漏れ日のように差し込んだ。部屋の奥には椅子に座っている人影が見えたが、すぐに部屋は再び闇に閉ざされた。

雅は部屋のドアを閉め、すぐに玄関に向かって走り出した。

ドアスコープからマンション廊下のようなすを伺うと、そこには二人の女子高生が立っていた。

なぜ、あの二人が？

雅は疑問を抱きつつもドアチェーンを外し、電子錠を解除してドアを開けた。

「こんにちは草薙さん」

優しい声は紅葉のものだった。その横にはつかさが立っている。

紅葉は手に持っていた鞆を雅に差し出した。

「草薙さんの忘れ物を届けに来ただけけれど」

学校に置いて来てしまった雅の鞆。わざわざ紅葉とつかさが届けに来てくれたのだ。

しかし、まだ学校は終わっていないはずだった。

「あ、ありがとうございます。けど、あの、学校は……？」

鞆は受け取って雅は尋ねた。すると、紅葉は気まずそうに笑った。

「昼休みが終わってからサボっちゃったの。午後には苦手な体育もあつたし」

サボる？

そんなことを紅葉がするのを雅は見たことがなかった。勤勉で礼儀正しく、授業も静かに真面目に受けているようなタイプだ。そんな紅葉が授業をサボる？

ひとりだけならまだしも、横にはつかさもいる。

「風間さんも？」

風間とはつかさの苗字だ。

不思議そうな顔をする雅に訊かれ、つかさは無邪気に笑う。

「だって紅葉がサボるっていうからさー。アタシは体育好きな

「ただけどな」

「だったらわたしについて来なければいいのに」

「そんなこと言わないでよ、もみじゅっ」

二人の姿は雅の目に仲もむつまじく映った。

そんな二人とは別世界に自分は置かれているのだと雅は気づき、なにも言わないで玄関を閉めようとした。ドアをつかさ
が押さえた。

「ウチら雅に訊きたいことあつて来たんだよね、ねっ紅葉？」

「うん。話たくなければいいのだけれど？」

切れ長で古風な美を湛える紅葉の瞳で雅は見つめられた。

「どんなことですか？」

雅が尋ねると、ドアを押さえていたつかさの手に力が入り、
強引にドアを開けてしまった。

「できれば中でゆっくり話聴きたいなあ、ねっ紅葉？」

つかさに顔を向けられた紅葉が返事を返す前に、雅は慌てて
ドアを再び。今度は力を込めて閉めようとした。

「だ、駄目です。散らかってるし、家に人を上げるとお母さん
が怒るんです」

精一杯ドアを閉めようと雅は力を込めるが、つかさは涼しそ
うな顔をしてそれを押さえている。

「雅んちの母親って怖いんだ。兄弟とかいるの？」

「兄が……ひとり……」

「今部屋にいるの？」

「だ、だから入って来ないでください」

つかさは何気ない会話を交わしながら、玄関から中に首を伸ばして覗き込んでいた。

中に人がいるにしても、身を潜めているように静かだった。

突然、紅葉が『あつ』と息を漏らすように呟いた。ケータイの小刻みに震えたのだ。

「メールみたい、ちよつとごめんね」

紅葉がケータイを見ると、そこには紫苑からのメール着信があった。

慌てずメールを開き、紅葉は少し息を呑んだ。

武田朱美が殺されて発見されたとメールには書かれていたのだ。

すぐにケータイをしまつて、紅葉は真剣な眼差しで雅に問う。

「近藤香織さんと猪原由佳さんが殺されたのは知っている？」

雅が答えるまでには少し間があった。

「誰ですか？」

「昨日、草薙さんがからまれた三人のうちの二人の名前なのだけれど」

「こ、殺されたんですか……あの人たち」

声を沈めながら雅は節目がちに顔を下に向けた。

「ウチからも質問あるんだけど？」

つかさは言った。

「草薙早苗って知ってる？」

「し、知りません！」

今度は即答だった。そして、つかさの隙について雅は玄関を

閉めようとした。

「わたし忙しいので」

玄関は言葉少なげに閉じられた。

不可解に動揺する雅に紅葉は不信感を抱かずに入られなかった。

ここに来た目的は武田朱美を探すついでだったのに、雅がなにかを知っているように思えてしまう。

「帰ろう、紅葉」

「早いつてばつかさ」

歩き出してしまったつかさの後を紅葉は慌てて追った。

雅はドアスコープで二人が消えたのを見て、慌ててお兄ちゃんがいる部屋に向かった。

「お兄ちゃん、みんながわたしのことを疑ってるの！」

闇に閉ざされた部屋の中で雅は脅えた。

お兄ちゃんは太く逞しい声で雅を落ち着かせる。

「オレが守ってやるから心配するな」

そう言って、分厚いカーテンを少しだけ開けて道路の様子を窺った。

道路を歩いている紅葉とつかさの姿が見えた。

「紅葉かい女だな……犯したくなるぜ」

舐めるように紅葉を見てみると、つかさがこちらを振り向き、慌ててカーテンを閉めた。

「お兄ちゃん、やめて。雨宮さんはわたしに優しくしてくれ
た」

「もうあいつもオレのもんだ」

低い笑い声が闇の中に響き渡った。

パソコンのモニター以外の光がない部屋で、愁斗は右手だけでキーボードを打っていた。左手の指はキーボードのないところで世話しなく動かされている。

愁斗の傍らにたたずむ蒼眼の少女　アリス。

「わたくしはなにを？」

アリスは主人の命令を望んでいた。

「君は草薙雅の住むマンションに行つて欲しい」

「なぜでございましょうか？」

「つかさを通して感じた鬼気。あの部屋の奥には“何か”が潜んでいた」

「紅葉様のためにお調べになるのでございましょうか？」

無感情ではなく、無表情。アリスの声音は毒を含んでいた。

「いや、僕のためだ」

愁斗の瞳はアリスではなくモニターを映していた。両手は常に別の動きを見せている。アリスがすぐそこにいても、会話はまるで電話越しのようだった。

心ここにあらず。

アリスの表情も見ず、その言葉も感情を読み取らずに記号的に解釈する。心が遠くにあるときはいつもこうだ。

「愁斗様」

と前置きをしても、耳を傾けているのかどうかわからない。

それでもアリスは言葉を続ける。

「わたくしは具体的になにをすれば宜しいのでございますか？」

「様子を探って来るだけでいい、手は出さずに情報集に務める。しかし、深追いはしてもいい」

「承知いたしました。ごさいます」

一礼してアリスは部屋を出て行った。

ドアの閉まる音は愁斗の耳に届いている。ただ、興味があるのはアリスがもたらす情報だ。

愁斗は雅ではなく、あのマンションに潜んでいる“何か”に興味がある。それがなにであるか、現時点ではわからない。

つかさは雅に尋ねた。

草薙早苗って知ってる？

あるとき雅は明らかな動揺をした。

『知らない』と答えた雅の言葉が、不審な行動によって『知っている』に聴こえた。

では、雅と早苗の関係は？

「見つけたぞ “金剛”」

愁斗は“金剛”の情報から“金剛”にはたどり着けないと知って、草薙早苗から“金剛”への道筋を探っていたのだ。

早苗が本人認証をして買物した記録を元に、居場所を絞り込んでいた結果、早苗と“金剛”が街の防犯カメラに映っている映像にハッキングできた。

パソコン画面で再生されるライブ映像。二人の居場所は

マドウ区だ。

マドウ区はカミハラ区の下、帝都中枢ミヤ区の左に位置する。前に二人が潜伏してハウジユ区からは南西に位置する。

“金剛”は早苗を連れて個人病院の中へ消えた。

紫苑はすでにターゲットを絞り込み、マドウ区に潜伏させていた。

愁斗の意識が強く紫苑に注がれ、広がるビジョンは紫苑を通して見える世界。

夜のカーテンが空を覆い、所々開いた穴から星が煌きを魅せる。

マドウ区は女帝のお膝元とも云われ、魔導産業で栄えた街だ。外から魔導師たちの移民も多く、居住地区と産業地区に分かれている。居住地区の一角は魔導成金の屋敷が立ち並び、ゴシックやバロック建築などの芸術性に富んだ屋敷も多く見られる。

紫苑がやって来たのは魔導街の裏の顔。

毒々しい色の煙を出す煙突や芳しくも危険な香のする空気。排水溝で弾けた気泡は悪臭を放ち、スライムが溝から外へ出ようとしている光景も見受けられた。

紫苑は個人病院の看板を見ながら、入り口の前に立った。

マルバス魔法病院。個人病院であるが、魔導街の住民ならば誰もが知る病院だ。病気の治療のみならず、悪魔の業を持った院長が肉体の機械化や妖物との合成もやってのける。

二四時間営業で病院は深夜でも患者を受け入れる。

待合室には患者の姿はなかった。けれど、背もたれのない長

椅子には人影が見える。ここに棲み憑いてしまっている亡霊だ。受け付けを通さず診察室に入ろうとする紫苑を看護婦が止めた。

「院長先生は手術中です」

白い仮面を覗き込む看護婦の顔は魚の鱗で覆われていた。

「手術にも院長にも興味はない。男を捜している」

紫苑はドアの前に立つ看護婦を押し退けようとしたが、その腕を看護婦のギザギザの歯で噛みついてきた。

白い仮面は表情を変えず、服を引き千切られながらも看護婦を投げるように振り払い、診察室のドアを開けた。

診察室は手術室と同じ部屋であり、そこには三人の人物がいた。

手術台上半身裸で横たわっていた“金剛”の顔は紫苑に向けられていた。

「またためえか！」

“金剛”は上体を起こそうとするが、それは院長によって止められた。

「動くな、あと少しで終わる」

紫苑が入って来たというのに、院長はライオンみたいな後頭部を向けて、切断されていた“金剛”の腕に新たなアームをつける手術をしていた。

早苗は紫苑が入って来てから目線を泳がせてしまっている。

「手術なんかいいからこいつを殺して！」

叫ぶ早苗に院長が吠えた。

「うるさい気が散るではないか！」

そして、ここではじめて院長は紫苑に顔を向けた。

「わしの顔に免じて手術が終わるまで待て」

向けられた院長の顔は獅子であつた。人間の躰に獅子の頭が乗っている。いや、靴を履いていない足は割れた蹄だ。二足歩行する人間外の生物と考えたほうがよさそうだ。

院長の申し出に紫苑は頷いた。

「高名な魔導医マルバスの顔を立てよう」

これには「金剛」も早苗も度肝を抜かれた。

約束どおり紫苑は待った。いつたいなにを企んでいるのか、それとも愁斗になにかあつたのか？

手術をされている「金剛」の額には汗が滲んでいる。すぐそこにいる紫苑とどう戦うか？

早苗も焦っていた。紫苑は攻撃こそ仕掛けてこないが、プレッシャーによって早苗の動きを封じている。

マルバスは手を止めた。

「完成した」

まるでそれは芸術品が生まれたような声だった。

手術台から降りた「金剛」の腕には、金属のアームが取り付けられていた。形は手と腕のようだが、生身の左手と比べると一回りほど大きい。

まだ紫苑は動かなかつた。

「金剛」も仕掛けようとしなない。

こんな狭い手術室は戦いに向かない。とくに大雑把な戦いが

得意な“金剛”には不利な場所だ。

血のついた手袋を投げたマルバスが言う。

「おまえには手術の代償を、君には手術を待ってくれた礼をしよう」

早苗は目の前で起きた事態に眼を剥いた。帝都に住んでいてもなかなか見られない現象だ。

マルバスが指を鳴らしたのと同時に紫苑と“金剛”が消失したのだ。

紫苑は刹那に巨大な檻の中に移動させられていた。檻というより虫籠のようで、木枠の向こうには果てしない灰色が広がっている。五メートル前方には驚いて辺りを見回している“金剛”がいた。

マルバスの声が世界に響く。

「そこは本来、わしのコレクションを入れて置く籠なのだが、特別に使わせてやる。心存分に戦うがよい……ふあははははは……」

不気味な哄笑が世界全体に響き渡った。ここはマルバスが支配するテリトリーなのだ。下手をすれば物理法則などの世界法則までもマルバスの思うがままだ。

理解をした“金剛”はニヤリとした。

「どちらかが死ぬまでというわけだな」

「そのようだ。お前が殺すまで外には出してもらえないらしい」

二人の間に気迫が流れた。

五メートルという距離はなにを意味するか？

手に武器を握っていない“金剛”。

対して、紫苑には刹那を翔ける妖系があった。

先に仕掛けたのは“金剛”だ。

手術で得た金属の腕が大蛇のように伸びて紫苑に襲い掛かる！

アリスは夜の住宅街を歩き、雅の住むマンションに向かっていた。

そろそろ満月だろうか？

街灯がなくなるとも、月光が世界を見守ってくれている。

道路に面したマンションの窓はそのほとんどが電気を点けていた。

一階に明かりの点いていない部屋があった。雅の住む部屋だ。留守なのだろうか？

それならば情報収集には好都合かもしれない。

アリスは道路に人の気配がしないことを確かめ、スカートを揺らしながらベランダのフェンスを軽やかに飛び越えた。

窓と重たそうなカーテンを隔てて向こう側に人がいるような気がする。

アリスはベランダで身を潜めて中の気配を探った。

二人の声が聞こえる。

「お兄ちゃんやっぱり駄目……雨宮さんは……」

「オレに協力しといて今さら駄目か？」

三人目の声もした。

「そうよ、この子に協力してあの女を呼び出したのはどこの誰かしら？」

二人の女性と一人の男性がいるようだ。

この中で一番若そうな女の子は消え入りそうな声を発する。

「だって……それは……雨宮さんに電話をかけて呼び出したのはわたしだけど……だってそれは……」

「言いたいことがあるならばつきり言えよな」

男の声は少し怒っているようだった。

年配の女も声を荒げた。

「そうよ、言いたいことがあるならばつきり言いなさい。あんたはいつもそうなのよ！」

金切り声が窓の外まで大きく届いた。

アリスは事前情報からこの三人を雅と兄と母の三人だと推測した。

他にも事前前にいろいろと調べようとしたのだが、マンションの名義は架空の人物の物になっていた。兄と母の詳細は名前すら掴めなかった。

部屋の中では会話が続けている様子で、アリス耳を立てて会話を聞き取った。

聴こえてきたのは雅の声だ。

「もう止めてお兄ちゃんもお母さんも……人殺しなんてよくない。こんなこと続けてたらいつかは捕まっちゃう」

「オレと母さんがパクられたらお前は独りになるんだぞ、それ

でもいいのかよ？」

「イヤツ、独りはイヤ……けど、近藤さんと猪原さん……武田さんまで殺して……もう隠し切れないよ」

どこかで聞き覚えのある名前だとアリスは思考を巡らせた。連続殺人犯に殺された三人の女子高生の名前だ。そこから導き出された答えは、雅の兄と母がなんらかの理由で事件にかかわっているということ。

中で少し動きがあったようだ。クローゼットかなにかが強く締められた音がしたような気がした。

「そろそろ出かけるか。あの女を犯しに行ってくるぜ」

前の会話から『あの女』とは紅葉のことだと察しがついた。

無表情だったアリスの顔が思わずほくそ笑む。

そして、恐ろしいことを呟いたのだ。

「姦られて殺されてしまえばいいのに……」

邪な思いを遮るように、ちょうどアリスの電腦に通信が入った。

《アリス、そちらの様子はどうなってる？》

愁斗からの通信にアリスは硬い表情をして、声を発さずに直接電腦から音声を送信する。

《外から部屋の様子を探っております。中には雅、兄、母と思われる人物が会話をしております》

アリスは紅葉の件について触れないつもりでいた。

このとき、愁斗は紫苑を通して早苗の姿を見ていた。マルバスが“金剛”の手術をする横で早苗が見守っている。

少し間を置いて愁斗がアリスに命令をくだした。

《踏み込めアリス!》

部屋の中に本当は誰がいるのか?

愁斗は早苗が雅の母だとばかり思っていた。それが今、覆るかもしれない。

《承知いたしましたでございます》

足に力を込めたアリスが窓を蹴り壊す。

弾け飛んだ硝子片はカーテンによって防がれたが、部屋の中からの瘴気はカーテンを越えてアリスを怯ませた。

渦巻く鬼気が発せられ、部屋の中に強大な“何か”がいることを嫌でも知覚した。

しかし、アリスにとって主人の命令は絶対。魂が打ち砕かれようと与えられた使命は果たす。

カーテンを開けようとしたアリスの足首が何者かによって掴まれた。

そのままアリスは背中から転倒し、足首を引つ張られて部屋の中に引きずり込まれてしまった。

暗闇の中でアリスは自分の体の上に何者かが馬乗りになっているのを感じた。

それでもアリスは冷静に感情を声に含ませず言う。

「お退きになってくださいませんかでしょうか？」

「てめえ、女だろ、声をあげて泣き叫べよ！」

こんな相手は初めてだったに違いない。

兄は怒鳴り声をあげてアリスの頬を打った。

暗闇でなければ、このときアリスが口元を艶然させたのに気づいただろう。下賤な者を嘲笑うような口元を。

「残念ながらわたくしには痛覚が備わっておりません」

しかし、感情はある。浮かべている笑みがなよりの証拠だ。兄はアリスの首を両手で絞めようとした。だが、いつもと違う感覚が指に伝わる。肌はヒトのようで柔らかいのに、その下はヒトとは違う。

「てめえ人間じゃないな！」

「その通りでございます。わたくしは世界最強の傀儡士に創られた存在でございます」

「そんなこと関係ねえ、オレは犯せばいいんだ、犯せれば！」

「生殖器はございません」

「胸があるだろうがよ！」

兄はアリスの胸に手を掛け服を引き千切るうとした。だが、その手はアリスの胸を掴む寸前、小さいくとも強い力のこもるアリスに手に掴まれた。

「ジュエル に触れて良いのは愁斗様のみ……」

アリスは兄の手首を掴んだまま、部屋の奥へと投げ飛ばした。兄の躰はカーテンにぶつかり、留め具が外れてカーテンが落ちてしまった。

外から吹き込む新鮮な風が、中に溜まっていた淀んだ瘴気を渦巻かせる。

月明かりに照らされた兄の後姿をアリスは見た。

声だけを聴いていたときはもっと大柄な人物だと思ったが、想像よりも小柄な人物であった。

ベランダから外へ逃走する兄。

アリスはこの部屋ではない別の場所から、もっと強い鬼気を感じていた。

別の部屋に残りの二人がいるのかもしれない。

しかし、逃げる兄を放っておくわけにもいかなかった。

起き上がったアリスは床を蹴り上げ、ベランダから華麗に道路に飛び降りた。

道路を走る兄の後姿。

深追いはしてもいいと命令されていた。

アリスの胸の奥で、服を透き通って蒼い輝きが放たれる。それがアリスの魂である ジュエル だった。アリスの胸には蒼い宝石のような ジュエル が埋め込まれているのだ。

「わたくしを穢そうとした男 逃がさない」

肉食獣のような全速力でアリスは兄の背中を追った。

怨霊を憑依させた金属アームが紫苑に襲い掛かる。

それはまるで大百足のようになり、節をいくつも折り曲げながら蛇行した動きで飛んで来る。

紫苑の手から放たれる輝線。

煌きは金属アームに火花を散らせた。

切断に失敗した金属アームは紫苑の眼前まで迫っている。手の形をしていた先端が大きく開き、五本の爪が長く鋭く変化し

た。

咄嗟に紫苑は着ていたローブを脱ぎ捨て金属アームに投げつけた。

金属アームはローブを破り、その先にいるはずの紫苑の躰を抉ろうとした。

だが、金属アームは宙を抉った。そこに紫苑の姿はない。紫苑はバク転しながら金属アームを躲していたのだ。

ローブが地面に落ちたその先に“金剛”は見た 薄手な純白のドレスを纏う長身の女を。

膝まで伸びた漆黒の髪とは対照的な白く透き通った肌が眼に眩しく、ドレスに隠された肉体は芸術的な曲線美を描き、カットされたドレスの胸元は男を誘っていた。

そこにいるのはヒトではないと“金剛”は確信した。魔性の妖艶さが色香として空気に溶け込んでいる。

「この姿、見たからには必ず冥府に送ってくれる」
紫苑の声は澄んではいるが、清らかな純粹ではなかった。

「だがしかし、貴様には聴きたいことが山とある」
「また拷問でもするか？」

挑発するように“金剛”は手で『掛かって来い』と煽った。その挑発に紫苑は乗った。

紫苑は俊足で地面を駆け、“金剛”の横に回って妖系を放った。

一筋の煌きが“金剛”の首を刎ねるはずであった。だが、首は落ちることなく、“金剛”は蚊にでも刺されたよ

うに首を擦った。

「糸か風かなんだが知らないが、おまえの武器じゃ俺の躰は切れないぜ」

やはり。

前にホウジユ区のマンションで同じことをしようとしたときも、首を刎ねることができなかった。

“金剛”は生身の腕ですでに通常の形に戻っていた金属アームを指した。

「このときは女とヤツてたあとだったもんでよ、油断しちまったが、今の俺の躰は鋼より硬いぜ」

「……なるほど、噂どおりだ」

元D C の特攻隊として知られていた“金剛”の得意技は肉体強化。

紫苑に打つ手はないのか？

指先を軽く動かしながら紫苑は柔軟をしている。策はあるが、手加減のできない殺しの策だ。まだ“金剛”には訊きたいことがある。

「ひとつ訊きたい」

紫苑が尋ねると、余裕をかまして“金剛”が口を開いた。

「なんだ言ってみる？」

「本当に斬れないのか？」

「俺を切れる奴はいない」

「声音は隠せても、なぜ汗を掻いている？」

「これは術を使ってるからだ。疲れてるわけでも、おまえに脅

えてるわけでもないぜ」

紫苑の手から輝線が放たれ、手術中のまま上半身裸だった“金剛”の胸板をなぞった。

やはり斬れない。

しかし、“金剛”が肌から汗を噴出したのを紫苑は見た。

「墓穴を掘ったな“金剛”」

「墓穴だと？」

「脅えていないと言いながら、汗を噴出し、私の妖系が放たれた刹那、恐怖に顔を引きつらせるのはなぜだ？」

紫苑はゆっくりと円を描くように“金剛”の周りを歩いた。

それに合わせて“金剛”は常に紫苑を正面に捉えようとその場で回る。

「背中を見せる“金剛”」

「背後から襲う気か、汚い真似をするな」

「私の妖系では斬れないのだろう、ならば背を向けても平気なはずだが？」

「平気でも敵に背後を見せる馬鹿がいるか！」

「背中を見せないのなら言ってみよう。その傷は誰につけられた？」

紫苑はすでに“金剛”の背中を見ていたのだ。はじめに見たのはあのマンションだった。あのときも“金剛”は上半身裸で、紫苑を壁に叩きつけて背を向けて逃げたのだ。

押し黙る“金剛”に紫苑は言葉を浴びせる。

「おまえはD C の元団員。加えて、秋葉蘭魔と源家を襲撃

したと言っていたな？」

「そ、それがどうした！」

言葉を詰まらせた“金剛”は恐怖していた。あの名を聞いて、世にも恐ろしい男の顔を思い浮かべてしまったのだ。

「秋葉蘭魔」

再び紫苑は口にした。

もう“金剛”は口を開くことさえなかった。

「私と同じ技を使う者をおまえは知っている　秋葉蘭魔。おまえの背中に付けられた傷は彼が得意としていた　悪魔十字。

六本の妖系によつて十字を刻む技」

確かに“金剛”の背中には、縦と横に三本ずつ交差した斬られ傷があった。

紫苑が妖系を繰り出そうと構える。

「六本同時に妖系を繰り出せる彼は天才だ。私にはまだできぬ芸当だが、彼が斬れたのなら私にも斬れる」

「馬鹿なこと言うな、あいつは人間の面した悪魔だ。おまえとは次元の違う存在だ、おまえに俺が斬られてたまるか！」

叫んだ“金剛”の金属アームが伸びた。

その場から足を動かさず、紫苑は呟いた。

「……シンク口率六〇」

紫苑の手から放たれた煌きは金属アームに弾かれ火花を散らせた。

「……シンク口率七〇」

再び放たれる煌き。

今度は金属アームに煌きが触れた瞬間、輝線が金属アームを切断して地面に轟きを立てて落ちた。

金属アームは紫苑の足元に落ちていた。あと一刹那で紫苑は金属アームの餌食になっていただろう。

「……次はシンク口率七五パーセント」

そこにいるのは先ほどとは別人だった。纏っている鬼気が違う存在だと云っている。紫苑の周りには魔性の風が吹き荒れていた。

紫苑の妖系が宙を翔け、“金剛”の胸を斜めに切り裂いた。まだ傷は浅い。

鮮血が滲み出した程度だ。

だが“金剛”は脅えていた。

「なぜ斬れる……おまえ何者だ！」

「“私たち”は傀儡士紫苑。今、秋葉蘭魔の背に手が届いた。

次は……確実に斬るぞ」

澄んでいながらも狂気を孕む声に“金剛”は戦慄した。

まさかこの世に二人目の秋葉蘭魔がいようとは！

後退りをした“金剛”は両手を胸の前に突き出した。

「ま、待て……俺に訊きたいことがあるんだろう？ 全部話す、だから殺さないでくれ！」

巨躯の持ち主が泣いて懇願した。無様な姿を晒しても助かりたいと願った。

目の前のいるのが秋葉蘭魔ならば、一思いに殺してはくれなからだ。地獄の業火で焼かれるよりも酷い苦痛が待ち受けて

いる。そう“金剛”は紫苑と秋葉蘭魔を重ね合わせてしまったのだ。

紫苑の腕が下げられた。

「まずは、源家襲撃の理由を話せ」

紫苑の鬼気が緩められ、ダムが決壊したように“金剛”の口から言葉が流れ出した。

「面作り師の男を攫うためだ、あの男は神の手で面を掘る。わかるか、創造するんだ、ありとあらゆる顔を創造するんだ、神が人間を創造するのと同じだ」

「その男が彫る面にどんな力があるというのだ？」

「だから言ってるだる創造だ、万物の創造だよ。面を被った者は、その面の力を手に入れることができる。もしも神の面を掘れたらどうなると　ぐえっ！」

突如、“金剛”の躰に脳天から股間まで輝線が奔り、そこをなぞるように血が滲み出した。

人が割れた。

“金剛”の躰は血を撒き散らしながら左右に割れた。

真つ二つに割れた“金剛”が地面に転がったその先に、魔気を纏った紅い美影身が佇んでいた。

その影を見た紫苑は珍しく声を荒げて動揺する。

「秋葉蘭魔！」

己の名を呼ばれ、男は世にも美しい艶笑を浮かべた。

ぴちゃ……ぴちゃ……とブーツの裏で跳ねる紅い雫。

紅いシルエットは血の海を歩きながら紫苑に近づいて来た。

コートの上にケープが付いた鮮やかに紅いインパネス姿。その上では魔導を帯びた特有の色香を漂わせる黒瞳が紫苑を見据えている。

「それは紫苑の躰だな　愁斗？」

男なのにもかかわらず、なんとという艶やかな声音なのだろうか？

悪魔が乙女を誘惑するときは、こんな声で囁くに違いない。

蘭魔を取り巻く魔性が紫苑の躰を震わせた。それは紫苑を通して感じている愁斗の震えだった。

「なぜ……ここに？」

それが搾り出した精一杯の言葉だった。

「裏切り者の始末と　」

蘭魔の足が一步近づいたたびに、紫苑は後ろに押されるように足を引いてしまっていた。

紫苑の背中が籠の柱に触れた。もうこれ以上は下がれない。

伸ばされた蘭魔の織手が紫苑の白い仮面に触れた。

「　息子の成長が見たかった」

告白と同時に白い仮面は外された。

仮面の下には顔がなかった。仮面よりも表情の乏しい眼も鼻も口もない平らな顔。

「残念だ、久しぶりに妻の顔を見られると思ったのだが、顔はまだできていないのか……」

そう、紫苑は愁斗の母を模った傀儡だったのだ。

そして、目の前にいる男こそが、その夫にして愁斗の父だった。

白い仮面を投げ捨てた蘭魔はゆっくりと正面を向きながら下がっていった。

「さて、愁斗よ、おまえの實力を觀させてもらおう。掛かって来るのだ愁斗！」

紫苑の躰は動かなかった。愁斗は掛かって行くことができなかったのだ。

「できない……僕にはできない」

「なぜだ？」

「あなたがなにをしてきたか、それは噂で知っている……けれど、それが真実かどうか、僕にはわからない」

「では話してやろう。なにがいい、テーマパークで血の雨を降らせた件か、それとも帝都タワーを倒壊させた大惨事についてか？」

二つの事件は帝都史上に残る大事件だ。

三年前の夏、ミナト区にある遊園地と水族館を複合させた大テーマパーク。そこで起きた来場客惨殺事件。死亡者の数はおそらく五〇〇人を超え、身元不明者も数知れない。アトラクションの爆破、巨代妖物が園内に解き放たれ、D C の戦闘員たちも人々を次々と殺していった。

五年前の春の終わり、ホウジユ区にある帝都タワービルが局地的な大震災によって倒壊。地震は人為的なものであり、犯行声明があったことからD C 犯行だと断定された。死傷者の

数は二〇〇〇人を超え、周辺のビルも大打撃を受けた。

その二つの事件に秋葉蘭魔はかわつていたと認めたのだ。

「他にもういろいろあるぞ。おまえが私と戦う気になるのなら、いくらでも話してやるがどうだ？」

「信じられない。どうして……母さんを殺し、僕らを施設に連れ去った奴らに寝返った？」

「世界の真理に近づいた。おまえもいつか気づく日が必ず来る」

「僕が施設から逃げ出したあと、あなたになにがあつたんだ……」

紫苑は項垂れ戦意は喪失されてしまっていた。

戦う気がないと知れた紫苑に蘭魔が手を向けた。

「仕方あるまい、こちらから仕掛けるぞ愁斗！」

蘭魔の指先から三本の輝線が放たれ、紫苑のドレスを軽くなぞった。紫苑の肌には一切の傷をつけず、ドレスの胸元は鉤爪で斬られたような三本の線が入った。

零れた紫苑の胸元を見て、無邪気な子供のように蘭魔は笑った。

「だいぶ妻に近いが、胸はもう少し小さいぞ」

蘭魔は息子と「遊んでいる」気分だ。格の差がそうさせる。

愁斗も蘭魔に敵わないと気づいている。

「僕と戦ってなんの意味がある？」

「おまえの成長が見たいと言った筈だぞ。私と戦え、そして学べ！」

蘭魔から神速で放たれた妖系を紫苑には避けることができなかった。

三本の輝線は空気を焦がし、紫苑の片腕を落とした。

「ぐああっ！」

切断された腕から血が吹き出ることはなかった。しかし、紫苑は短く悲鳴を漏らし、地面に両膝を付いてしまった。

地面に膝を突いて震える紫苑を蘭魔が見下す。

「シンク口率を高くすれば操作性が向上し、実力以上の力を出すことができる。しかし、シンク口率が高ければ高いほど、傀儡が受けた以上の負荷が傀儡士に与えられる。紫苑とのシンク口率が高いと見たが、今紫苑を壊されればおまえも死ぬぞ」

「……クソッ」

「この程度の実力しか持っていないのなら生きる価値なし。父としてお前に印籠を渡してやろう」

「母さんを壊させはしない！」

紫苑の手から黒い魔気を帯びた太い妖系が放たれた。

襲い来る妖系を蘭魔は待ち構え、なんと片手で掴んでしまったのだ。

「ふむ、この技が使えるとは褒めてやろう。しかし、眼に見えぬが故に躲すのは容易いこと。次は魔気を凝縮させて糸を細くしろ」

紫苑は再び妖系を放った。

しかし、今度は蘭魔ではなく宙を切った。

蘭魔は深く頷いた。

「ふむ、闇 で私に勝てるつもりか？」

紫苑のつくった空間の傷から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

「闇 よ、喰らえ！」

蘭魔を指さし紫苑が叫んだ。

裂けた空間から 闇 が叫びながら飛び出す。

まさにそれは闇色の風。

「真の傀儡士に 闇 は通用せぬ！」

蘭魔はこのとき初めて両手を使い、宙に十字を描いた。

縦と横に放たれた六本の妖系は 闇 を噛み千切るように切

り裂き、その存在を掻き消してしまった。闇 はその場から

完全に消滅してしまったのだ。

絶句せずにいられない事態に紫苑は呆然と立ち尽くした。

「まさか…… 闇 が切れるなんて……」

驚く紫苑に蘭魔は諭す。

「私の業はこの世の域を超えた。つまり、この世のモノ以外の

モノを斬れる。亡霊はもちろん、人の放つ氣ですら斬れるの

だ」

父の背中に触れたと思ったのは驕りであった。自分は父の背

中すら見えてないのではないかと、愁斗は心魂の底から痛感さ

せられた。

糸が切れたように紫苑は膝が崩れ床にへたり込んでしまった。

「どうした愁斗、まだはじまったばかりだぞ」

「……勝てない」

「負けを認めるのならば傀儡を捨てる。さすれば傀儡が朽ち果ててもお前は死なん」

「母さんを見捨てることはできない」

「それはただの傀儡だ」

「母さんだ！」

紫苑の放った妖系が蘭魔の頬に紅い筋を走らせた。

「まだ闘志は完全に消えてないようだな。愁斗よ、召喚はまだ会得しておらぬのか？」

「あなたなら魔法陣を描く前に阻止できる」

「しないと云うたら見せるか？」

「そんなに見たいなら……見せてやる！」

立ち上がった紫苑は瞬時に妖系で宙に魔法陣を描いた。その魔法陣の奥に世界を滅ぼすほどプレッシャーが感じられる。

奇怪な魔法陣の奥で、それが呻き声をあげた。

「傀儡士の召喚を観るがいい、そして恐怖しろ！」

汚泥が沸騰するような音が木霊した。

背筋を凍らす強大な気配。

魔法陣の“向こう側”で、それが巨獣のように叫び、闇色の裂け目を狂わせ、この世に闇色の羽虫を解き放った。

群を成す大量の羽虫が奇怪な羽音を立てながら、蘭魔の頬の傷を目掛けて飛んだ。

この蟲は血を好み、傷口から寄生して内部から肉を喰らう。

想像を絶する痛みと恐怖が待っているのだ。

しかし、蘭魔は狼狽えることなく、愁斗の描いた魔法陣を自

らの元として描き換えた。

「闇蟲の一種か、戯れにすぎん。真物には遠いぞ愁斗！」

それが鳴らした音か、唾を嚼るような下品な音が耳にへばり付き、魔法陣の“向こう側”から巨大な影が飛び出した。

飛び出た影は赤黒くいぼが多くあり、舌か触手のようにグロテスクであるが、この世界にはないモノなので形容しがたい。

その部位が闇蟲を掻き取るように呑み込み、一匹も残さず“向こう側”へ連れ還ってしまったのだ。

辺りは二人がいるというのに静寂に包まれていた。沈黙ではなく静寂だ。

静寂を破る蘭魔の足音。

「この一〇年以上もの間、おまえはなにをしていたのだ？」

蘭魔は紫苑の目の前で足を止めた。

紫苑の手は下がってしまったている。

「D C に復讐を誓い、技を磨いたつもりだった」

「お前には失望させられたぞ。お前と共に真理を掴もうと思っていたのに実に残念だ」

「真理なんて僕には関係ない」

「真理はこの帝都と紫苑が握っている。紫苑が黄泉返る日も近いぞ」

「なんだって!？」

これほどまでに驚いたことがあっただろうか。愁斗はそれを実現させようと、ありとあらゆる手段を講じたが全て失敗した。だが、蘭魔は紫苑の黄泉返りを予言したのだ。

「“金剛”の話を思い出すのだ。あの面作り師が彫った面を被った者は“それ”と化す。紫苑の面を作り被せれば、紫苑は黄泉返るのだ」

「違う、それは別の、母さんの仮面を被っただけに過ぎない」

「面を被った者は真物となるのだ。しかし、面作り師はもうこの世におらん。自ら腕を斬り使い物にならなくなったので私が冥府に送った」

面作り師 それはあの姉妹の父であった。

紅葉と呉葉の復讐の相手、それが愁斗の父だったとは、なんという皮肉か……。

蘭魔は話を続ける。

「しかし、面作り師には二人の子供がいた。殺さずに見逃してやった姉妹だ。血は必ず姉妹に受け継がれているはずだ」

「その姉妹は見つかったのか？」

「所在は全く掴めておらんが、私の勘がどこかで生きていると囁いている」

「貴重な情報をありがとう……父さん」

紫苑の躰の周りを魔力が渦巻いた。

父 蘭魔は倒さねばならない敵だと確信した。

残った片腕から紫苑が妖系を放った。

輝線は一直線に蘭魔へ向かい、一メートルもないこの距離で躲わすのは不可能と思われた。

蘭魔の手からも三本の輝線が放たれる。

その手が腕から落ちた。

紫苑の執念の一撃は蘭魔の腕を落としたのだ。だが、妖系はその先にたどり着くことなく蘭魔の妖系によつて切断された。蘭魔の首は取れなかったのだ。

そして、蘭魔の放った三本の妖系は紫苑の妖系を切った後も勢いを弱めることなく、紫苑を斬った。

「よくぞやったぞ愁斗！」

高笑いする蘭魔は切断された腕を手で押さえていた。その手の隙間から零れ落ちる闇色の液体。

紫苑の躰も切断された胴と胸と首から闇色の液体が噴出していた。それは 闇 だった。液体だった 闇 が気体となって、悲しい叫び声をあげながら風のように飛び交う。

核を壊された紫苑が 暴走 をはじめたのだ。

意識が途切れた。

紫苑を通して見ていたビジョンが切断され、リアルに引き戻された愁斗は暗い自室で吐血した。

口を押さえる指の間から血がとめどなく零れ、モニターやキーボードにぶちまけられた。

そして、愁斗は椅子から床に転がり倒れ、口から吐き出された黒血に横顔を埋めた。

紅葉は夢幻の住人になっていた。

いつも見る嫌な夢。

暗闇の中で復讐を具現化したように炎が揺らめいている。

“名無し猫”は炎の中でケタケタ嗤っていた。

「残念だったなあ、紅葉」

「許さない、あなたのせいで三人も死んだ！」

「俺様のせい？ 三人を救えなかったのはお前だろう？」

「違う、あなたが殺したの！」

紅葉は“名無し猫”に飛び掛かって両手で掴んだ。だが、“名無し猫”は紅葉の胸の中で水風船のように割れ、どこからかケタケタ啫う声が聴こえた。

「何度同じことをするんだ、俺様を殺せないのは知ってるだろう？」

背後にいる“名無し猫”に気づき紅葉はすぐに振り返った。

いない。

ケタケタと啫う声は紅葉の頭上から聞こえた。

上を向いたが、そこにもいない。

「ここだよ、ここ」

「どこにいるの！」

ケタケタと啫う声はどこからも聴こえた。右からも、左からも、上も下も、何百何千もの啫い声が紅葉を取り囲んでいた。

紅葉は耐えられなくなつて耳を塞いでしゃがんだが、啫い声が脳に直接響いてくるようだった。

「もうやめて！」

叫んで立ち上がると啫い声は消えた。

辺りは静かで荒立った紅葉の息遣いが際立つて聴こえる。

“名無し猫”はどこに消えてしまったのだろうか？

「早く覚めて……」

「それは無理だな」

その声が出た場所に紅葉は驚いた。

急いで服を脱ぎ捨てて上半身裸になって、紅葉は“名無し猫”を見つけて再度、驚いた。

“名無し猫”は紅葉の胸の間に顔だけを出していたのだ。

「いやッ、早く消えて！」

紅葉は力いっぱい自分の胸ごと“名無し猫”の顔を叩き、思わず咳き込んでしまった。

それを見て“名無し猫”がケタケタ嗤う。

「馬鹿だな、自分で自分を叩いて咳き込んだのかよ」

「うるさい！」

「ケケケッ、現実世界でもそうやって自分で自分の首を絞めるような真似はやめるよ」

「わたしがなにかするの？」

紅葉は“名無し猫”がまたなにかを企んでいるのだと思ったのだ。

「さあて、どうかな。それよりもお前の場合は自分より他人になにかされたほうが傷付くよな」

「なにを企んでいるの！」

「お前は裏切られるんだ。これからお前はいろんな奴に裏切られて生きていくんだよ」

ケタケタと嗤う声がどんどん遠くなっていく。

紅葉の意識が夢の中で墮ちる。

ケータイのベル音が聴こえる。

「なにっ!？」

ハツとして紅葉はソファの上で眼を覚ました。どうやらソファでうたた寝していたらしい。

紅葉は鳴り続けているケータイを探して、テーブルにあったのを見つけて慌てて掴んで通話ボタンを押した。

「誰？」

《助けて、雨宮さん……助けて!》

「草薙さん!？」

《クヌギの木公園で……きゃあああ!》

ツーツーツーと虚しく通話が切れた。

とにかく雅を助けに行かなくては思っただけで紅葉はソファから立ち上がった。

このときは焦りの念が強くて、なぜ雅が自分のケータイの番号を知っているのか疑惑も浮かばなかった。

紅葉はいつも使っている鞆を持って、寝室にいる“姉”の元に向かった。

般若面 を手に取ると“姉”が目覚めた。

《紅葉の狼狽する鼓動が聴こえるわ。どうしたの?》

「お姉ちゃん、友達が大変なの、とにかく一緒に来て!」

有無を言わせぬまま紅葉は鞆に 般若面 を放り込み、急いで玄関を飛び出した。

夜の風は冷たかった。

丸になりきれない歪んだ月が道路を照らし、空には黒い雲も姿を見せていた。

息をつかせながら紅葉は両膝に手をつけて止まった。

視線の先にある小さな公園の入り口。

こんな夜に誰もいるはずもなく、木の葉がざざざと音を鳴らしている。

紅葉は公園の中に足を踏み入れた。

遊具の少ない公園で、昼は遊び場というよりは主婦の憩いの場になっている。

木々や草むらも多く、たまにかくれんぼをしている子供もいるが、すぐに見つかってしまふような小さな公園だ。

「ここだつて聞いたのに……」

眩きながら紅葉は周囲を見回した。

雅は『クヌギの木公園』とはつきり言っていた。この通称は『どんぐり公園』だが、公園の入り口にはしっかりと『クヌギの木公園』と刻まれていた。

暗い公園でただ一箇所、電気が点いている場所がある。公衆トイレの明かりが外に漏れていた。

紅葉は光に誘われるように公衆トイレに近づいていく。

公衆トイレの入り口前になにかが落ちてている。携帯電話だった。

それを拾おうと腰を曲げた瞬間、紅葉は何者かに後ろから抱きつかれた。

「きゃッ、誰っ!？」

「大人しくしろ!」

野太い声が紅葉を威圧した。

紅葉は強引に腹を抱えられ、踵を地面に引きずりながら公衆トイレへ連れ込まれようとしていた。

「放してッ！」

腹に回されている腕を取るうとするが、相手の腕力が強くて外れない。

紅葉の瞳に映る鞆。あの中には 般若面 が入っているのに、手を伸ばすことすらできない。

「助けてお姉ちゃん！」

声は虚しく公園に置き去りにされ、紅葉は公衆トイレの中へ連れ込まれてしまった。

鼻を衝くアンモニア臭。

壁を這っていたゴキブリが急いでどこかに隠れた。

男性トイレの中に入ったのははじめてだった。こんな場所に連れ込まれるなんて思ってみなかつた。紅葉は涙ぐみそうになつたのを必死で堪えた。

引きずられるまま小さな抵抗しかできず、紅葉は個室の中に連れ込まれてしまった。

ドアが強く閉められ鍵が掛かる音がすると、男は紅葉を壁に押し付けてはじめて正面で向かい合った。

帽子を目深に被り、口には白いマスクをしていた。

Tシャツ姿で華奢身体つきをしているが、紅葉を拘束していたときの力は見た目に反していた。もしかしたら憑依者かもしれない。

なにかに憑依された平凡な主婦が連続殺人鬼なることもある。

男の手が紅葉の胸にじわじわと伸びる。

「いやッ、触らないで！」

このまま気を失ってしまいそうだった。

男とこんな狭い場所にいるなんて耐えられないことだった。

さつき抱きしめられたときに、すでに躰には発疹が出てしまった。

息もままならず、パニックで過呼吸になる寸前だ。

「お願い止めて！」

大粒の涙を流す紅葉の眼が見開かれた。

胸を服の上から揉まれる不快な感触が背筋まで凍らせる。

スカートを捲し上げられ、男の指先が紅葉の内腿を刺激した。

「お願い……やめて……」

「てめえの中にいつばい出してやるぜ」

マスクの下の口は下卑た笑いを浮かべているに違いない。

呼吸を荒くした紅葉の足先や手先が痺れを帯びてきた。ここ

まま世界が白くなって気を失いそうだ。

紅葉は男の手が太腿から上を目指しているのに気づき、その

手を掴んで必死に押し放そうとした。が、その手を逆に掴まれ、

押し返そうとしていた力が勢い余って、紅葉の手は硬いなにか

に触れてしまった。

「どうだ、これがおまえの中に入るんだぜ」

男のズボンの下でそり立つモノを紅葉は触らされていたのだ。

「イヤーーーーッ！！」

その絶叫は公衆トイレの外まで木霊し、公園の中を歩いていった少女の耳にも届いた。

公園の中心で足を止めたのはアリスだった。

「今の声……紅葉様？」

アリスは眩きながら公衆トイレへ向かって歩いていったとき、
電脳に通信が入った。

《……アリス……すぐに……僕のところへ……》

尋常ではない咳き込む音が聴こえアリスは慌てた。

《愁斗様！》

返事はなかった。

《愁斗様！》

やはり返事はなかった。

主人が危機に陥っていることを知り、アリスは踵を返して愁斗の元へ急いだ。

アリスは紅葉を見捨てたのだ。

そして、アリスは見捨てた相手に向かって呟く。

「……死ねばいいのに」

アリスに死を願われたとも知らずに紅葉は生きたいと願っていた。

犯されて殺されるなんて屈辱だった。

犯されるよりも死を選びたかったが、“姉”を残して死ぬわけにはいかない。二人で復讐を誓ったのだ。地を這ってでも生き抜いてみせる。

紅葉は渾身の力を込めて男の股間から手を放そうとした。

「わたしはあなたのモノになんてならない！」

「オレに犯されそうになつて鼻息を荒くしてるクセに」

「違う！」

男性恐怖症の紅葉は失神寸前だった。それでも呼吸を整えながら、意識を持ちこたえさせているのだ。ここで失神したら確実に犯されてしまう。

足の感覚がなくなりつつあるのを紅葉は感じていた。このままでは立っていることすらできなくなってしまう。

意を決して紅葉は男に体当たりをした。

男はドアに激突して一瞬だけ握っていた紅葉の手から力が抜けた。

続けざまに紅葉は蹴りを繰り返し、男の腹を靴の裏が抉ってドアごと吹っ飛ばした。

背中から倒れた男の上を飛び越えて紅葉は逃げ出そうとした。一刻も早く 般若面 の元に行かなくてはならない。

しかし、焦りに拍車をかけるように紅葉の足首が掴まれ、紅葉は床に手をつけて転倒してしまった。

汚いタイル床に横顔が付きそうになつてしまった。

すぐに紅葉が後ろに目をやると、倒れたままの男が紅葉の足首を掴んで、自分の元へ手繰り寄せようとしていた。

咄嗟に紅葉は男の頭頂部に蹴りを喰らわせ、相手が怯んで足首を放した瞬間に立ち上がって逃げた。

公衆トイレを脱出した紅葉は地面の落ちていた鞆を拾い上げ、

中から 般若面 を取り出して顔に被せた。

すると 般若面 は顔の皮膚と融合し、眠りから“姉”が覚
醒た。

「殺してやる、殺してやる、出てきやがれクソ野郎！」

全身から狂気を漲らせながら呉葉は憤怒した。

妹の悲痛な叫びは姉の耳にも届いていた。目で見えなくとも、
呉葉は妹のされていたことを感じていた。

黒い雲によって月は隠され、帽子を被り直しながら出て来る
男の背後で、蛾の舞う公衆トイレだけが光を放っていた。

般若面 がさらに恐ろしい形相に変化した。この面は生き
ているのだ。すでに面は顔の一部として融合していた。

男は 般若面 を見ておどけ笑った。

「そんな怖い顔してどうしたんだ？」

「貴様を罅り殺してやる！」

「声までまるで別人だな」

「紅葉に危害を加える野郎は血祭りに上げてやる」

「オレはおまえを犯し殺す。ただ、その仮面は邪魔だな」

「特に女を強姦しようとするような野郎は性器を引き千切って、
ケツの穴に突っ込んでやる！」

汚い言葉を吐く呉葉は相手を苦しませて殺すことを執念して
いた。

呉葉は持っていた鞆の中から刃がケースに入った裁ち鋏を取
り出した。

まるで鞘から刀を抜くように、呉葉の眼前で鋏は抜かれた。

鉄の刃は両刃だった。つまり、通常の鉄とは異なり、外側にも刃がついていたのだ。まさにこれは武器だ。人を傷つけるために刃がついている。

裁ち鉄を構えた呉葉を前に、目深に被った帽子の奥で男は眼を輝かせた。

「いいもん持つてるじゃねえか、オレの母親そっくりだぜ」

「貴様のような外道を生んだ女と一緒にするな」

「そうだな、おまえの方がイイ女だもんな」

「良い女か……まずはその目玉を抉り出してやる！」

般若面の口が裂け、鋭い牙を覗かせながら呉葉は男に襲い掛かった。

びゅんと風が鳴った。

飛び退いた男の首を後一步で逃した。

再び裁ち鉄を小太刀のように構えて殴るように斬る。

びゅんと、今度は男の胸元を斬り、Ｔシャツに横へ斬撃が残った。

「痛えッ……少しヒリッとしたぜ」

「次はザクツとやってやる！」

「やれるもんならやってみな鬼婆ア！」

「その舌も引っこ抜いてやる！」

呉葉は手よりもリーチの長い回し蹴りを放つが、それもいとも簡単に躲わされてしまった。

「うへへッ、パンツ丸見えだったぜ」

「うるさい外道！」

速攻で地面を蹴って間合いを詰めた呉葉の鉄が肉にめり込んだ。

男の首が血を拭き、般若面 が憤怒に染まる。

「うごっ、うぎやがあ……」

血の噴き出る首を必死に押さえて男は地面の上で七転八倒する。

蒼白い死相が男の顔に浮かび、男が地獄へ連れて行かれるのは時間の問題かと思われた。

しかし、変異が起きた。

男の筋肉が空気を入れたように膨らみ、ダボダボだったTシャツが限界まで伸ばされた。

「オレはまだまだ死なないぜ！」

辺りには邪気が満ちていた。

怨霊が集まってきているような寒気が肌を刺す。

男は立ち上がった。

血を吸ったTシャツはどす黒く、マスクや顎にもべっとり

と赤い血が付いていた。

呉葉は目の前の男が真の化け物であることを知った。

「すでに人に非ずか……」

斬ったはずの首はすでに塞がり、山のようになった傷痕を残している。治癒力も人を凌駕しているのだ。

「うおおおおっ！」

男は咆えた。

「力が漲ってきたらやりたくてやりたくて我慢できないぜ！」

男は腰を振って呉葉を挑発した。

「そんなにやりたきや自分で啜えやがれ！」

こちらも負けじと挑発した。

互いに狂気に満ち溢れ男と呉葉は対峙した。

妖気と鬼気が混ざることなく渦巻き、殺気が空気を氷結させる。

先に仕掛けたのは呉葉だった。

裁ち鋏をフックパンチのように大きく振る。

太くなつた男の腕を伸びる。

裁ち鋏を持った呉葉の手首が強く握られ、思わず呉葉は裁ち鋏を地面に落としてしまった。

地面に刃先を突き立てた裁ち鋏を男は遠くへ蹴り飛ばした。

草むらに消えた裁ち鋏。

呉葉は手首を捻られたままだ。

捻られている方向とは逆に回転しながら呉葉は回し蹴りを男の側頭部にヒットさせた。

蹴りを喰らった男は揺らがない。それどころかすぐに反撃をしてきた。

呉葉の躰はいとも簡単に空中で振り回され、ハンマー投げのように遠くへ飛ばされてしまった。

「くッ……」

地面に四つん這いになって呉葉は男を睨んだ。

「こんなところで負けられない。」

「殺してやる！」

狂い叫んで立ち上がった呉葉は両手を胸の前に突き出した。

「紅葉が怖がるから封印していたけれど、貴様はこれで殺してやる！」

「来いよ、やれよ！」

男は両手を大きく広げて呉葉を挑発する。呉葉にとつて的が大きくなつたのは好都合だつた。

「紅葉の顔を焼いた忌々しいこの炎で貴様も焼いてやるわ！」
突き出された呉葉の両手が燃え上がり、渦巻く紅蓮の業火が男に襲い掛かつた。

男は両手を広げて動かなかつた 否、動けなかつた。

紅葉のまさかの攻撃に度肝を抜かれ、逃げることもすらできずに男は地獄の業火に呑み込まれた。

「ギヤアアアアアアッ！」

甲高い女のような悲鳴を上げて、火達磨になつた男は地面の上を転がりまわつた。

それを見下す呉葉が笑う。

「苦しめ、もつと苦しめ、キャハハハハハハ……」

炎の光を浴びた 般若面 が醜悪な笑みを浮かべていた。

刹那、炎の中から真つ赤に焼けた腕を伸びた。

呉葉は側頭部にハンマーで殴られたような衝撃を受け、地面に腹ばいになつて倒された。

倒れながら顔を上げたその先を男が背を向けて逃げていく。

「逃がさないわよ！」

呉葉はすぐに立ち上がつて住宅街に逃げ込んだ男が探した。

夜闇は濃い。

焼けた肉の臭いは途切れ、呉葉は男を完全に見失ってしまったのだった。

アリスは開いたエレベーターを飛び出し、愁斗の待つ部屋に向かつて廊下を駆けた。

いったい主人の身になにが起きたのか？

玄関の鍵を開け靴も脱がずに、アリスは迷うことなく愁斗のいる部屋に駆けつけた。

いつも決して点けない明かりを点け、アリスは絶句した。

見開いた蒼眼に映し出される愁斗の姿。床に倒れ口から大量の血を吐いている。

もしかしたらという恐怖がアリスの胸を締め付ける。

血の海に横顔を付ける愁斗の頭を胸に抱き、魂の底からアリスは絶叫した。

「愁斗様！」

彼女がこれほどまでに叫んだことが今まであっただろうか？

「愁斗様、しっかりしてくださいませ！」

アリスの手に伝わる弱々しい心臓の鼓動。呼吸もとても弱々しくなっている。

「お許してください」

メイド服に付いているエプロンを愁斗の口の中に突っ込み、中に溜まっていた血を掻き出す。

そして、愁斗を横に寝かせると、アリスは小さな口を大きく

開いて口付けをした。

愁斗の臉が痙攣するように微かに動いた。

「愁斗様！」

急に愁斗は咳き込み、黒い血の塊を床に吐いた。

アリスは愁斗を胸に抱き、その顔を覗きこみながら背中を擦った。

再び咳き込んだ愁斗は血を吐いて、口元を袖口で拭いアリスの瞳を見る。

「大丈夫、死にはしないさ」

「愁斗様！」

アリスは愁斗の目覚めに歓喜した。涙を出したかったが、涙腺がなくて泣けなかった。

蒼ざめた顔をした愁斗は立ち上がろうとしていた。

「肺や胃を酷くやられたらしい」

「安静にしてくださいませ」

「アリス、肩を貸せ」

不安そうな顔をしてアリスは頷いた。主人の命令は絶対だった。

ずっしりとアリスの肩に押し掛かる愁斗の体重。立つこともままならず、どうしても全てをアリスに預けてしまうのだ。そんな躰にもかかわらず愁斗は行こうとしていた。

「病院に行く」

その言葉を聞いてアリスは胸を撫で下ろしたが、愁斗は言葉を続けた。

「マルバス魔法病院だ」

「なんとおっしゃいますか？」

その病院が悪徳病院だということはアリスも承知していた。

「僕の治療のためじゃない、その場所に用事がある」

「承知いたしました。タクシーはすでにマンシヨンの前に待機させてございます」

血を吐いている愁斗を見つけたときに、アリスは電腦からタクシー会社に電話を入れてあったのだ。救急車ではなくタクシーを呼んだのは、愁斗が表の人間ではなく、裏に属する人間だからだ。

玄関を出てから愁斗を連れて歩く廊下をアリスはいつも以上に長く感じていた。

エレベーターで一階に下りる中、アリスは愁斗の顔を覗き込み、自分の行動が正しいのか自問自答してしまった。

一刻も早く正規の病院に運ぶべきではないか？

幸いこの近くには帝都随一の帝都病院がある。

けれど、アリスにとって愁斗の命令は絶対だった。

ロビーを出ると、マンシヨンの目の前にはタクシーが待機していた。

すぐにタクシーに乗り込みアリスが行き先を告げる。

「帝都病院へ」

アリスは鉄の主従関係を破った。

しかし、それを弱々しい声で愁斗が覆す。

「マルバス魔法病院へ頼む」

もう主人に従うしかないとアリスは決意した。

「規定の三倍お支払いいたしますので、急いでくださいませ」

「夜だから何キロでも出してやるぜ」

タクシーの運ちゃんも徐行なしで、床が抜けるほどにアクセルを踏んだ。

タイヤの焦げるに臭いを後方に残しながら、タクシーは住宅街を駆け抜ける。

帝都で一流のタクシー運転手ともならば、そのドライビングテクニクはF1レーサー以上、ドライビング専門のスタントマン以上だ。

スピードメーターは大通りに入ったときには一八〇キロを超えていた。

マドウ区の魔導街に入ってから時は時速を落としたが、それでもタイヤは悲鳴をあげていた。

前からなにか飛び出してきたみたいな急ブレーキが掛かった。「ついたぜ……けどよ、病院がどつかいっちまつてるぜ？」

運転手は口をぽかんと開けて窓の外を見ていた。

アリスも慌てて窓の外を見た。

すると、そこにあるはずの病院がないのだ。スプーンで掬われたように、病院の真ん中が綺麗に抜けていた。残っているのは外壁と、室外になってしまった一部の室内だ。

タクシー料金を払い、アリスは愁斗を抱えてタクシーを降りた。

抱きかかえられていた愁斗が力なく地面に膝を突く。

「……手がかりが失われた」

マルバス院長の姿もない。

あの院長に送り込まれたあの空間に残してきた紫苑。

核を壊され 暴走 し、内部の 闇 を世界に解き放ってし

まった。

あの場所に残っていた秋葉蘭魔は？

鍵を握っているはずのマルバスがいないのではわかりようが

ない。

病院が消失してしまったことから、当たり前の話だがなにか

の力が働いたことはわかる。

蘭魔が破壊したのか？

それともあの空間で起きた出来事が引き起こしたのか？

愁斗の鼻が微かに感じた臭い。

魔導街の臭いに混ざってしまっってわかりづらいが、この胸を

焼く瘴気の香は 闇 だ。

愁斗は自分たちに近づいてくる気配を感じて振り返った。

「マルバス院長！」

そこに立っていたのは獅子の頭部を持ったマルバス院長だっ

た。

「わしになにか用かのか？ 生憎、病院はあの有様じゃがの」

「いつたいなにがあつた？」

愁斗は藁をも掴む思いで尋ねた。

マルバスと愁斗が顔を合わせたのは、このときがはじめて。

だが、マルバスの眼は愁斗の黒瞳を射抜き、その正体を悟った

ようであつた。

「おまえたちのせいでも、どえらい目に遭つたわい」

愁斗はその言葉にハツとした。まさかこんなところで、正体がバレるとは思つてもみなかったのだ。

押し黙る愁斗にマルバスは牙を覗かせて笑いかけた。

「伊達に長生きはしておらんよ」

「なにがあつたのか訊かせていただきたい」

真摯な瞳で愁斗は相手を見据え、マルバスは快く頷いた。

「おまえさんと“金剛”をわしの 虫籠 に入れたあと、恐ろしい魔気を纏つた男が現れて 虫籠 の中に勝手に入つて行きおつた。

虫籠 は見た目はただの虫籠と変わらんのだが、中に入る と別次元だ。だがな、別次元といつても、こつちの世界にある 虫籠と同じモノには変わりない。一つでありながら、別次元に同時に存在してある。つまりだな、おまえさんたちがあつちで なにかをやらかしてくれたおかげ、こつちの世界に飛び火した ということじゃな。

突然 虫籠 が大爆発して中から黒いなにかが出てきて、そりや大変だったんだが、あの男が簡単に片付けてしまっておつた。それでも被害は見ての通り ん？」

マルバスが長々と話している途中で、愁斗は意識を失つていったのだ。

アリスは懇願する眼つきでマルバスを見つめていた。

「愁斗様をお助けくださいませんか？」

悪魔呼ばわりされることもある医師に救いを求める他なかった。

「よからう、代償はそれなりに高くつくぞ」
マルバスは低い笑いを発した。

カミハラ区某所の安ホテル。

カーテンは硬く閉められ、部屋の電気は全て消されていた。それでも微かにカーテンを通して月明かりが窓辺に差し込んでいる。

カーテンに背を向けて椅子かなにか座っている人影が見える。大まかな輪郭だけで、性別すら判別できないが、もしかしたら帽子のようなものを被っているかもしれない。

カーテン越しの微かな月明かりすら届かない部屋の隅で物音がしている。何者かがぶつぶつと呟いている囁きのようだ。

「どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう……」
脅えるように震える声。それは雅の声だった。どうやら部屋の隅にいるのは雅らしい。

「どうしよう、どうしよう、どうしよう……もう自宅にも帰れない」

自宅に乗り込んできた謎の少女。あの少女が何者だったかはわからないが、もうあの場所には戻ることはできない。

「お兄ちゃんのせいだよ！」

雅は叫んだ。

低い笑い声が闇に響き渡った。

「オレはオレのやりたいことやってるだけだ。次は確実にあいつをオレのもんにするぜ」

お兄ちゃんの声が続いて、第三の声が聴こえる。

「あんたね、次こそは確実にすって？ 首を切られて全身丸焼けにされて尻尾を巻いて逃げてきたのによく言うわよ！」

それはお母さんの声だった。

般若面 を装着した紅葉 呉葉に殺されかけ、死に物狂いでこの安ホテルに逃げてきた。

しかし、お兄ちゃんは心を燃え上がらせて興奮していた。

「オレはな気づいたんだ。強い女ほど屈服させ甲斐があるってな。ますますオレは紅葉って女が気に入ったぜ」

「駄目、お兄ちゃん！ もうよして、どこかに逃げよ 昔のように」

訴える雅にお兄ちゃんはため息を漏らした。

「オレは逃げることに疲れたんだ。この街以外にどこに逃げるんだよ。また外へ行くのか？ ここはオレたちの楽園じゃねえかよ、帝都エデン 最高の街だぜ。オレはこの街を出る気はねえ」

その言葉の意味は、まだこの街で女を殺し続けるという意味だった。そして、次のターゲットは変わらない。

「早く紅葉とやりてえな」

お兄ちゃんの頭の中には紅葉のことしかない。もう雅にそれを止めることはできない。

今までだつてずっと犯行を黙認してきた。そして、ついに紅

葉を誘き寄せるために犯行に加担してしまった。

紅葉は雅に裏切られたことを気づいているだろうか？

善意を利用して悪意のために誘い出された。

雅は朱美たちからまれたときのことを思い出した。周りの人々が見てみぬ振りをして通り過ぎていく中、紅葉が助けに入ってくれた。そういえば、洗って返すと言ったハンカチをまだ返さずに持っている。

ハンカチは洗ってアイロンをかけたが、返す機会がなくて、自宅に置いてきてしまった。もう自宅に戻ることも、紅葉と顔を合わせることもないだろう。

雅の心を覗いたようにお兄ちゃんが言う。

「おまえにはオレと母さんしかないんだ。他は全部他人だ。三人きりで生きてるんだよ」

常に雅の背後に聳えるお兄ちゃんとお母さんの影。二人がいなければ自分は生きていけないと雅もわかっている。

しかし。

「雨宮さんにはもう手を出さないで」

家族以外ではじめて自分を守ってくれた人かもしれない。だから雅はどうしても紅葉がお兄ちゃんの手にかかるのを見えられなかった。

「お願い、お兄ちゃん」

「駄目だ。お前がそう言えば言うほど、オレは紅葉って奴を犯し殺したくなる。お前が気にかけるから悪いんだぞ。雅、お前はオレのもんなんだ。オレ以外の奴を好きになつたりするのは

許せねえ」

「好きとか、そういうのじゃなくて……」

「絶対オレは紅葉を犯し殺してやる！」

ずっと黙っていた母が口を開く。

「あんたじゃ無理よ。さつきも言っただけど、あんた尻尾巻いて逃げたのよ」

雅はお兄ちゃんに反抗できないが、このお母さんだけがお兄ちゃんに悪態をつける。唯一お兄ちゃんを止めることができるかもしれない。

「逃げたんじゃねえよ、様子見だ！」

「相変わらずの減らず口ね。あんた昔から嘘や言い訳は得意なものね」

「クソ婆！」

「クソ婆の息子はなんなのよ！」

「うるせえ！」

「わかったわ、やればいいじゃない。失敗したら返してやる！」

「……クソツ、見てろよ」

お兄ちゃんの憎悪が自分に向けられていることに雅は気づき、その先を想像して躰を火照らせた。いつものように、雅はお兄ちゃんの玩具になる。

「だめえん、お兄ちゃん！」

すでに雅は鼻先で喘いでしまっていた。

疲労感を背負いながら紅葉は身支度を済ませ、学校に行くためにいつもの待ち合わせ場所に向かった。

いつもなら太陽のような笑顔が出迎えてくれるのに、待ち合わせの場所にはつかさの姿がなかった。

心配になってつかさのケータイに連絡を取ろうとするが、全く繋がらない。

マンションに戻ってつかさの部屋に行ったが、いくら玄関チャイムを鳴らしても反応はなかった。不安が過ぎるがこんなことで、いちいち管理人に連絡して部屋の中を調べてもらうわけにもいれない。

疲労感が倦怠感に変わり、心身ともに重く紅葉に押し掛かる。学校についてクラスを見回すが、やはりつかさの姿はない。それどころか雅の姿もなかった。

昨日の雅の様子は明らかに可笑しかった。

そういえば、つかさと雅の自宅を訪ねたとき、つかさの様子がいつもと違ったような気がした。特に帰り道では、つかさは難しい顔をして歩いていて、話しかけることに紅葉は躊躇してしまった。

一時間目の授業がはじまっても、紅葉は授業に集中することができずにいた。

つかさがどこかへ行ってしまったこと、雅が今日も学校に来てないこと、昨晚の公園での出来事。つかさの行方は別として、雅のことと公園での出来事は繋がりがありそうだ。

雅からの電話であの公園へ駆けつけた。

自分を襲ったあの男に雅がなにかをされたのだと紅葉は考えた。そう、紅葉はあの電話が雅の演技だったことに気づいていないのだ。共犯者の雅を被害者だと思いついでいるのだ。

紅葉は知らなかった。彼女の知らないところで、多くのことが起こっていたことを知らなかった。

事件は複雑に蜘蛛の巣のように絡み合い、紅葉はそこに捉えられてしまった獲物なのだ。

授業で使っているノートパソコンに自動的に書かれていく授業内容。流れていく文字の羅列を眺めながら、今日も早退をしようか迷っていた紅葉に転機が訪れた。

スカートのポケットでケータイが震えているのに気づき、紅葉はそっとケータイをノートパソコンの蓋で隠しながら見た。

紫苑からのメール。

内容は重要な話があるというだけで、具体的な内容には触れられていなかった。加えて学校が終わる時間に、正門前にアリスを向かわせると書かれていた。

その後も紅葉は授業に集中することができず、いつも以上に長く感じた学校がやっと終わった。

放課後になり紅葉は足早に正門に向かった。

メイド服を着たアリスの姿は少し浮いていた。マドウ区やホウジュ区などでは、よく見る格好だが、住宅地区であるカミハラ区では少し浮いた格好だ。

「お待ちしておりました、紅葉様」

無表情でアリスは一礼した。合わせても紅葉もお辞儀をした。

「お久しぶりです」

紅葉とアリスは互いに面識のある仲だった。

姉妹が紫苑に拾われたあと、紅葉は住む場所を与えられ、今の女子高に通わされることになった。それまでろくな生活をしてこなかった紅葉の生活サポートをして、紫苑との連絡役を務め、なにかと紅葉の身の回りの世話をしてきたのはアリスだった。

最近では紅葉も今の生活に慣れ、アリスと顔を合わせる機会も少なくなっていた。

「別の場所に移動いたしましょう」

アリスに促され、紅葉は少し歩いた場所にあるファミレスに連れて行かれた。

駅前から続く大通りに面したファミレス。今の時間の客の入りはまあまあだ。これから少しずつ混雑してくる。

二人掛けのテーブルに着き、飲み物を「二人分」注文した。

紅葉がオレンジジュースを注文して、アリスは『オレンジ』と言いかけてアイスコーヒーを頼んだ。

アリスは口にくわえていたストローを離し、グラスをテーブルに置いて咳払いをした。

「んっ……久しぶりに飲みました」

その意味を紅葉は知らなかった。紅葉はアリスがヒトではないと聞かされていないのだ。アリスのいう久しぶりとは、久しぶりに食物を口に入れたという意味だった。

アンドロイドが食物を摂取する技術はまだ開発されていない。

それを開発しようとする者も少ないだろう。開発する側の人間にとっては意味のないことだからだ。いちいち食物からエネルギーを得るのは効率的とは言えない。

しかし、アンドロイドとは違う別のモノを創造しようと思うならば、人間のように食物を食べることに意味が生まれる。

完全な生命の創造。

これまで多くの魔導師や科学者が挑戦してきた夢。特にヒトの創造を夢見たものは多い。

錬金術師パラケルススのホムンクルス、フラケンシュタイン博士のフランケンシュタインモンスター、エトセトラ……エトセトラ……。

なにをもってヒトとするか、外見か、魂か、全身サイボーグ手術を受けた人間はヒトか、仮面に魂を宿したモノはヒトと呼べるか？

アリスはヒトとしての大きな要素を胸に持っている。

しかし、今、紅葉に見せるアリスの表情は無表情であった。

「では、順を追ってお話しいたします」

淡々とした口調のアリス。まるで機械のようだ。

紅葉はなにも口を挟まずアリスの話を聴くことにした。

「まず紫苑様はお忙しいため、わたくしが出向いてまいりました」

紅葉は紫苑が秋葉蘭魔との戦いで破壊されたことを知らない。忙しいというのも方便で、愁斗は負傷して思うように活動することができないのだ。

「次に要点でございますが、紅葉様が通う神原女子学園の生徒である近藤香織、猪原由佳、武田朱美が殺害された件につきまして、草薙雅がなんらかの理由でかわっていると思われれます」
「本当に？」

声を潜めて紅葉は少し驚いた。

紅葉は店内を軽く見回して同じ学校の生徒がいないことを確認した。

もしかしたら雅がなにか知っているのではないかと、紅葉は勘を働かせていたが、その考えが現実味を帯びてきた。

アリスが話を続ける。

「決定的な物証はございませんが、雅の兄と母が別々に三人を殺したようでございます。わたくしの捜査でわかったことでございませうが、“今後”に紅葉様が雅の兄に命を狙われる可能性がございます。本日はその忠告をするためにお時間を作っていただいた次第でございます」

淡々とした表情をアリスは崩さなかった。それに比べて、紅葉は恐怖を隠しきれずにいた。

アリスは知っていた。 昨晚、紅葉になにがあつたのか。

恐怖している紅葉の表情を見たアリスは一瞬、顔を艶笑させ、すぐに表情を戻しながらアイスコーヒーに口をつけた。

グラスを置いてアリスは無表情で話を続ける。

「草薙雅、兄、母の三人で住んでいたと思われるマンションは数時間前にわたくしが訪問いたしました。留守のようでございます」

アリスは昨晚の一件の後、改めてあのマンションへ調査に行ったのだ。

紅葉は話を聴いているうちに、酷く渴いてしまった喉へ、オレンジジュースを流し込んだ。

そして、落ち着きを取り戻した紅葉はアリスの瞳を見つめる。

「話は他に？」

「他にはございません」

「紫苑さんはなぜこの事件に？」

「他の事件を追っている過程で、草薙雅の母と思われる人物に遭遇したからでございます。その事件についての詳細につきましては、お答えすることはできません」

「わかりました、ありがとうございます」

また襲われる不安を胸に抱きながら、紅葉はあのマンションに行くことを決めていた。

アリスと別れた紅葉はあのマンションに向かった。

太陽が一番高い位置から下りはじめているが、まだ夕間は遠い。

道路からも安易に見えるマンションの一階の部屋。ベランダの向こうの窓ガラスは割れたままになっていた。けれど、その先は厚く黒いカーテンに遮られ、中の様子を窺うことはできない。

マンションの出入り口から出て来た人影をはたと目にして紅葉は驚いた。

「つかさ？」

連絡が一切つかなかったつかさがここにいたのだ。

当然の疑問に紅葉は首をかしげる。

「どうしてここにいるの？」

「あゝつ、あゝとねえ。ウチなりにいろいろ考えて、ちよつぴり雅のことが気になつたりしちやつたり」

「マンシヨンから出て来たけれど、雅はいた？」

「いないみたい」

アリスの情報どおり、やはりいないらしい。だからといってこのまま帰る他ないというわけでもない。

紅葉はマンシヨン前の道路を少し歩き、割れた窓ガラスを観察した。あの場所からなら簡単に中へ進入できそうだ。

ベランダのフェンスに紅葉が手を掛けたのを見てつかさはからかうように言う。

「神女の優等生がそんなことしていいのかなあ」

神女とは紅葉たちの通う神原女学園の略である。

「誰も見てないからいいの」

「ウチが見てるけど？」

「つかさは数に入らない」

紅葉の言いようにつかさはにやけた。

誰のないことを確認して紅葉はさっとベランダに上がり、運動神経のいいつかさは紅葉よりも軽やかにベランダに降り立った。

重いカーテンを退かしながら、窓枠に残る硝子片を跨いで二

人は部屋の中に入った。

闇の中を漂う空気がとても重く、食べ物腐った臭いが微かにしている。

壁伝いに探した照明のスイッチを紅葉が点けた。

蛍光灯の白い光が闇を追い払い、紅葉は目に飛び込んできたモノに絶句した。

カーテンにびっしりと呪符が無作為に張られていたのだ。

この呪符はなにを意味している？

紅葉が疑問に思う横でつかさは部屋を引つ掻き回していた。

クローゼット開けて中の衣服を床に放り投げる。まるで発掘だ。

「ちよつとつかさ！」

紅葉は柳眉を立てた。

「なに怒ってんの？」

理解できないといった感じでつかさは目をしばたいた。

「なにつて強盗みたいなことしないでよ」

怒っているというより呆れた口調で紅葉は言い、気持ちを切り替えようとしてハツと気付いた。

「そう、そうだ、つかさはなぜここに来たの？」

「だからっつ、ウチなりに考えて、雅がこの家になんか隠してるっばいって思ったりとかぁ」

「つかさはなにを知ってるの？」

つかさがどのように事件にかかわっているのか紅葉は知らなかった。紅葉にとつてつかさはつかさでしかないのだ。

「なにつて、紅葉が勝手に入ってくからウチも追っかけただけ

じゃん。そしてたらこの異様な部屋。なんかありそうだから探してただけだよ」

「……違う。わたしが来る前にかさは先にいた。なぜ？」

「だから、ウチなりにいろいろいると……」

「そのいろいろってなに？」

疑問は不信に変わりつつあった。

「だから、昨日の雅の様子を見たら誰でも気になるじゃん。だから来たんだってば」

「だったらなんで学校を休んだの？ 今朝ケータイも繋がらなかったでしょ？」

「ウチがよく寝坊するの知ってるじゃん、ついでにサボり癖があるのも。ケータイは充電し忘れてて、起きたら電池切れてたんだもん、しょーがないじゃん」

つかさがよく学校をサボるのも知っていた。たまに連絡がつかなくなることも多々あった。それを知っていながらも紅葉は腑に落ちない。

「言えないの？」

紅葉は不安そうな瞳でつかさを見つめた。

「今言ったままだってば」

「嘘、そのくらいは嘘わかる。だってずっと一緒にいるのに、つかさのこと信じてたのに……」

だから、いつかつかさになんだったら自分の秘密を言える日が来るかもしれない。そこまで紅葉は考えていた。

「やめてよーウチ重い雰囲気苦手だよあ」

つかさは重く窓を塞いでいたカーテンを力任せに開けた。

外の光が差し込み、新鮮な風が部屋に吹き込んだ。

そして、硬くなっていた紅葉の表情が一変して柔らかくなったのだ。

「ごめんねつかさ……さっきのわたし……ちょっと考えすぎていたかもしれない」

「気にしなくていいってば。きっとこの変な空気が悪いんだよ、なんかさつきから躰の調子悪いような、悪くないような感じだし」

紅葉もそれは感じていた。ただの気分の問題ではなく、この場に長くいると躰がなにかに汚染されるような気がした。

つかさはさつきとクローゼットの中を掻き出す作業をはじめていた。

「誰の趣味かな？」

呟いてつかさはそれを紅葉の足元に放り投げた。

ずっしりと紅葉の足元に落ちたのは鞭であった。続けてつかさが取り出したのは拘束具の数々。手錠や足枷、猿轡まである。

「蝋燭まで見つけちゃった」

つかさは赤く太い蝋燭を握って紅葉に見せた。

ここまですれば察しはつく。この道具の数々はSMの道具だ。蝋燭は火を灯して蝋が溶けた痕跡があるが、埃を被っているので最近は使われていないらしい。

つかさがクローゼットを漁っているとき、紅葉は隣の部屋に移動して、そのままダイニングキッチンを通り過ぎ、トイレと

風呂のドアを立て続けに開けた。

つかさのもとに戻って来た紅葉は不思議そうに呟いた。

「1DKなの？」

それを聞いたつかさは驚いて手を止めた。

「うつそだー、ベッドひとつしかないよ？」

この部屋にはベッドがひとつしかなかった。

つかさが出した服はちゃんと三人分あった。

ぼんとつかさは手を叩いた。

「母さんも兄貴もきつと独立したとかで出て行っちゃったんじゃない？ きつと荷物を残して、たまーに帰ってきたり、来なかつたりみたいないな」

あの草薙早苗が雅の母だとしたら、早苗が家に帰らずにいるような場所を点々としているのは確かだ。しかし。

紅葉は昨日この場所に訪れたときのことを思い出した。

「でも……昨日ここに来たとき、お兄さんが部屋にいるから、わたしたちを中に入れてくれないようなことを言っていた気が……」

「そうだった。だからそれはたまたま兄貴が来てたとかで……SM道具？」

つかさは床に落ちていた鞭を拾い上げ、次にひとつしかないベッドを見た。

「ベッドひとつで足りちゃうカンケイ？」

と、つかさは遠まわしに言った。

紅葉も察するが、すぐに否定する。

「だって兄妹なのに」

「この街なら外よりもそーゆーこと多いと思うケド。グロイ妖物とやつてるほうがウチは不健全だと思っうな」

「でも兄妹でそんな感情を抱くのは……」

自分を見つめるつかさの瞳を見て紅葉はハツとした。魔力がこもっているように人を魅惑するつかさの黒瞳。自分の感情に気づいた紅葉は胸が締め付けられる気分だった。

紅葉はつかさから眼を離して、想いを掻き消すように辺りを調べはじめた。

小さな引き出しを開けた紅葉の手が中に伸ばされる。

綺麗に折りたたまれた白いハンカチ。自分の物だと紅葉はすぐに気がついた。そういえば、雅に貸したまま返してもらっていなかった。

ハンカチを見つめながら物思う紅葉にも気づかず、つかさはベッドの下を探そうと手を伸ばしていた。

「ベッドの下って定番だね……あつ、箱見つけ」

ベッドの下から引きずり出したダンボール箱は玉手箱のようであった。

指輪やネックレスなどの装飾品や、複数の財布やケータイが乱雑に入れられていた。

箱の中を覗き込んだ紅葉は顔をしかめた。

「全部……血が付いてる」

「まるで人を襲って強盗したみたいだね」

「たぶんそのようなものだと思う。つかさに言っていないことが

あるのだけれど……」

「ひっどーいウチに隠し事ですかあ？」

冗談っぽくつかさは言うが、紅葉の顔は曇っている。

「隠し事ではなくて、あまり言いふらしてはいけないと思ったから言わなかったのだけれど、実はね……草薙さんのお母さんとお兄さんが、武田さんたち三人を殺したのか知れない」

「ウソ？」

心の底から驚いたように、つかさは眼を丸くして口を開けた。
「だからわたしはそれが本当かどうか確かめたい」

「……紅葉、あんまり危ないことに首を突っ込んじゃダメだよ」

もう遅い。紅葉はすでに雅の兄と思われる人物に襲われている。こちらがなにもしなくても、向こうから危険がやってくる可能性は大いにあった。

けれど、紅葉は言う。

「心配しないで、危ないことなんてしないから」

けれど、つかさは知っていた。だが、それを言うわけにはいかなかった。

見詰め合う二人。その時間を邪魔するように、紅葉のケータイがスカートポケットで震えた。

「もしもし？」

通話に出た紅葉の顔が急に険しくなった。

朱色に染まった空はすぐにも落ちそうだった。

潮風が凧いでしまっている　予兆。

ミナト区最大の臨海公園を見下ろすように立っている通称ツインタワービル。正式名称は黄昏の塔というのが、その名前はあまり知られていない。

ツインタワービルはノースとサウスに分かれる一〇〇階建ての双子ビルだ。帝都でもっとも夕焼けが綺麗に見える場所としてデートスポットになっているほか、ノースビルはショッピンビルとして機能しているため、観光マップでも大きく取り扱われている。

ノースビルには帝都で一般的に買える物ならば、全て取り揃っていると言ってもいいだろう。もちろん武器も売っている。

警戒警報がビル内に鳴り響き、正面入り口のシャッターが下りた。

ミナト区臨海公園を走る一台のオープンカーが、ノースビルの入り口に突っ込んだ。

車が通常ではありえない大爆発を起こし、辺りを硝煙の煙で覆い隠してしまった。火薬類などの武器を積んでいたのだ。しかし、それを扱える者はすでに車に乗車していなかった。

車に乗車していたモノは　？

煙の中から大王イカのよりも巨大な白い触手が伸びた。

すぐにオープンカーを追ってきた機動警察が到着し、有無を言わせぬまま爆発してしまったオープンカーに目掛けてバズーカ砲を撃ち込んだ。

ますます煙に覆われたその場所で、象が落ちるような音がし

て地面が揺れた。

ズブズブと音を鳴らしながら巨大な生物の影が蠢いている。幾本もの触手が蠢いている。

煙が徐々に晴れ、その先で踊る長い触手　白い蛸のような妖物がそこにはいた。体長は三メートルだが、何十本もある足の長さをいれたら、その全長は計り知れない。そして、その足は蛸のように軟弱なものではなく、硬い鱗に守られていたのだ。妖物を包囲する機動警察の戦闘車両の上を走る影。少女を乗せたバイクが飛び越えた。

風になびく長い黒髪。そこにある顔は人に非ず　般若面。

バイクからハイジャンプして、呉葉は妖物の影に襲い掛かった。

手に持った裁ち鋏が硬い鱗に弾かれ、触手は荒れ狂い呉葉の躰を大きく飛ばした。

地面に片手を付いて滑る呉葉。

足を踏ん張り呉葉は再び妖物に向かって襲い掛かる。

「やってくれるじゃないか！」

呉葉は妖物の躰に埋め込まれた仮面を見ていた。

妖物には目や口など顔がなく、蛸のような頭に異形を模った仮面が埋め込まれていたのだ。

「たこ焼きかい、それともイカ焼きかい！」

呉葉の手から炎の弾　炎翔破が放たれた。

しかし、紅蓮の炎は妖物の仮面に当たる前に、触手によって

叩き消されてしまった。

舌打ちをした呉葉は背中にスピーカー越して声をかけられた。
《民間人に告ぐ、ただちにその場を離れなさい！》

「うるさい！ モンスターハントの許可書ならあとで見せてやるわ！」

嘘も方便だった。

襲い掛かってきた触手を軽やかに躲かし、般若面 が妖物を睨みつけた。

「こいつはアタシの獲物よ」

何人が抱えている情報屋のひとりから連絡があったのは、紅葉がつかさとしたときだった。すぐに自宅のマンションに戻り、着替えを済ませて 般若面 を手に取った。

情報によると仮面コレクターである資産家の家に強盗が入り、いくつかの仮面を盗まれたと警察に通報があったらしい。その仮面の中に源幻刀斎の作があったと聞き、犯人たちを追いかけ来たらこのざまだ。

どうやら逃走中に犯人グループのひとりが面に取り憑かれたらしい。

「お父様の失敗作……娘の手で破壊してやるわ」

失敗作のその意味は仮面が完全に軀と融合できていないことだ。妖物の軀に異形の仮面が“埋め込まれている”ように見える。これでは駄目なのだ。

《怪物退治は我々が引き継ぐ、ただちにその場を離れなさい！》

「うるさいカスども！」

できればこんな場所で派手に戦いたくはなかったが、妖物がここにいるのでは仕方がなかった。

もうしばらくしたら中継カメラも到着するだろう。いや、もうすでにすぐ近くのビル内から撮られているかもしれない。

今や国民総カメラマン時代だ。ケータイのズーム機能を使つて撮った映像は、テレビ画質に十分なほど通用する。ケータイはそのままネットにも接続できるので、ニュースサイトに撮った動画をすぐに投稿できてしまう。

あまり姿を晒されることは好ましくない。早急に敵を片付ける必要が呉葉にはあつた。加えて機動警察が手を出してくるのは時間の問題に思えた。

《仮面の女、ただちに退きなさい。さもないと有事立法に則つて攻撃を開始する！》

「外道がっ！」

呉葉の怒号と共に徹甲弾が妖物に目掛けて発射された。その近くに呉葉がいることなど関係ない。ひとりの人命よりも、一匹の怪物を野放しにした場合の被害が優先された。それが帝都という街だ。

二段式になっていた徹甲弾は一段目が妖物の鱗を突き破ると同時に、二段目が炸裂して妖物の触手が大爆発を起こし、肉塊を飛び散らせて血の雨を降らせた。

爆風の衝撃を受けた呉葉は地面に転がり叫ぶ。

「ざけんじゃねえ！」

妖物は足数本を消失させたが、三回瞬きをする間には次の足が生え変わろうとしていた。

あの胴体についている仮面を破壊しなければならぬのだ。

もしくは、仮面を剥ぎ取る。

海へ向かって動き出す妖物のあとを呉葉が追う。

「逃がしはしないよ！」

呉葉は妖物の前に出ようとしたが、触手の猛攻に阻まれ思うように勸めない。

轟音が鳴り響き徹甲弾の雨が降り注いだ。

だが、妖物の触手がそれを蠅でも叩くかのように打ち飛ばしてしまった。すでに一撃目を受けたときに、徹甲弾に対する免疫ができて、触手に生え揃う鱗はより強靱なものに変化していたのだ。

倒すべき敵によって皮肉にも身を守られた呉葉。だとしても呉葉は攻撃の手を緩めない。

「死に狂え！」

炎翔破よりも激しく美しく、渦を巻く炎の龍　奥義焰龍昇華が放たれる。

炎の芸術というべきその業は、まるで龍が咆哮するように風を焼き、艶やかに美しい紅蓮の口を開けた。

体長三メートルもある妖物を丸呑みにして、炎は地獄の大地が噴き上げるように燃えた。

燃え揺れる炎の前で呉葉は膝を突いた。体力をだいぶ消費してしまった。般若面　を外したときの紅葉への負担は計り知

れなかった。

だが、もう終わった。

「地獄の業火で焼け死ぬがいいわ」

焼け焦げた妖物は黒い塊と化した。と、思われた刹那、黒い皮に輝が入り、脱皮するかのよう妖物は復活を遂げたのだ。

立えずに膝を突く呉葉に触手が襲い掛かる。

触手が宙を舞った。

さらに襲い掛かって来た触手も宙を舞い、連撃された触手は次々と宙を舞った。

「さすがは源幻刀斎作の彫り上げた芸術」

この世のものとは思えぬ美しい魅言葉。その声は恐ろしい魔力を秘めていた。

呉葉の前に背を向ける紅いインバネス。

その美影身と声音を聴いて呉葉は戦慄した。

アタシはこいつを知っている。

インバネス姿の男は指揮者の如く、華麗に手を動かし煌く妖糸を放った。

細切れにされていく妖物は決して再生することはなかった。

斬る場所とタイミングを巧みに心得た神業。この者の妖糸よって斬られた肉は再生しない。

血の海でのた打ち回る妖物の仮面に男が手を掛けた。

めりめりと皮を剥ぎ取る音がした。

「この仮面、私が貰い受ける」

刹那、仮面を剥がされた妖物は元の姿に戻り、その場にはヒ

トの肉塊が残された。

男は振り返って微笑んだ。

その世にも美しく恐ろしい艶笑は、呉葉の目に焼きついた過去の記憶を呼び起こしたのだった。

父は姉だけに業を教えた。

決して呉葉が長女だったからではない。

のちに呉葉はなぜ妹に父は業を教えなかったのか、その理由は身をもって知ることになった。

妹は確実に父の“血”を引いていたのだ。それだけならば父は最高の後継者として妹に業を教えたかもしれない。けれど、きつと父は妹 紅葉の秘めた闇に気づいていたのだ。

呉葉が叔父によって殺されたのち、紅葉は復讐の面として般若面 を彫った。のみを握ることすら父から固く禁じられていた紅葉が、一心不乱で三日三晩の時を費やし眠ることなく彫り上げたのだ。

そして、妄執が彫り上げた 般若面 に呉葉が宿った。この出来事を父が知れば、職人としての喜びと、ひととしての悲しみを覚えたに違いない。

しかし、この時すでに父は姉妹の前から消えてしまったあとだった。

首都京都。

一〇年ほど前の心も凍てつく寒さの厳しい夜だった。

崩壊は突然に訪れた。

最初に聴こえたのは家中の窓ガラスが四散する音だった。続いて母の叫びが聴こえた。

幼い姉妹はベッドで抱き合って震えた。

家で尋常ではないことが起きているのは明白であった。

空気に溶け込む氷の魔性が、暖房のついていた部屋を極寒の地へと変貌させ、じめじめと陰湿な“何か”が部屋中を飛んでいた。

震え上がる姉妹の部屋のドアが優しくノックされた。その優しさが逆に恐ろしく感じられ、道化の皮を被った悪魔が扉の先にいるのではないかと思わせた。

ドアが再びノックされるが、姉妹に鍵を開ける気は毛頭ない。ノブがガチャガチャと音を立てて回され、静かになったかと思うと、鍵は己の存在理由を忘却し、ドアはゆっくりと開かれたのだった。

黒い影が足を伸ばし、ドアの隙間を抜けて部屋に踏み込んだと同時に、姉妹は思わず咽返ってしまった。

視覚では感知できない妖気が部屋を満たし、その人影はベッドで震える姉妹の前で軽く会釈をした。

「影山彪彦と申します」

鴉みたいなコートを着た男は丸いレンズのサングラスを掛けおり、口元は天使みtainな柔和な笑みを浮かべていたが、決して油断のできない魔性の雰囲気醸し出していた。

特に油断ならないのは、笑みを浮かべる影山彪彦と名乗った

男ではなく、その肩に乗る漆黒の鴉が姉妹を獲物として見ていることだ。

「脅えないでください。わたくしもこの子ども子供が大好きです」

彪彦の言葉とは裏腹に鴉の眼つきは鋭い。

呉葉は妹の体を抱え込んだ。

「あなた何者なの、妹になにかしたらただじゃおかないわよ！」

「元気の良いお嬢さんですね。わたくしたちは魔導結社D Cの団員、あなた方のお父様に用があつて参上いたしました」

「お父様に？」

と、呉葉が尋ねたとき、別の部屋で母の悲鳴が聴こえた。

すぐに立ち上がるうとした呉葉を彪彦が手を突き出して制止させた。

「できれば動かないでもらいたい。先ほども言いましたが、わたくしは子供が大好きです。他の仲間はどうだか知りませんが、あなた方が顔を出せば殺されますよ」

彪彦は微笑んだ。その微笑のなんと残酷なことか。姉妹は震え上がつて互いを支えあつた。

紅葉はいつの間にか眼に涙を溜めて肩を震わせていた。恐怖に蝕まれながらも、紅葉は声を必死に押し殺していた。そんな妹の頭を呉葉は撫でた。

「大丈夫よ、紅葉のことはアタシが守るわ」

「……お姉ちゃん」

涙ぐむ子供を前にした彪彦は握っていた拳を開き、手の中から魔法のように二粒の飴玉を出した。

「ささっ、どうぞお食べください」

呉葉は飴玉が乗せられた彪彦の手にゆっくりと手を伸ばし、いきなり叩いた。

床に転がるキャンディーを見て彪彦は残念そうな顔をする。

「キャンディーはお嫌いですか。わたくしのお手製のスペシャルデリシャスなキャンディーだったのですが」

彪彦の肩に乗っていた鴉が床に降り、落ちていたキャンディーを上手に嘴で摘むと、袋に入ったまま二個続けて呑み込んだ。

と、同時に紅葉は呉葉の手を握ってベッドから飛び降りた。

「お姉ちゃん来て！」

部屋を駆け出して行った姉妹の背中を見ながら鴉はため息を吐いて見送った。

紅葉に引つ張られながら呉葉は廊下を走り、階段を駆け下りて暖炉のあるリビングまで走った。

そこで姉妹の足が不意に止められた。

鮮やかに紅いインバネスを纏う背中から伸びた男の腕。その先にはなんと全裸の母が首を絞められていたのだ。

意識を失ったようにがくりと首から力の抜けた母を、インバネスの男は物を扱うように軽く押し飛ばし、母は人形のように床に転がった。

大男に後ろから羽交い絞めされていた父は全てを目撃して絶叫した。

「うあああああああつっ！」

姉妹は声が出なかった。

床に横顔を押し付けた母の顔が蠟人形のように瞬きもせずこちらを見ている。

死んでいる。

そして、母を殺した男は紅いインバネスを翻して振り返り、世にも美しく恐ろしい艶笑は姉妹の目に焼きついた。

姉妹はこの男のことをヒトではないと思った。

あんな妖艶な闇色をした瞳を持っている者は魔性だ。人間の皮を被った悪魔だ。

「ぎゃあああああつっ！」

絶叫をあげた紅葉が紅い男に向かって飛び掛かった。

紅葉も我慢できずに飛び掛かった。

だが、姉妹の抵抗も虚しく、男が腕を払っただけで姉妹は揃って後方に吹き飛ばされてしまった。

「娘たちに手を出すな！」

父は必死に大男から逃げ出そうとするが、羽交い絞めにされた躰はまったく動かない。

姉妹は互いに支え合い立ち上がり、再び母を殺した男に飛び掛かるうとした。

しかし、その前に突如として立ち塞がる長身の影。

「おやめなさい」

肩に鴉に乗せた彪彦であった。

「死を急ぐことはありません。ねえ蘭魔さん？」

彪彦に顔を向けられたインバネスの男　　蘭魔は冷たく言い放つ。

「恐ろしき血を受け継ぐ者。そのような存在はこの世にただひとりでいい　殺せ」

その言葉を聞いて父が叫ぶ。

「逃げる、逃げる呉葉、紅葉！」

今度は姉が妹の手を取って逃げた。

玄関に向かって走る姉妹の前に火柱が立ち塞がった。

後ろに引き返そうとしたが、気がつけば辺りは火の海に包まれていた。家中に火がつけられたのだ。

「お姉ちゃん！」

紅葉は泣き叫んだ。

「大丈夫よ、心配いらなわ」

呉葉は紅葉の手を引いて、炎から逃げるように二階へと追いやられた。

火の手は階段のすぐそこまで迫っている。

灼熱の熱気が辺りに立ち込め、煙まで下から上がってくる。

追い詰められていく姉妹。

そこに更なる追い討ちが立ちはだかる。

炎を纏った猛犬　ファイアドッグが姉妹の行方手で待ち構えていたのだ。

狭い廊下で逃げ場などなかった。

ファイアドッグが鋭い牙を剥いて飛び掛かってくる。

迫る脅威に呉葉は紅葉の手を引いたが間に合わなかった。

眼を大きく見開いて動けない紅葉。

地獄の炎が紅葉の顔の横を擦り抜ける。

「きやあああああああつ！」

妹の悲痛な叫びが呉葉の胸を打ち砕いた。

「紅葉ッ！」

顔を押しさえて床でのた打ち回る紅葉を抱きかかえた呉葉は絶句した。

赤く腫れ上がり醜悪に変わり果ててしまった妹の顔半分を見て、呉葉は無言のまま号泣した。

しかし、ここで動かなければ殺される。

呉葉は痙攣する紅葉を抱きかかえ、強引に走らせて近くの部屋に逃げ込んだ。

そこもすでに火に包まれ部屋は燃え崩れ、後ろからはファイアドッグがゆっくりと威嚇するように追ってくる。

「絶対、絶対……生き延びて復讐してやる！」

呉葉は叫び、紅葉を抱きかかえながら割れた窓から地面に飛び降りた。

落ちて来るように迫る地面。

必死に呉葉は紅葉を抱き庇いながら地面に着地し、激突の衝撃と共に稲妻が落ちたような激痛が足を襲った。

「ぐッ……」

呉葉は地面に倒れながらも紅葉を庇った。その代償は右足の骨折だったが、この程度で済んだのは奇跡だったかもしれない。しかし、奇跡は儂くも終わりを迎えようとしていた。

意識のない紅葉を抱きかかえた呉葉の耳に届いた唸り声。背後から迫る殺気。

呉葉が振り返ると、そこにはファイアドッグたちが群を成し、姉妹との距離を少しずつ狭めていた。

歯を食いしばる呉葉は折れた足を強引に動かさし、激痛に耐えながら紅葉を抱えて引きずった。

ファイアドッグとの距離は三メートルを切っていた。

追い詰められた姉妹の行く手には崖があり、その下には大きな川が流れていた。

家の真横を流れる川での家族との温かい思い出。

しかし、今そこに流れる川は冬の凍てつく寒さを孕んでいる。

呉葉の眼に映る炎の山。

火の粉を上げる家が激しく燃え散ろうしていた。

あの家での思い出はすべて灰へと変わる。

意識のない紅葉を呉葉は強く抱いた。

ファイアドッグが喉を鳴らして襲い来る。

そして、姉妹は凍てつく川へと身を投じたのだった。

水しぶきを上げて姉妹を呑み込んだ川の水が、抉るように冷たく躰を刺す。

凍える水の中。

呉葉は紅葉を強く抱きしめて、ただ生きたいと願った。

そこが自宅の玄関だと気づいた紅葉は力なく床に倒れた。

伸ばされた手の先には 般若面 が転がっている。

ただ、ここまでの記憶がまったくくない。

父が彫った面を探すため 般若面 を被った。

そこからここまでの記憶がない。けれど、そのことを考える余力が今の紅葉には残されていなかった。

躰が鉛のように重く、間接や筋肉が激しく痛む。

意識が薄れていくのを紅葉は感じた。

目に見える廊下が徐々に闇に覆われていく。

そして、紅葉は闇に堕ちた。

ケタケタと耳障りな嗤い声で紅葉は瞳を開けた。

紅葉の目の前には“名無し猫”が鎮座していた。また、この夢の世界に来てしまった。

「もういい加減にして、あなたの顔なんて見たくない」

紅葉は不安を覚えていた。ここ連日のように現れる“名無し猫”。前はこんなことなどなかった。数ヶ月に一度、姿を見せればよいほうだった。

「見たくない、会いたくない、死んじまえなんて言われても俺様は消えないぜ」

ケタケタ嗤う“名無し猫”。

紅葉は耳を塞いでその場にしゃがみ込んだ。

「もうあなたの話なんて聞かない。あなたになんか惑わされな
い」

「耳を塞いでも無駄だぜ。この世界は夢だ、物質界の常識には
囚われない。俺様の声はお前の魂に直接届くんだ」

「なら黙って」

「ヤダね。俺様はお前の知りたいことを教えてやるために、わざわざ現れてやったんだぞ？」

なにかと尋ねようとして紅葉は口を噤んだ。ここで尋ねたら相手のペースに乗せられてしまう。

しかし、結果は同じだった。「名無し猫」は訊きもしないのに勝手に話しはじめたのだ。

「いいこと教えてやるよ。お前、般若面を被ってるときの記憶がないだろ？」

「……………」

紅葉は黙り込むことに決めた。

「そのときの記憶がお前の中に眠ってるって言ったらどうする？」

「ッ!？」

思いもしなかったことに紅葉は表情を驚かせてしまった。

「お前って本当にわかりやすい奴だな。顔にすぐ出す癖は直した方が身のためだぞ」

「うるさい、あなたには関係ないでしょう」

「ケケケツ、せっかく忠告してやってるんだぞ。けどな、眠ってる記憶の話は気になるんだろう？」

「…………… 本当にそんな記憶あるの？」

相手のペースに乗せられまいと思っていたのも、ここが限界だった。

「名無し猫」はケタケタと嗤い言った。

「ある。無意識の中の意識に埋もれた記憶だ。その記憶、欲し

くないか？」

「なにが目的？」

「俺様の善意だ」

「嘘、絶対に嘘」

“名無し猫”がなにも企んでいないはずがない。きつとなにか紅葉を陥れるなにかがあるのだ。

「どうする？」

と尋ねる“名無し猫”に紅葉は首を横に振った。

「欲しくない」

「そりゃ残念だ。まあいいさ、そのうち姉に訊けばいいことさ

……ケケケツ」

そう、“姉”に訊けばすべて済むこと。般若面を被って記憶のないときのことは、いつもそうやって“姉”に話を聞いてきた。

「でもな、言葉はすべてを正しく伝えるわけじゃないぜ」

“名無し猫”はそう言ってケタケタと嗤い、耳障りな音を聴きながら紅葉は目覚めた。

気がつくとそのは自宅の玄関だった。さつき気を失った場所と同じ場所だ。

紅葉は重たい躰に鞭を打って立ち上がり、廊下に落ちていた般若面を手に取った。

般若面に触れたのに、エネルギーを吸われることもなく、“姉”の意識も紅葉に流れ込んで来なかった。

「お姉ちゃん？」

声をかけても返事はなかった。

「お姉ちゃん？」

ぐつと引かれるように紅葉はエネルギーを吸われ、思わず床に膝を突いてしまった。

《ごめんなさい、少し眠っていたの》

“姉”は完全な眠りに落ちていたのだ。紅葉が般若面を被って戦ったあとにはよくあることだった。

人に触れられることによつて、その者のエネルギーを吸つて“姉”は覚醒める。その覚醒めるというのは、外部との接触ができる状態のことをいい、覚醒めていないときも“姉”の意識はちゃんとある。その意識すらもない状態 生物でいう眠りの状態にあるときは、般若面に触れてもなんの反応も起きないのだ。

「お姉ちゃん、なにがあつたの？」

《あの情報は本当だったわ》

「お父様の面が見つかったの？」

《ええ、失敗作だったわ。それを被つた奴が中途半端な出来損ないの怪物になったから、アタシがそれを倒し面を……破壊したわ》

“姉”の記憶に蘇る紅い影。

この仮面、私が貰い受ける。と、その男は言った。

駆け巡る戦慄。

そして、男は紅葉に尋ねたのだ。

お前の被っている面はなんだ？

復讐の相手を目の前に、呉葉は必死になって逃げることしかできなかった。

「お姉ちゃん？」

黙ってしまったっている“姉”に紅葉が声をかけた。

「他には？」

《えっ？》

「だって、盗まれたお父様の面は一つじゃなかったのでしょう？」

《……燃えてしまったと思うわ。犯人が乗っていた車が爆発して、きつとにも残っていない》

果たして本当にそうなのか自信はない。今、“姉”の頭を渦巻いているのは恐怖だ。紅い影への恐怖以外、なにかを考える余裕はなかった。

《ごめんなさい紅葉、とても疲れてしまったわ。あなたも疲れしているでしょう、今日はゆっくりおやすみなさい》

「……うん」

吸われていたエネルギーが止まった。“姉”が眠りに落ちたのだ。

紅葉は“姉”に疑問を覚えたが、それを訊くことはできなかった。

“名無し猫”の言葉が紅葉を不安にさせた。

あのととき言った“名無し猫”の言葉の意味を理解したのだ。

紅葉は“姉”の語ったことしか知らない。

“姉”が敵の肉を切り裂いても、その感触を紅葉が知ること

はない。

もし「姉」が嘘を吐いても、紅葉は嘘を真実として思い続けるかもしれない。

紅葉は深く深呼吸をして首を振った。

「姉」を信じなくてどうすると紅葉は思ったのだ。常に自分のことを考え、守り続けてきてくれた「姉」。「姉」がいなければ、今まで生きてこられなかった。

「だからこれからもお姉ちゃんのこと信じる」

紅葉は新たに誓いを立て、眠りについた「姉」をいつもの場所にそつと置いた。

そして、べたつく躰と今の気分を流すためにシャワーを浴びることにした。

紅葉が妖物と戦っているほぼ同時刻のこと。

その仮面を手に入れたのは偶然だった。

薄暗くなりはじめた繁華街を雅はお兄ちゃんを車椅子に乗せて進んでいた。

お兄ちゃんは帽子を目深に被り、ミイラ男のように全身に包帯が巻かれ、その上から服が着せられていた。それだけではない、躰中には呪文の書かれた呪符が張られていたのだ。

異様な雰囲気醸し出しているが、変わった格好をしている者などこの街にはいくらでもある。ただ、その二人の雰囲気はこの街でも特異なモノであった。

胸焼けを起こす瘴気と腐食臭。危険なモノがいると、誰もが

二人に道を空けた。

車椅子を押す雅の手が止まった。

露天に並べられえるガラクタが目にも留まった。

銃器やネックレスやノートパソコンなど、拾った物を修理して店に並べる露天商だ。

その中で雅の興味を惹いたのは、不気味な異形を模った仮面だった。

「その仮面どうしたの？」

と、雅が訊くと、露天商はすぐに答えた。

「帝都警察のパトカーに追われてた奴らが落としていったらしい。俺はそれを譲ってもらったんだ」

「その仮面を売ってください」

「金なんていらぬ。この仮面、手に入れたときには思わなかったんだが、だんだんと気味悪くなってきた。この仮面をただでやるから、お前たちも早くどこかに行ってくれないか……商売の邪魔なんだ」

露天商の声は震えていた。

辺りの人々が露天を避けて大回りに歩いている。それに気づいた雅は仮面を受け取ると、俯いてお兄ちゃんを乗せた車椅子を押した。

仮面を手に入れた雅は潜伏先の安ホテルを探し、部屋に入るとすぐにカーテンをすべて閉めて電気を消した。

薄暗い部屋の中にお兄ちゃんの声が響き渡る。

「その仮面を被ってみよう」

雅は包帯の上から仮面をお兄ちゃんの顔に被せた。

暗闇の中で雅は眼を見開いた。

闇の中にあっても、すぐ近くで見ていた雅にはわかった。

仮面が包帯ごとお兄ちゃんの顔と融合したのだ。

雅はお兄ちゃんの頬に触れた。

皮膚の感触が指に伝わった。けれど、そこにあるのはもうお

兄ちゃんの顔ではない。不気味に嗤う異形の顔。

そして、異形の顔についた魚のような口が言葉を発したのだ。

「……も……みじを……犯……行く……」

熱いシャワーが顔に降り注ぐ。

目を瞑る紅葉の顔をシャワーが流れ、首筋を通り膨よかな胸の谷間を滑り落ちる。

紅葉は細い躰つきをしているが、腹筋は硬く引き締まり、脚は伸びやかな跳躍を予感させ、シャワーノズルを持つ腕も無駄な脂肪ひとつ付いていない。

それでいて膨よかな胸と小ぶりだが形のいいヒップが、男を誘惑するに足りる色香を備えていた。

気持ちよくシャワーを浴びていた紅葉がびくりと躰を震わせた。

玄関の閉まる音がしたような気がしたのだ。

お湯を出したままシャワーノズルを下にして、紅葉は聴覚を研ぎ澄ませた。

特に変わった音はしない。シャワーが床のタイルで弾ける音

だけが聴こえる。

念のためシャワーを止めて確かめようと紅葉が蛇口に手を伸ばした瞬間、風呂のドアが力強く開けられた。

「きゃーッ！」

悲鳴をあげた紅葉。

帽子を目深に被った男がそこにはいた。

驚いた紅葉はとつさに持っていたシャワーを男に向けた。

顔面にシャワーを浴びた男に驚くべき現象が起きた。

男の顔が白い煙を立てて、ぐずぐずと溶けはじめたのだ。

なにか起きたのか紅葉はわからなかったが、その隙に男を突き飛ばして紅葉は風呂を駆け出した。

紅葉は脱衣所に置いてあったバスタオルを手に取り、牀に巻きながらそのまま狭い廊下を駆ける。

紅葉の向かっている場所はただひとつ 般若面 のある

寝室だ。

寝室に飛び込んだ紅葉はすぐさま 般若面 を手に取った。

「お姉ちゃん！」

駄目だ反応がない。

「お姉ちゃん起きて！」

深い眠りに落ちている“姉”が起きることはなかった。

「お姉ちゃん！」

叫んだ紅葉は迫る気配を感じて振り返った。

寝室の入り口に立つ男の姿。シャツをぐっしりと濡らし、その上にある顔は溶けたように崩れていた。鼻は曲がり、口は

ひしゃげ、臉が重く垂れ下がっている。

「よくもやってくれたな！」

怒鳴る男の声に紅葉は聞き覚えがあった。あの公園で自分を襲った奴だ。

深夜の公衆トイレでの出来事を思い出した紅葉は身震いをした。

「今日こそお前を犯してやるぜ！」

両手を広げて襲い掛かって来る男を紅葉は躲かし、近くに置いてあつた通学鞆を拾つた。

すぐさま鞆の中から取り出したのは催涙スプレーだった。

再び襲い掛かって来る男に向かって紅葉は霧状のスプレーを噴射した。

「クソツ、なんだこれは!」

眼を押さえて怯む男を尻目に紅葉は寢室を飛び出し、後ろを振り返ることなく素足のまま玄関を飛び出した。

誰かに助けを求めるか？

「……駄目」

他人を巻き込むわけにはいかなかった。

片手で牀に巻いたバスタオルを押さえ、濡れた髪を揺らしながら紅葉はマンションの廊下を走つた。

エレベーターが見えたが、密室に入るのは危険と判断して紅葉は階段を使った。

一瞬、階段を下りかけ、引き返して階段を上る。

階段の隙間から廊下を見ると、あの男が走っているのが見え

た。早くに逃げなければ掴まってしまふ。けれど紅葉は下ではなく上に逃げたときから決心をしていたのだ。

いつも“姉”ばかりに頼っていられない。自分の身は自分で守らなければならぬと考えたのだ。

階段の途中にあつた格子扉をよじ登り、六階建ての屋上までやって来た。

月下の照らす屋上で紅葉は男を待ち構えた。

少し冷たい夜風が吹き、バスタオルを巻く紅葉の躰を冷やす。男は来た。

紅葉は両手を腰の後ろに回して鞆を隠す。

ここまで走つて来た男は紅葉を見つけてからはゆつくりと歩き、その時間を楽しむように紅葉に近づいてくる。

「もう逃げ場はないぜ」

「逃げる気はない！」

「俺にやられる覚悟ができたのか？」

紅葉はゆつくりと首を横に振つた。

「いいえ、あなたを殺す覚悟をしたの」

「アツハハハハツ……オレを殺すだって？」

男は腹を抱えて大笑いをした。それが紅葉に訪れたチャンスだった。

背中隠し持っていた鞆の中から口径の大きい銃を抜いた紅葉。
葉。

銃声は通常のものよりも重かつた。

発射された弾は男の足元で炸裂し、緑色のゲルを撒き散らし

た。

男は驚いてコンクリから足を上げようとしたが、足とコンクリにへばりついたゲルで足が上がらない。

そう、紅葉が撃った銃は死傷させるための物ではなく、敵の身動きを封じるための物だったのだ。

「クソツ、動けねえ！」

「逃げようとしても無理、それは生きているから」

「なんなんだこれは!？」

「魔導街で買ったスライム弾。帝都警察も犯人捕獲に使用しているものなの」

男の足についたゲル状のスライムはぶよぶよと蠢き、少しずつ躰全体を包み込もうとしていた。

紅葉は手に持っていた鞆を放り投げた。

鞆の換わりに持たれていたのはケースに入った裁ち鋏だった。

両刃の裁ち鋏をケースから抜いた紅葉の手は震えていた。

「ごめんなさい」

紅葉は裁ち鋏を高く振り上げ、一気に迷いを振り払って男の胸に突き刺した。

「ぎゃあああつ！」

心臓を突き刺された男の躰が大きく痙攣した。

紅葉は裁ち鋏を男の胸に刺したまま動けなかった。手が自然と震え、刃の隙間から滲み出す黒血が男のシャツを浸蝕していた。

男の筋肉が脈動した。

刺さっていた裁ち鋏が筋肉に押し戻される。

裁ち鋏が抜かれた傷口から血が噴き出し、紅葉の白いバスタオルを紅く染めた。

なにが起きたのか理解するまで時間はいらなかった。

男の躰に変異が起きていた。

紅葉は“姉”に聴いていた話を思い出した。

筋肉は膨れ上がり、男は雄叫びをあげながら自らのシャツを引き千切った。

慌てた紅葉は裁ち鋏を構えなおして男に突き刺そうとした。だが、裁ち鋏を持った手首が男の巨大な手に止められてしまった。

「たつぷりとお礼をしてやるぜ」

より野太くなった声を出した男は紅葉の躰に巻かれていたバスタオルを剥ぎ取った。

露わにされる紅葉の肉体。

「いやーッ！」

紅葉は残っていた手を振り回して男の頬を引つ搔いた。

頬の肉が剥ぎ取られた　　違う。紅葉は剥ぎ取った男の皮を握り締め、それがなんであるか瞬時に悟った。

「変身マスク！」

闇市などで売られている変身マスク。芸能人や他人に被るだけで簡単に変身できる魔導具だ。ただ、そのマスクは水　特に湯に弱く、汗を搔いたり湯をかけられえるとすぐに溶けてしまふのだ。

「気づいたってどうにもならねえよ、今からお前はオレに犯されるんだ！」

男の股間はパンパンに膨らみ、窮屈そうにズボンの下で脈打っている。

裸にされ、全身を舐めるように見られ、紅葉は声を出さずに大粒の涙を流した。

それでも負けるわけにはいかなかった。

紅葉には男の股間目掛けて足を大きく蹴り上げた。

「ギャツ！」

男は短い悲鳴を上げて紅葉の手首から不意に手を離れた。

地面に両手を付いてしまった紅葉が逃げようとしたとき、近くで火花が打ち上げられたような音がして、爆発と共に男の体が遠くへ吹っ飛ばされた。

地面に伏せていた紅葉が顔を上げると、月下を浴びるひとりの少女がハンドバズーカを構えていた。

「アリスちゃん！」

紅葉はその名を呼んだ。

「こんな夜更けに裸で月光浴でございますか？」

アリス流の毒のこもった冗談だった。

自分に近づいてくるアリスに紅葉は眼を丸くしてしまっている。

「どうして……ここに？」

「紫苑様の言いつけで紅葉様の周りを見張っております」

「じゃあ……どうして……もっと早く助けに……」

緊張の糸の切れた紅葉は号泣した。

「武器を取りに行っておりました」

悪戯にアリスは艶笑してすぐに無表情に戻して屋上の先を眺めた。

アリスの視線の先ではフェンスが内側から押されたように壊れている。

「どうやら落ちたようでございますね」

それはバズーカを喰らった男のことだった。

ほっと胸を撫で下ろす紅葉の耳に狂気に満ちた雄たけびが聴こえた。

男がフェンスをよじ登ろうとしていた。

「てめえら、ただじゃ置かねえぞ！ ポロポロになるまで犯してやる！」

フェンスをちょうど登り終えた男にアリスがバズーカを構えた。

「丁重にお断り申し上げます」

発射されたバズーカの弾は高速で男の腹に当たり、爆発と共に巨体は虚空へ墮とされた。

バスタオルを巻き直した紅葉はすぐさま屋上から地上を眺めたが、夜の暗闇と植え込みのせいによく見えなかった。

後にアリスが地上に確認に向かったが、そこには血を引きずった痕が残されていただけで、男の屍体はそこにはなかった。

翌朝は土曜日で神原女学園も休校だった。

家で死んだように眠る紅葉とは対照的に、つかさは朝早くから遠方に向向いていた。

聖戦の舞台となった 死都東京。

当時の東京は世界一の文明を誇り、他の追隨を許さないほどに栄えていた。

しかし、その栄華の夢も悪夢と変わり、たった三日で東京は壊滅した。

首都東京が死都東京と呼ばれるようになったのは数十年も昔のことである。首都は京都に移され、東京の復興作業も順調に進んでいた 死都街と呼ばれる地域以外は。

狂気を孕み、魔導汚染の深刻な地域。立ち入り禁止区域に指定され、なんども行政による立ち退きが実施されたが、住民たちは断固として立ち退こうとはしなかった。

死人街を出る者も多ければ、呼ばれる者も多い。

つかさの訪れたそこは一見しただけでは、ただの住宅街と変わらなかった。東京の中でも復興に成功した地域だ。

築何年とも知れぬ古い木造二階建てのアパートを道路からつかさは眺めていた。

金属の階段を鳴らし、つかさはアパートの二階へと上がった。つかさは角部屋のドアをノックしようとして、止めて隣の202号室のドアをノックした。

ドアの隙間から顔を覗かせたのは無精髭を生やしている中年男だった。

「なんだ？」

「三年くらい前からこの部屋に住んでる？」

「はア？」

と、男はぼさぼさの髪の毛を掻いてフケを落とした。部屋の奥からは異臭が漂ってきている。

つかさは気にしたふうもなく、隣の201号室を指差して尋ねた。

「三年くらい前に草薙早苗っていう女が住んでたと思うんだけど？」

「誰だそれ？」

「こういう女」

つかさはポケットから一枚のデジタル写真を取り出した。そこに写っている草薙早苗の顔を見て、男は『うゝん』と唸ってしまった。

「見たことあるような、ないような……三年前だろ？」

「だいたい三年」

「兄弟が住んでたような……年の離れた兄貴と、弟だか妹だか、ちっこいガキだったから覚えてないな。俺そんな外出ないしな、隣に誰が住んでんだか知らないだよな」

「そう……ありがとね」

つかさが玄関のドアを閉めようとしたのを男が止めた。

「おい、ちよつと俺んちに寄つていかないか？」

つかさを舐めるように見ている男の眼前にパンチが迫り、鼻すれすれで止められた。

「部屋に詰め込みたきゃ、力づくでどーぞ」

にこやかに笑うつかさ。

男は冷や汗を流して、たじろぎながら後退ったが、それでも粘り強くつかさを物にしようとした。

「一万でどうだ」

呆れた顔をするつかさに男は続ける。

「五万出すから、ちよつと写真を撮るだけでもいいからさあ」

「写真なんか撮られたらネットにばら撒かれるのがオチ」

つかさは玄関をボタンと閉めた。そのドアの向こうで、『うぎゃ』と虫を潰したような声があった。きつと鼻でもぶつけたのだらう。

他の部屋で訊き込みをしようとかさがしていると、音を鳴らしながら老夫が階段を上がってきた。

「ちよつと、話を訊きたいんだけど」

「ん？」

老夫は首を傾げて階段を上りきったところで足を止めた。

「なんの用だ？」

少し険のある物言いだったが、つかさはにこやかに201号室を指して尋ねる。

「三年くらい前に、この部屋にこの女が住んでただけど知ってる？」

写真を見せると、老夫は深く頷いた。

「わしはこのアパートの“ぬし”だ、知らないことはない。草薙早苗という女だな」

「それぞれ、さっすがアパートのヌッシー」

「又ツシーではない、主だ」

「どっちも珍獣でしょ？」

意味ありげに笑うつかさに老夫は柔和に微笑んだ。

「わかるか？」

「帝都から来たからわかるよ」

「そうか帝都か。噂には聞くがわしのようなモノがうようよし
ておるのか？」

「近い存在はたくさんいるけど、お爺さんは全然別格。そこら
の奴らとは格が違うもん」

「嬉しいことを言ってくれる」

「その嬉しいついでに、草薙早苗について教えて」

「いいだろう」

最初は陰のある物腰だった老夫は、いつの間にか柔和な顔つ
きになって話しはじめていた。

「草薙早苗は二人の子連れだった。年の離れた兄弟で血は繋が
つていなかったようだ。母親の早苗はいい母親とは言えず、毎
晩のようにどこかで遊び歩いていたようだな」

「その兄弟の名前は？」

「名前か……名前は………忘れた」

「老朽化が進んでる建物を直した方がいいと思うなあ」

「失礼なこと抜かすでない。もうなにも話してやらん」

怒った老夫が廊下を歩くと、アパート全体がみしみしと音を
立てて揺れた。

「お爺さん、ごめんってば」

つかさが謝ると、老夫は玄関のノブに手をかけながら顔を向けた。

「ひとつだけ教えてやろう」

「ありがとうございます」

「兄弟は母親を刺して殺して逃げた。実際には母親は一命を取り留めたがな」

「どうして刺したの？」

「教えてやらん」

老夫は3と4の間の部屋のドアを開けて消えてしまった。後を追おうにも、203と204の間には最初から部屋など存在していない。

「“主”があれじゃあ他の住人に訊いて回っても疲れるだけっぽい」

つかさは呟いてこのアパートを後にすることにした。

続いてつかさが訪れたのは死都街だった。

倒壊したビルの瓦礫が山を形成し、聖戦の悲惨さを物語る景色が広がっている。死人街の中ではマシなほうだ。亡霊が跋扈する程度だろう。

死人街の中でも酷い場所になると、異形のモノが跋扈し、瘴気を噴き出す底なしの沼地が広がり、空は常に黒雲に覆われ黒い雨が降る。

つかさはテント暮らしをする集落を訪れ、そこにいた住人に写真を見せた。

「この子が二年前くらいまでここで暮らしってたと思うんだけ

ど？」

つかさが見せた写真は最近の雅が写ったものだった。

ボロを着た男はひょいと写真を摘み上げ、そこに写った雅をまじまじと見た。

「雅だろ。どーしょーもねえ兄貴とここで暮らしてた」

「どのあたりがどーしょーもないの？」

「乱暴者だったんだよ。それによ、妹とよろしくやってたんだ」

「よろしくやってた？」

「妹を犯してたみたいだぜ」

血の繋がった実の妹ではないらしいが、本当に男女間の関係を持つていたのかは、他人ではなく二人に直接尋ねてみるしかわからない。

つかさは男から写真を奪い取って返してもらい尋ねる。

「他には？」

「あいつらここを出て行く前に問題を起こしたんだ」

「どんな？」

「殺人だよ、殺人。死人街でも殺人はご法度だ。まあ、先に手を出したのは相手だったんだがな。妹が男に犯されそうになつて相手を殺したらしいぜ」

「それでこの集落を出たと……」

草薙家の足取りを辿りながら、母と兄と妹の関係が掴めてきたが、それでも腑に落ちない疑問がある。

最初に尋ねたアパートで早苗は二人の子供と暮らしていた。

この二人をつかさは雅とその兄だと確信している。そして、兄弟の足取りを追って来たのがここだった。やはりここに住んでいたのは雅だった。

早苗、雅、兄の三人がどのような血の繋がりを持っているか、それはまだ定かではないが、一様の親子関係にあることは確からしい。

最大の疑問。

マドウ区のマルバス魔法病院で紫苑が遭遇した早苗は何者か？

同時にアリスは雅のマンションで聞いた母と思われた声の人物は何者か？

草薙家の三人の他に第四の人物がいるのかもしれない。

寝すぎてしまったのか、紅葉は重たい躰をベッドから起こした。

時計の針は正午を回っている。

紅葉はリビングのソファにぐったりともたれ掛かり、テレビのニュース専門チャンネルをつけた。

世界のニュースからはじまり、帝都のニュースを流し、地域の放送局に取り次いで区ごとの細かいニュースまで取り上げる。紅葉がつけたときには途中からであったが、資産家の家から仮面のコレクションが盗まれたというニュースだった。あの事件だ。

逃走した犯人がツインタワービルで機動警察に包囲されたと

ところで、その場に現れた般若面を被った人物。その映像を見て紅葉は驚かずにはいられなかった。

妖物と戦っているのは紛れもなく 般若面 を被った自分つまり“姉”の呉葉だ。

そして、ニュース映像は突然ノイズでなにも見えなくなってしまう。撮影中にカメラトラブルが起きたらしい。

盗まれた仮面の一部は爆発した車から見つかり、残りは犯人が逃走中に落とし、帝都警察が一部を回収したが、何枚か所在不明のモノがあるらしい。

所在不明の仮面の中には、神の手を持つと云われながらも、彫ることを突然に止めてしまった源幻刀斎の作品が混ざっているらしい。

「お父様の……お姉ちゃんが壊して、残りは燃えたって……」
それとは別の面があつたのだ。

紅葉はテレビをつけたままにして寝室に足を運んでいた。
ぬいぐるみたちに囲まれて置かれている 般若面 を手に取る。

「お姉ちゃん、話があるの」
《どうしたの紅葉？》

紅葉が話しかけると“姉”はすぐに目覚めた。

「お姉ちゃんが妖物と戦ってる映像がニュースで流れていたの」

《なんですって？》

それは予期せぬことではなかったが、“姉”は驚いた声があ

げてしまった。

《仮面を被っているとはいえ、あなたの姿がカメラに映っているのはまずいわ》

「でもね、映像のほとんどは画像が悪かったり、煙に覆われていたり……それから途中で画像にノイズが入って映像が途切れたの」

“姉”は聞かずとも、それがどのシーンだったかわかってしまった。

あの紅い男が現れた場面だ。そうに違いない。

しかし、“姉”はそれを紅葉に告げることはなかった。

「お姉ちゃん……映像が途切れたあと、お父様の面を壊して、残りは車の爆発に巻き込まれたのでしょ？」

“姉”が答えるまで少し間があった。

《……ええ、破壊したわ。残りはおそらく燃えてしまったわ》

「実は他にも盗まれたお父様の面があって、所在が不明らしいの」

《それは本当？》

「ニユースで言っていたから、たぶん」

《探しに行きましょう。もしそれが“力”を持った面だったら危険だわ》

「うん」

紅葉はすぐに身支度を済ませ、シヨルダーバッグの中に 般若面 を入れて出かけた。

ケータイでネット検索しながら犯人たちの情報を集め、帝都

「警察とカーチェイスを繰り広げた現場を辿ることにした。

電車を乗り継ぎ地下ホームから出た紅葉は街を見渡した。

ショッピングビルが立ち並び、土曜日なので人も多い。このどこから訊き込みをするべきか紅葉は考える。

雑踏を歩く人々に話を訊いても意味がない。彼らは遊びに来ているだけで、毎日ここにいるわけではない。話を訊くなら近くのショッピングの店員か、露天商たちだ。

道路わきの歩道を歩きながら紅葉は露天商を探した。

紅葉が目留めたのは路上でアクセサリーを売っている白人の男だった。

「こんにちは」

と、紅葉が声をかけると、気さくな感じで流暢な日本語で返してきた。

「いらつしゃい。今日の君の服装にはこのネックレスなんて似合うと思うケドなア」

「買いたいわけじゃないの、少し話を訊かせて欲しいだけですよ」

紅葉が客じゃないとわかってても男は嫌な顔をしなかった。

「話ってなんだい？」

「昨日、この道で警察に追われた犯人がカーチェイスをして、そのときに犯人がある物を落としたらしいのだけれど知っていますか？」

「ボクが店をやっているのは土日だけだからなア。あっちの男なら毎日この道で店をやっているらしいよ」

男は道路を挟んで向かいの歩道を指差した。そこにはたしかに露天を開く男の姿あった。

「教えてくれてありがとうございます」

頭を下げて立ち去る紅葉の背中に男が声をかける。

「今度は友達をいっぱい連れて買物に来てくれよ」

紅葉は往來する車を避けながら道路を渡った。

今度の露天は一見してガラクタしか売っていないように見えた。

店の前に立った紅葉に露天商が声をかけてくる。

「なにが欲しいんだ？ 俺の店はなんでも揃ってるぜ」

銃器やネックレスやノートパソコンなど、多種多様な物が揃ってはいるが、なんでもというわけではあるまい。

紅葉は商品には目もくれず、露天商の顔を覗きこんだ。

「情報は売っていますか？」

「俺は情報屋じゃねえ。情報なら情報屋に行きな」

「昨日、この道で警察に追われた犯人がカーチェイスをして、そのときに犯人がある物を落としたらしいのだけれど知っていますか？」

この質問に男は慌てた。

「俺は盗んでなんかないぜ、ちゃんと金を出して買い取ったんだ」

だいたい事情を紅葉は察した。

「それで仮面はどこにあるのですか？」

「売った……いや、やった」

「売らずにあげたの？」

「買い取った物を売らずにやるなど考えられない。人に施すほど裕福なら、ガラクタを修理して露天で売りさばいてなどいいい。

男は少しずつ顔から血の気を失っていた。

「あの仮面を持つてると不幸になる気がしたんだ。あいつらも不気味でさっさと消えて欲しかった」

紅葉はその仮面が父の彫った面だと直感的に感じた。

「不気味とは、どのような人たちだったのですか？」

「女の方はお前と同じ年くらいの女だ。その連れの車椅子に乗ってた男が不気味だったんだ。ミイラ男みたいな全身に包帯を巻いて、しかもその上に御札まで貼ってあつたんだよ」

特徴的な格好だ。聞き込みを続けていけば簡単にあとを追えるかもしれない。

「その二人組みはどちらの方角に行きましたか？」

「あつちだ、あつち」

紅葉は男の指さした方角をちらりと見て、視線を戻すと頭を下げた。

「ありがとうございました」

「おい、なんか買ってけよ」

「またの機会に」

またの機会などない。紅葉は足早に雑踏の中に消えた。

有力な情報を手に入れたつかさは死都東京から帝都に戻って

いた。

帝都でも三本の指に入る大都市ミナト区。

賑わっている繁華街の外れ、古いビルが立ち並ぶミナト区の端につかさは来た。

つかさの足は路地の奥へ奥へと運ばれた。

空を見上げると、ビルとビルの間を繋ぐように、右往左往に伸びるパイプ管が目に入る。都市から供給されるエネルギーを盗むためのものだ。

この場所は巨大都市の輝きから生まれた闇。

繁栄を続ける都市の影の象徴と言えるのがスラム街。

アンダーグラウンドな世界にのみ許された、人々の放つ猥雑な価値観と逞しさ。そこに都市の裏の顔が存在している。

スラム街の一区間は ホーム と呼ばれ、そこでは“表”よりも非合法なモノが多く売られ、二十四時間いつでも売春婦たちが歩き回っている。そして、スラムの地下では新興宗教集団や可笑しい実験をする組織などが根城としている。

スラムにある廃ビルの中には悪霊が棲み憑いている場所もあり、スラムの人々でも決して近づかない場所がある。そのビルの中につかさは足を踏み入れた。

灰色の地肌を剥き出しにするコンクリの壁や床。鉄筋の柱が今にも倒壊しそうなビルを辛うじて支えているようだった。

つかさは壊れたエレベーターを素通りして、崩れかけた階段を上った。

二階に着いたつかさは二人の人影を目にした。

車椅子に座る人影と、その傍らに立つ女性。つかさの予想とは違う女性　草薙早苗。

「雅を追って来たのに……そこにいる男は雅の兄貴？」

「そうだよ、あたしの息子じゃないけどね」

早苗の声を聴いてつかさは少し不思議そうな顔をした。

「少し声が違う、雰囲気も……双子……。じゃあ雅は誰の子供？」

「あたしが産んだ子さ」

「戸籍上は存在してないけど、出生届は出してないとか？」

「出すわけないじゃないか、あの子はあたしの奴隷なんだから人権なんかないのさ」

混乱している人間関係につかさは難しい顔をして情報整理をはじめた。

つかさはまるで魂が抜けてしまったような遠い目をして、口調まで変わって独り言のように呟く。

「そこにいる兄はあなたが結婚した男の連れ子だ。男は借金を抱えて失踪、その後も離婚はしていないので兄は戸籍上はあなたの息子だ。そこまでは簡単に調べられた。ただ雅の存在が僕にとってネックだった。戸籍上存在していない、神原女学園から取り寄せた資料が“今”僕の手元にあるが、記入された情報はよくできていたが全部架空のものだった」

ここでつかさは間を置いてから再び口を開いた。

「いや、雅のことよりも……あなたは誰だ？」

「あたしは早苗よ」

「では、僕が会ったのは？」

「知らないね！」

隠し持っていたナイフをちらつかせて早苗が襲い掛かって来た。

つかさは武器を持っていない。この“躰”では妖系を放つこともできなかつた。

迫り来るナイフの刃がつかさの胸を掠めた。

服が少し切られたがつかさは焦らずに飛び退き間合いを取る。それに合わせて早苗は前に飛び、ナイフをつかさの胸に突き刺そうとする。

つかさは弓なり躰を曲げてナイフを躲かし、ナイフを持つ早苗の手首を掴んでそのまま投げ飛ばした。

コンクリの地面に叩きつけられた早苗は受け身もとれず、地面にへばりついて呻き声をあげた。

その声はまるで怨霊の叫び。

叫びはビル内に反響しながら、徐々に大きくなり別のモノを呼び起こした。

怨念のこもった呻き声がそこから聴こえてくる。

ビル内に棲み憑いていた怨霊どもが目を覚ましたのだ。

風が叫びをあげながら飛び交い、その中で早苗は地面に四つ足を付きながら狂気の眼でつかさを睨んでいた。

「あんたの顔なんて剥いでやる！」

獣のように早苗が地面を蹴り上げた。

早苗は覆いかぶさるようにつかさを押し倒した。そのまま馬

乗りになり、手に持っていたナイフをつかさの顔に押し当てようとする。

つかさは咄嗟に早苗の手首を両手で押さえてナイフを眼前で受け止めた。

ナイフを握る早苗の手が震え、それはつかさにも伝わった。眼前に迫るナイフを前にしてもつかさの表情には焦りひとつない。それどころか、早苗に質問を浴びせる余裕まであった。

「ひとつ訊きたい」

「うるさいわよ、黙ってあたしに顔を剥がされなッ！」

「なぜ女ばかりを襲って、その顔ばかりか、女性の象徴を抉り取った？」

今このとき、つかさにナイフを向けている女は連続猟奇殺人鬼の疑いがある。その被害者は美しい女性ばかりで、顔の皮膚を剥がされ、乳房を切り取られ、性器まで抉り取られていた。

なぜそんなことをした？

単純な好奇心がつかさに質問をさせた。

「なぜだ？」

「あたし以外の女どもが男の熱い視線を浴びるなんて気に喰わなかったのさ！」

なんと短絡的な理由だろうか。

つかさは難しい顔をした。

「それが女性心なのか、それとも君が異常なのか、僕には理解できないな」

「あんたも女だったらもっと綺麗になりたいって願望はない

の？ 男たちに振り向いてもらいたいって願望はないわけ！」
叫びながら取り乱して隙のできた早苗に、つかさが強烈なヘ
ッドバッドを喰らわした。

すかさずつかさは頭を回してよろめく早苗の頬を抉るように
殴り、馬乗りになっっている早苗を退かして地面を転がりながら
逃げた。

だが、早苗はすぐに正気を取り戻して再びつかさに襲い掛か
る。

地面に横になったままのつかさの蹴りが早苗の胸を蹴り上げ
た。

後方に早苗が飛ばされると同時につかさは驚いた。

ビル内に鳴り響く咆哮。

辺りを見回したつかさの眼に入ったモノ。それは車椅子に座
って今までまったく微動だにしなかった人影。不気味の仮面を
被った男。

咆哮は獣よりも猛々しく、不気味な仮面から発せられていた。
立ち上がったつかさの背中を撫でる冷たい風。

「……しまった！」

刹那、つかさの脚が見えない力に引きずられ前のめりに転倒
してしまった。

すぐに立ち上がるうとしたが、背中に重いなにかで押さえつ
けられ、耳元では苦しそうな囁きが聴こえた。

つかさは怨霊の力によって拘束されてしまったのだ。

地面に腹ばいに倒されたつかさにさらなる魔の手が襲い掛か

る。

車椅子に座る男の躰から包帯が生き物のように伸び、つかさの四肢を縛り、躰を縛り、上げ、亀甲縛りにして口までも包帯で塞いでしまった。

逃げ出すことのできないつかさに、早苗がナイフをちらつかせながら近づいてくる。

「やっとその顔を剥いでやれるわ」

「……ま……て……」

その恐ろしい声を聴いて、早苗は思わず躰を震わせて脚を止めた。

車椅子に座る男の不気味な仮面の奥で声がする。

「そいつは……人質に……も……みじを……おびき……寄せる……」

自分の失態を悔やんでいたつかさが階段方向に眼をやったとき、その眼が大きく見開かれた。

二人目の草薙早苗だ。

この場所に二人目の草薙早苗が現れたのだ。

どちらがいったい本物の草薙早苗なのか？

あとからこの場所に現れた草薙早苗がヒスメリックな叫び声をあげる。

「誰なのあんた！」

その言葉はもうひとりの“早苗”に浴びせられたものだ。

つかさにはわかっていた。あとから現れた早苗が紫苑の出会った早苗だ。そして、もうひとりの“早苗”を偽者だと、先ほ

どのある出来事で確認していた。

“早苗”も取り乱しながら叫び声をあげる。

「あんたこそ誰なの！」

互いに互いを誰かと問う。

「あたしは草薙早苗よ、あんたは誰よ！」

「あたしが草薙早苗よ！ この偽者！」

「偽者はいあんたじゃないのさ！」

「どうして、どうして……あたしはあたしよ、草薙早苗よ！」

二人は己を草薙早苗だと主張して一步も譲らない。しかし、二人は瓜二つというわけではなかった。似ているが違う。

早苗の顔は人生の疲れを滲み出し、声も煙草の吸いすぎで枯れている。

一方、“早苗”は早苗よりも若く、声も囁れてはいない。

早苗と“早苗”の間には数年の年月を感じた。

笑い声がどこからか聴こえた。仮面だ、仮面の奥で男が笑っている。

「ククククッ……オレが……母さんと呼んだ……んだ……生きると……知ってな」

不気味な仮面を被る男の正体に早苗はこのときはじめて気がついた。

「あんた……わかった、あたしのクソ息子か、そうだろ？」

「そうだ……あんたを……刺した……クソ息子だ」

ここで早苗は、はたともうひとりの“早苗”の正体に勘付いたのだった。

「あんたは……まさ……」

言葉を詰まらせた早苗に“早苗”がナイフを振り上げて襲い掛かった。

「この偽者！」

ナイフは早苗の胸に突き刺さった。

止めといわんばかりにナイフは抉るように廻され、口と眼を限界まで開いた早苗は醜悪な形相で手を伸ばした。

手は“早苗”の顔の触れる瞬間に力を失い地面に垂れ下がり、そのまま早苗は地面に倒れて動かなくなった。

不気味な仮面は笑った。

「やつと……死んだ……ぜ……クソ婆……これで……オレたちを……縛るモノが……ひとつ減った……」

早苗から流れ出る血が地面を浸蝕して、“早苗”の足元まで来たとき、ナイフを力なく落とした“早苗”はしゃがみ込んで絶叫した。

「イヤアアアアアッ！」

その叫び声を聴いて、つかさは“早苗”が誰なのか確信した。

病室のベッドで愁斗は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「……クソッ、紫苑さえいれば」

ベッドの傍らですっと愁斗を見守っていたアリスが口を開く。「なにかございましたか？」

「つかさが捕らえられた。それと、事件の全容がもう少しで掴めそうだ」

ノートパソコンを閉めてベッドから立ち上がろうとする愁斗を、アリスは覆いかぶさるようにして止める。

「お身体に障りましてごさいます」

「つかさを回収しなければならぬ」

「わたくしが参ります」

申し出たアリスの瞳を見つめる愁斗。

そして、彼は冷たく言い放った。

「君には無理だ」

「どうしてでございませうか、今の愁斗様よりは十分な活躍が

」

「できないな。敵は人に非ず、この世の力では倒せない」

「それでも今の愁斗様を行かせるわけにはいきません」

普通の人間ならば死んでいても可笑しくない重傷を負い、一命を取り留めた主人をいかせるわけにはいかなかった。死を覚悟してまで“つかさ”を助けに行く理由などないとアリスは思った。

愁斗はアリスの頭をそつと胸に抱き寄せた。

「つかさは僕にとつても……彼女にとつても大切な“ひと”なんだ」

「彼女って誰でございませうか！」

アリスには珍しく声を荒立てた。

愁斗は答えを言わなかった。それでもアリスはわかっていた。複雑な表情をするアリスを胸に抱きながら愁斗は囁く。

「君が未完成でなければ、僕の代わりを務められたのに、残念

だ」

「わたくしが未完成？」

「そうだ、君に黙っていたことがある。君は自分が誰に創られたか知っているな？」

「愁斗様の御父上であらせられます世界最強の傀儡士 秋葉蘭魔様でございます」

実はアリスを創ったのは愁斗ではなく、その父 蘭魔だったのだ。

「そのとおり、しかしもうひとりいる。君の姉である夜魔の魔女と呼ばれる魔導師」

「わたくしの姉が、わたくしに姉がいるのですか？」

「君はつくり変えられたとき、記憶を封印された。そして、本来、君は魔導兵器として覚醒めるはずだった」

「わたくしはいったい何者なのでございますか？」

アリスの蒼眼が愁斗を見つめて離さない。

「僕が帰ってきたら、いつか話をしてあげるよ」

「愁斗様!？」

愁斗の唇がアリスの唇に重なった。

静かに閉じられるアリスの瞳。

アリスの胸の ジュエル も鼓動を止めた。

少女の柔らかな唇からそつと口を離し、愁斗は停止させたアリスを自分の代わりにベッドに寝かせた。

「おやすみアリス。僕は少し出かけてくるよ」

静かな足取りで愁斗は病室を後にした。

父の仮面を探して、それを手に入れたと思われる二人組みの居所を探ろうと紅葉は聞き込みを続けていた。

紅葉のいるミナト区は帝都一の敷地面積だ。この場所で人探しをするのは容易ではないし、もう他の場所に移動しているかもしれない。

ミナト区のツインタワービルには帝都一の情報屋がいるというが、その者に頼んでもすぐに見つかるとは思えなかった。なにより、その情報屋は客を選ぶらしく、いくら金を詰まれても、気に入らない客の仕事は引き受けてくれないらしい。

街を見渡しながら歩いていた紅葉のケータイが鳴った。

ナンバーディスプレイを見ると、前に一度だけかかってきた相手 雅のケータイからだった。

「もしもし、雅？」

返事はなく、代わりに砂嵐のようなザザザ……と音が聴こえた。

「誰、誰なの？」

砂嵐の向こう側で呻き声が聴こえる。

その呻き声は徐々に笑い声へと変わっていった。

「クククツ……風間つかさは預かった……も……み……じ……愛してるぜ……ククククツ」

「あなたは誰！」

ツーツーツーと通話は虚しく鳴り、紅葉が力なくケータイを地面に向けると、またケータイが鳴った。

雅からデータが転送されてきたのだ。それは地図だった。

「……ここに来いということ？」

ケータイに転送された地図を見ながら呟いた。

地図はミナト区のものらしく、赤い点が点滅している地点がある。

「この辺りは ホーム だったような気が……」

地図を頼りに紅葉は歩き出した。

歩道を進んでいるとタクシーが通りの向こうからやって来るのが見えた。紅葉はすぐさま手を上げてタクシーを止める。

タクシーは紅葉の前で止まり後部座席のドアを開けた。

急いで乗り込んだ紅葉はケータイの画面を見せて行き先を告げる。

「ここに行って欲しいのだけれど？」

ケータイの画面を見た運転手はあからさまに嫌そうな顔ををした。

「ホーム だろ、そこ」

「はい、おそらく」

「しかも頭のイカレタ野郎が多い場所だ」

「近くまでで良いので、早くアクセルを踏んでください」

「仕方ないな、近くまでだぞ」

不景気な世の中で客を選んでいられないのだろう。運転手は嫌々ながらアクセルをゆっくりと踏んだ。

走り出したタクシーはミナト区の繁華街を抜けて北へ向かった。

向かっている ホーム は行政からは二番街と番号を割り振られていた場所で、海に港が近いことから横流しや密輸入などで、他の ホーム に比べれば裕福な暮らしをしている者も多い場所だ。

外の景色を見ていた紅葉のケータイがまた鳴った。

今度は紫苑からのメールだった。

内容はこうだった。

君の友達のかさが雅たちの手によって捕らえられた。相手は君をおびき出そうとするがそれは畏だ、絶対に行くな。

もうすでに紅葉は ホーム に向かっている。もう引き返す気もない。畏かもしれないとも思っていた。それでも行くと決めたのだ。

紅葉が肩から提げているバッグには 般若面 も入っている。タクシーは目的地の近くに着き、紅葉はそこで降ろされた。

逃げるように走り去るタクシーを見ることもなく歩き出す紅葉。

細い路地裏に入っていくと、ここの住民たちがテントの周りで各々になにかをしていたが、皆、紅葉が通るとそれを覗き見ている。

奥に進むに連れて人影が少なくなり、冷たい空気がなにかを孕んでいるようだった。

ケータイを見ながら歩いてきた視野の端に紅い影が映った。紅葉はハツとして、紅い影が消えた路地を曲がるが、薄汚い路地が広がっているだけで、人影などなかった。

亡霊でも見たのか？

それにしても一瞬しか見ていないのも関わらず、瞼の裏にまで焼きつく鮮やかな紅だった。

ふと気づくと、紅葉は自分が目的地に着いていることを知った。

地図上で点滅している赤い点と自分の所在地が重なり合っている。

上を見上げると、それが縦長で六階建てほどのビルと知れた。破壊された正面入り口の自動ドアから風が外に向かって吹いている。凍りつくように冷たい風だ。

ビル内に足を踏み入れた瞬間、強烈なプレッシャーに押し返られそうになった。それでも紅葉は足を踏ん張り中へと足を運んだ。

コンクリの地肌を見せるビル内は、取り壊し作業の途中で投げ出されたような有様だった。壁が穿たれ鉄筋を見せる壁や、天井から釣り下がる電気コード、埃を被って空になったカップラーメンのカップなどもある。

空気には邪気が含まれ、その発生源は地下のようであった。

巨大な亀裂が地面に走り、大きな口を開けたそこから強風が外へと吐き出されている。

亀裂の底にはどんな世界が広がっているのか、おそらく死が広がっているのだろう。

嫌な気配を感じ取った紅葉は身構えた。
亀裂の底から呻き声が聴こえる。

紅葉はシオルダーバッグの中にゆっくりと手を伸ばす。

それはまるで何百何千もの怨霊が唸っているようであった。

亀裂の底からなにかが来る。

瞬時に 般若面 を装着した紅葉に、亀裂の底から飛び出した影が襲い掛かった。

横に飛んでそれを躲した紅葉はシオルダーバッグを投げ捨て、代わりに裁ち鋏を構えた。

般若面 のその先にいたのは蠢く黒い塊。霧か煙のようなそれには顔があった。ひとつではなく、何人も人の顔が苦しそうにして蠢いているのだ。

悪霊の集合体ともいうべきそれは生身の躰に怨念を抱き、泣き叫びながら紅葉に再び襲い掛かってきた。

裁ち鋏を小太刀のように構えた紅葉は待ち構えずに自ら前へ出た。

実態の曖昧な霊体に物理的な攻撃が効くのだろうか？

答えは出た。

紅葉の一刀は悪霊を斬り、裂けた傷口から穴の開いた風船のように黒い風が噴き出た。

悪霊は怨めしい顔で紅葉を睨んでいる。

「なぜだ……なぜ……斬れる？」

苦しむ顔のひとつが問うた。

「生憎アタシは死人なんだよ！」

その言葉を聞いた悪霊は地響きのように唸り叫び喚き、紅葉に向かって分裂して次々と飛び掛かってきた。

「死人に斬られたら成仏できないって知ってるかい？」

呉葉が裁ち鋏を振りかざしながら舞う。

シユンと風切音が連続して聴こえた。

そのたびに聴こえる苦しそうな呻き声。

向かって来る悪霊どもを次々と斬り刻む呉葉に慈悲の心はない。向かって来るモノはただ倒すのみ。

最後の悪霊を縦に斬り裂き、呉葉は軽やかに地面へ膝を突いた。

膝を突きながら耳を済ませた呉葉は感じた。

「もつと巨大な何かが地の底にいる」

風が叫ぶような鳴き声が裂け目に下から聞こえたかと思うと、その闇から太く長い蛇の頭が飛び出たのだ。

大蛇の頭は呉葉が手を広げたほどもあり、その全長は裂け目の下まで続き、正確な大きさを測り知ることはできない。しかも、ただ巨大だけではない。全身を黒く長い毛で覆われ、頭には耳のような蝙蝠に似た翼が生えている。

ゆつたりと動く大蛇は決して呉葉から眼を離すことなく、頭に生えた羽を小刻みに震わせながら喉を鳴らしている。羽は空を飛ぶものではなく、威嚇に使う飾りのようなものらしい。

「帝都の下水道にはリヴァイアサンが棲んでるって聞いたことがあるけれど、あんたはその亜種ってどこかしら？」

巨大な蛇の頭が刺すように呉葉に向かって来た。

正攻法で立ち向かうには無理があると判断して、呉葉は後ろの飛び退いて巨大な頭を避けた。

それでも大蛇は執念深く、巨大な顎を地面に打ち付けコンクリを砕きながら、長い首を伸ばして呉葉に襲い掛かって来る。後ろに迫る壁を感じた呉葉は天井に向かって高く飛び上がった。それは判断ミスであった。

上空で自由に動けない呉葉を呑み込まんと、巨大な口を開いて大蛇が襲い来る。そして、強烈な口臭がする大蛇の口内へ、呉葉は逃げる術もなく呑み込まれてしまったのだ。

食道を滑り落ちる呉葉は裁ち鋏を大蛇の喉に突き刺してやった。

頭を振って暴れる大蛇の食道で、呉葉は振り落とされそうになりながらも、さらに深く裁ち鋏を刺し込んで耐えた。

このまま落ちれば胃袋で骨まで溶かされてしまいそうだ。

呉葉は片手で裁ち鋏にぶら下がりながら、もう片手に氣を集中させた。

「中から燃やしてやるよ！」

炎翔破が呉葉の手から放たれ、紅蓮の炎が大蛇の体内を駆け下りた。

「もう一発喰らわせてやるよ！」

再び放たれる炎翔破。

内部を焼かれた大蛇は暴れ狂い、嗚咽を漏らしながら口から呉葉を吐き出した。

地面に着地した呉葉はすぐに身構えた。

しかし、大蛇は呉葉に再び襲い掛かることなく、亀裂の中へと逃げ込んで行ってしまった。

「図体がでかい割にはたいしたことなかったね！」

呉葉は 般若面 に手を掛け、ゆっくりと顔から外した。深い息を吐きながら顔を出した紅葉の意識が戻る。

辺りに敵の気配はもうなかった。

般若面 は手に持つよりも、装着する方が明らかにエネルギーを吸われる量が多い。ここ数日に蓄積された紅葉の身体的疲労を考えると、小まめに外したほうが得策だった。

《紅葉、辺りの雑魚どもは蹴散らしたわ》

「ありがとうお姉ちゃん」

《大物を追い払ったから、当分は小物の出てこないと思うわ。

この階にはもうないもない。早く上の階に行きましょう》

「うん」

紅葉は 般若面 を片手に持ったまま、壊れかけの階段を上って二階を目指した。

愁斗は病院を抜け出しミナト区にある ホーム に辿り着いていた。

しかし、愁斗はつかさが捕らえられている廃ビルには直接向かわなかった。

なぜならば、紅い影を魅てしまったからだ。

紅いインパネスを風に靡かせながら、その男はフェンスのない屋上の端に立っていた。

「あなたがなぜここにいる？」

白い仮面の奥で愁斗は紅い影に問うた。

答えは妖艶な風と共に返って来た。

「探し物を追って来た」

愁斗の顔を見据える蘭魔の瞳は黒く輝き、優しくも妖しい笑みを湛えていた。

屋上を囲っていた段差から蘭魔は一步降りた。

「改めて久しぶりと言わねばならんな」

「紫苑を通して見たときよりも、恐ろしいヒトだ」

蘭魔の纏う魔力は愁斗の力を圧倒している。

一步一步と近づいて来る蘭魔に愁斗は動くこともできなかった。

「その仮面を外してくれないか、成長した息子の顔を見てみたい」

言われるままに愁斗は茶色いローブのフードを取り、無機質な白い仮面をゆっくりと外した。

現れた愁斗の瞳は逸らされることなく、しかと蘭魔の瞳を見据えていた。

十数年ぶりに息子の顔を見た蘭魔は父親の顔で微笑んだ。

「昔から妻に似ていたが、より妻の相が強くなったな。目の辺りなど紫苑にそっくりだ」

「あなたは母さんのことを愛していたか？」

「もちろんだ、でなければあのような大事件を起こしてまで駆け落ちなどせんよ」

「でもあなたは母さんの傀儡を壊した」

「あれは顔もない廃品だった」

「僕まで殺そうとした」

「しかし、お前はこうしてここに立っている」

「……それはあなたが手加減したからだ」

魔導医マルバスの 虫籠 で蘭魔によって紫苑が破壊されたとき、愁斗と紫苑のシンク口率は八〇パーセントを超えていた。蘭魔が手を抜いて紫苑が壊れる数秒のときを与えなければ、愁斗は確実に離脱できないまま死んでいた。

愁斗は蘭魔の腕に目をやった。

「腕はもう治ったのか？」

「そうだ、直した」

紫苑が壊されたとき、愁斗は蘭魔の片腕を落として一矢を報いた。はずだった。その腕が元通りに戻っているのだ。最先端の医療を持ってすれば可能ではあるが、愁斗にはひとつ気になることがあった。

蘭魔の腕を切り落とすとき、その傷口から闇色の液体が零れ落ちるのを見たのだ。

「あなたは本物の秋葉蘭魔か？」

「なにを言うのだ？」

「僕はあなたの切断された腕から 闇 が零れ落ちるのを見た。あなたは傀儡だな？」

秋葉蘭魔の考案した傀儡の製造には、その原材料として 闇 を必要とする。紫苑が蘭魔に壊され 暴走 した際も、中の 闇 が外に放出されてしまった結果だ。蘭魔は妖しく艶然とした。

「はて、私の切断された腕から 闇 が出たと、なにかの見聞 違いではないのか？」

「それなら、ここでまたあなたを切る」

「それは無理だ。お前の躰の中はポロポロに傷付いている。虫 の息のお前は私の足元にも及ばんよ」

やらねばわからないとは言えなかった。そのくらいのこと 愁 斗にもわかつている。前回全力で戦ったときにも勝てなかった 相手だ。

それに今の愁斗は生身。

紫苑は増幅器の役割もしており、紫苑を使うことにより、愁 斗は実力以上の力を出すことができるのだ。

愁斗は身構えた。

しかし、蘭魔はただそこに立つのみ。

「私に牙を向けるのではなく、共に歩む気はないか？」

「ない」

「即答か……お前に面作り師の話をどこまでしたか……。私が ここに来た理由も、その面作り師 源幻刀斎の彫り上げた面 の行方を追ってきたからだ」

愁斗は表情には出さなかったが、その話を聞いて内心では焦 りを拭っていた。蘭魔が姉妹を追ってきたという可能性も考慮 に入れていたのだ。けれど、蘭魔は姉妹ではなく、仮面を探し てここに来た。

蘭魔は愁斗に背を向けて、遠くのビルを眺めた。

「私は思うのだ。幻刀斎の面を探すうちに、いつか運命があ

姉妹に引き合わせてくれるのではないかと　いや、すでに私は逢ったかもしれん」

蘭魔は　般若面　を被った呉葉に逢っていた。けれど、そのときは目の前の面だけを回収し、逃げる呉葉を敢えて追うことをしなかった。

焦りを覚える愁斗であったが、自分の知りえる情報を悟られるわけにはいかなかった。愁斗はすでに紅葉と呉葉が源幻刀斎の娘だということを知っている。もし、蘭魔が姉妹のことに気づけば、執拗に姉妹を付け狙うことは必定。

「僕には面作り師のことなんてどうでもいい話だ。僕はここであなたを倒す、ただそれだけ……」

愁斗の手から妖系が放たれた。
が、ほぼ同時に蘭魔は三本の妖系を放っていた。

「業に切れがないぞ」

愁斗の放った妖系は三本の妖系によって虚しく空中で切られた。

このあと何度、同じことを繰り返しても、すべて相殺させるのは目に見えている。

それでも愁斗はやらねばならなかった。

愁斗の手が素早く動き、空間に傷をつくった。その傷は空気を吸い込みながら徐々に広がり、闇色の裂け目となって蘭魔の前に広がった。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。常人であれば耳を塞

がずにはいられない。

愁斗が 闇 に命ずる。

「行け！」

闇色の裂け目から飛び出した 闇 は蘭魔の躰を捕まえるはずであった。

しかし、蘭魔は命じた。

「己の世界に還れ！」

闇 は魔性を纏う蘭魔に恐れをなして裂け目に還っていく。
「闇 を恐れてはならぬ。より強い者に 闇 は従う。絶対に屈服させるのだ」

厳しい口調で蘭魔は言った。

愁斗は敗北を痛感した。負けるとわかっていながら、さらに負けた。

虚脱感に苛まれながら立ち尽くす愁斗を尻目に、蘭魔は自ら空間の裂け目に足を踏み入れていく。 闇 が還っていった世界だ。

「次に会うときまでに業を磨いて置け。さらば我が息子よ」
蘭魔を受け入れた闇色の裂け目は固く閉じられた。

闇色の裂け目の先にどんな世界があるのか愁斗も知らない。あの場所は敵を葬る場所であった。二度と出て来られない場所のはずだった。そこへ蘭魔は自ら消えた。

「あなたは僕の知っている父ではない。あなたは魔人と化した」

愁斗はフードを被り、白い仮面で顔を隠した。

こんな場所で立ち止まっている場合ではなかった。
まだ先に行かねばならない。

二階へ上がった紅葉はそこですぐに二人の人影を見つけた。
ひとりは胸から血を流して倒れていた。紅葉にとつて見覚え
のない女性で、駆け寄って息を確かめたが、死んでいた。

もうひとりは壁にもたれ掛かって目を閉じているつかさだっ
た。

「つかさ！」

躰を縛られ、ぐったりと死んだように動かない。

首元を触って脈を確かめると、血液が流れているように感じ
た。けれど、躰がいつもよりも冷たい。まるで死人のようだ。

つかさの生命の危険を感じた紅葉は、手に持っていた裁ち鋏
と般若面 を置いて、すぐさまつかさの躰を縛っている包帯
を取ろうとした。

まずは口に噛まされている包帯を取ろうとしているとき、ど
こから人の気配を感じて紅葉は振り向いた。

太いコンクリの柱の影から姿を現したのは“早苗”だった。

紅葉はそれが誰だか知らなかったが、すぐそこで死んでいる
人物と似ていることはすぐにわかった。

「どうして……死んでいるのは……あなたは誰？」

紅葉はわけがわからなかったが、ある考えが思いついた。

「もしかして雅のお母さん？」

「そう、あたしは雅の“お母さん”よ」

「でも、そこで死んでいるのは……誰？」

「そいつはあたしの偽者。だから殺してやったの」

なにか真実か、今の紅葉にはそれを知るための情報が少なすぎた。

紅葉はそつと地面に置いてあつた 般若面 に手を伸ばした。流れ込んでくる“姉”の意識が紅葉に語りかける。

《紅葉油断しないで、嫌な気配が立ち込めているわ》

「わかっている」

紅葉は小声で応じた。

もう片方の紅葉の手は裁ち鋏に伸びている。

つかさが気を失つてくれているのは幸運だったと紅葉は思った。戦う姿、特に 般若面 を付けて戦う姿は見られなくなつた。

“早苗”は手にナイフを握り締めながら、少しずつだが紅葉との距離を縮めていた。

「あんな綺麗な顔して居るじゃないか、その顔が欲しいわ！」

地面を蹴り上げて“早苗”がついに牙を剥いた。

すぐさま紅葉は 般若面 を被り迎え撃つ。

ナイフと裁ち鋏が重なり合い小さく火花が散つた。

呉葉は軽く飛び退いてしゃがみ、そこから廻し蹴りで“早苗”の軸足を払った。

バランス崩した“早苗”は転倒し、持っていたナイフを呉葉に蹴り飛ばされてしまった。

両手を付いて立ち上がるうとする“早苗”の背中を呉葉が踏

み潰した。

「ぐうッ！」

嗚咽を漏らしたような音を立てて、“早苗”は潰れた蛙のように地面にへばった。

呉葉は“早苗”の背中を踏み台にしたまま訊く。

「貴様が近藤香織と猪原由佳、そして武田朱美を殺したのか？」

「近藤香織を殺したのはクソ息子のタケルだよ。武田朱美を殺したときは近くにいたけど、殺したのはクソ息子で、あたしはその彼氏を喰らってやったのさ」

“早苗”を踏みつける呉葉の足に力が入った。

「他にも殺しただらう？」

「何人殺したかなんて覚えてないね」

「男だけじゃない、この世の中は女も信じられない……この外道がッ！」

再び呉葉は“早苗”の背中を足蹴りした。

地面に叩きつけられた“早苗”から力が抜けた。ぐったりとして動かない様子を見ると、気を失ってしまったのかもしれない。

ゆっくりと確かめるように、呉葉は“早苗”の背中から足を退かしたとき、変異は起きた。

突如として“早苗”の躰が短く痙攣し、筋肉が膨張するように脈打った。

「まさか！」

呉葉の足首が巨大な手で掴まれ、そのまま横振りに投げられてしまった。

思わぬことに呉葉は両手両足で地面に着地し、そのままの態勢でなにか起きたのか見定めたのだった。

立ち上がった“早苗”は咆えた。

否。すでにそれは“早苗”ではなかった。

その者の筋肉は膨張し、着ていた上着を筋肉が引き千切り、躰は一回りも二回りも巨大化していく。それに合わせ、顔はマスクが伸びるように変形した。

「今日こそ犯し殺してやるぜ！」

野太く雄々しい男の声。

呉葉は勘付いた。

「まさか、雅の兄かつ！」

「そうだ、俺様は雅の“お兄ちゃん”だ」

なんと“早苗”だと思っていた者が雅の“お兄ちゃん”だったのだ。

大男の怪人と化した“お兄ちゃん”は伸びたマスクをさらに歪ませ、醜悪で下卑た笑いを浮かべた。

「ククク……今脱がせてやるぜ」

「貴様のようなゲス野郎はテメエのアレでもしゃぶってな。なんならアタシが引き千切って貴様の口に突っ込んでやるるか！」

呉葉の視線は地面に落ちている裁ち鋏に向けられた。先ほど投げられたときに落としてしまったものだ。

巨軀を揺らして“お兄ちゃん”が突進して来ると同時に、呉葉は裁ち鋏に向かつて飛び込んだ。

地面を転がりながら拾い上げた裁ち鋏を構える呉葉に巨大な影は覆いかぶさる。

裁ち鋏が太い胸板を突き刺した。

「くたばりな！」

呉葉の怒号は切っ先に込められ、それが抜かれると同時に艶やかな紅が般若面を彩った。まるでそれは般若面が人の生き血を啜ったようであった。

しかし、噴き出た血もすぐに治まり、胸板の刺し傷は呉葉の見尽くす前で塞がり、傷痕も残さず完治してしまった。

「オレは無敵だ！」

“お兄ちゃん”の裏拳が繰り出され、拳をもろに顔面に当てられた呉葉はボーリングのピンのように飛ばされてしまった。

地面に手を突いてゆっくりと立ち上がった般若面の口から鮮血が流れ出る。

「よくも妹の躰に傷を付いてくれたな……殺してやる……殺してやる！」

呉葉は裁ち鋏を構え直し、般若面の形相はより濃い憤怒の相を浮かべた。

「そして、アタシの顔を殴った貴様の手の指を一本一本へし折ってから切り落としてやる！」

躰の中で煮え滾る復讐の血潮が激しく流れれば流れるほど、呉葉は強くなる。

疾風のごとく呉葉は地面を駆け、裁ち鋏を華麗に操った。

“お兄ちゃん”の腕が血を噴き、刹那、胸が血を噴き、首が血を噴き、顎から額に向かつて紅い線が走った。

顔を縦に割られながら“お兄ちゃん”は平然と笑っていた。
「オレは無敵だ。前よりも力が漲ってくるぜ」

当然のごとく“お兄ちゃん”が斬られた傷は再生してしまつた。

いくら斬つても切りがないと呉葉は悟つて、間合いを取りながら“お兄ちゃん”の周りを回る。

裁ち鋏を握る手に汗が滲んでいた。

切り刻んでも再生するのなら、別の方法を考えるしかない。手は残っているが、紅葉の躰への負荷が心配だった。蓄積された疲労で呉葉はすでに脚に違和感があった。

呉葉は裁ち鋏を投げ捨てた。

それを見て“お兄ちゃん”が剥がれかかっているマスクを歪めて笑った。

「やつと観念してオレにやられる気になつたか？」

「違う。灰になるまで焼き殺してやる」

呉葉の手に集中される氣。

炎を扱うこと、それはもつとも紅葉の躰に疲労を与える技だった。

だが。

「悶え苦しんで死ぬ！」

呉葉の両手から放たれる炎翔破！

地獄の業火に“お兄ちゃん”は自ら飛び込んだ。

「オレは死なない！」

炎に巨躯のシルエツトが浮かび、絶叫にも似た雄たけびがあがった。

「ウオオオオオオオツオレは無敵だ！」

紅蓮に燃え盛る炎の中から火達磨になった巨躯が飛び出し、呉葉に向かって突進してきた。

相手の妄執に呉葉はその場を動けず、避けなくてはと思ったときには遅かった。

炎に包まれた手が 般若面 を鷲掴みにしようとしていた。

刹那、魔気と共に輝線が走り、炎に包まれた太い腕が地に落ちた。

そして、炎に包まれた巨躯は最後の力が尽きたように地面に倒れた。

呉葉 紅葉自身の体力も限界だった。

ゆらゆらと足をふらつかせながら呉葉は壁にもたれ掛かった。肉の焼ける臭いが辺りに漂い、呉葉の瞳に映る床に転がる黒焦げの巨躯と、無表情の白い仮面。

「紫苑か……またアタシたちは助けられた……いや、前に会ったときと雰囲気が違う」

「紫苑だ。無駄な詮索はするな。私が紫苑であることには変わりはない」

「……そうか」

そう言って呉葉は 般若面 を外そうとした。

だが、白い仮面は告げた。

「まだだ」

般若面 は外そうとしていた呉葉その手を止め、しかとその目で見た。

地面で死したように動かなくなったその黒い塊が、瞬く間に縮み、華奢で小さな躰に変化していく。

白い仮面の奥で愁斗は囁いた。

「草薙雅」

その姿、まさに草薙雅のものであった。落とされた腕の再生はずでの終わり、黒い蛹から脱皮するように、黒い灰を落としながら雅は白い肌を見せ、ゆつくりと立ち上がった。

愁斗の囁きを耳にしていた呉葉は驚かずに入れなかった。

「彼女が草薙雅……彼が？」

裸体を晒す雅の肉体は男の象徴を供えていた。

虚ろな瞳をしていた雅はハツとして、己を抱きかかえてしゃがみ込んだ。

「殺さないで！」

雅は泣き叫んだ。震える体を抱きしめながら、雅は顔を歪ませて泣いていた。

震える雅は周りを見ようとせせず、頭まで抱きかかえてしまっている。先ほどまで呉葉と戦っていた人物とはまるで別人だ。愁斗はしゃがみ込む雅の傍らに立ち、無表情の仮面で見下した。

「君は何者だ？」

“早苗”であった者が“お兄ちゃん”に変わり、そして雅になつた。

愁斗の問いに雅は答えずにただ震えて、なにかをボソボソと囁いている。

「お兄ちゃん助けて、お兄ちゃん助けて、お兄ちゃん助けて、お兄ちゃん助けて……」

壁にもたれ掛かつていた呉葉はすでに般若面を外し、紅葉となつて“姉”から事情説明を簡単に受けている途中だつた。《つまりお兄ちゃんもお母さんも、すべて雅がひとりで演じていたのかもしれないわ》

そう“姉”が結論を出したのを聞いても紅葉は頭がパニックになるばかりだつた。

泣き止むことなく震える雅に、紅葉は般若面を地面に置いてからそつと近づいた。

しゃがむ雅に合わせて紅葉もしゃがみ、優しく震える雅の肩を抱いた。男の肩を抱いたのはこれがはじめてだつた。

「大丈夫だから震えないで」
聖母のように優しい口調で接する紅葉。

雅は地面に向けていた顔をゆっくりと紅葉に向けた。その瞳からは涙の跡がついている。

少しずつ涙の止まってきた雅に愁斗が尋ねる。

「私は“早苗”に扮しているのが男だと気づき、その後、雅が“早苗”に扮しているのではないかと気づいた。しかし、君が

本当に雅なのかわからない」

つかさが襲って来る「早苗」の胸を蹴り上げたとき、愁斗はすでに「早苗」を男ではないかと考えていた。その後、早苗を刺し殺して絶叫した「早苗」の声は雅のものだったのだ。

震えの治まっていた雅が再び震えはじめた。

「わたしは雅……雅なの……」

戸籍上に存在しない人間。雅を生んだと思われる早苗が死んだ今、雅がいたい誰なのか、それを知る方法は本人の自供に頼るしかなかった。

しかし、雅は「早苗」であり「お兄ちゃん」でもあった。今の雅の様子から考えても、ただの演技ではなく人格が複数あるように思えてならない。だとしたら、今ここにいる「雅」の証言すら当てにならないのだ。

それに加えて、雅は神原女学園に通っていた女子高生だ。ここにいる雅の躰は男だった。そこから愁斗は答えを導き出そうとした。

「君の身体つきは男だ。もしかして君は雅の兄ではないのか？」

「違う、わたしは雅。女の子の格好をしていたのは小さい頃からお兄ちゃんに女装させられて……」

雅は言葉を詰まらせたが、今まで集めた情報から考えるに、男女の関係のようなものがあつたに違いない。

怨念の気配がした。

紫苑と紅葉が示し合わせたように振り向いた。

そこに立っていたのは死んでいるはずの早苗であった。この
ビルに漂う邪気が早苗を亡霊として目覚めさせたのかもしれない。
い。

血だらけの早苗は下手な人形遣いに操られるようにギクシヤ
クと動いた。

「その子の名前は……雅夫つてんだ……あたしが生んだ息子だ
よ……きゃははは」

自分に向かって早苗が歩いて来ていることに気づき、雅は震
えながら紅葉の躰に抱きついた。

「わたしが殺したのに……なんで、なんで生きてるの！」

「そうさ……あたしはお前に刺された……ここに傷があるだろ
……」

服を捲って早苗は腹の傷痕を見せた。それは昔に付けられた
傷痕だった。死都東京のアパートでつかさが聞いた話。兄弟が
母を刺して逃げたという出来事。

「あたしを……刺したクソガキに……いつか……仕返ししよう
と……思ってたら……また……お前に……刺され……あたしは
死んだ……まだ痛い……死んだのに……痛い痛い痛い……」

実際に痛覚が反応しているわけではなく、生前の記憶が早苗
に痛みを与えているのだ。

怨念に駆られた早苗の目的はただひとつ 雅を殺すこと。

早苗の血に染まった紅葉が抱きかかえる雅に伸びる。

「殺してやる……殺してやる……きゃははは！」

美影身が早苗の前に立ちはだかり、煌きが早苗の脳天から股

間まで割った。

断面からどろりとした血を流しながら早苗が左右に割れた。

早苗を葬った愁斗は感じていた。この場所の邪気が早苗を目覚めさせたのではない。“何者”かによって無理やり目覚めさせられ、操られていたのだ。

「近くにいるのか」

呟く愁斗。

左右に分かれた死骸を見た雅は紅葉の腕の中で震えていた
笑いながら。

「クククク……クソ婆はゴキブリみたいにしぶといな」

自分の腕の中で野太い声が聴こえ紅葉は顔を強張らせた。そこにいるのは雅ではない、“お兄ちゃん”だ。

「捕まえたぜ紅葉」

“お兄ちゃん”は紅葉を捕まえて後ろから羽交い絞めにした。構える愁斗だが、完全に紅葉を人質に取られてしまつて手が出せない。

雅がする表情とは思えない下卑た笑いを“お兄ちゃん”が浮かべた。

「ククク……いい乳してんな」

“お兄ちゃん”の手が紅葉の乳房を鷲掴みにし、こねくり回すように揉んだ。

が、そのとき。

「やめて、お兄ちゃん！」

胸を揉む“お兄ちゃん”の手が止まり雅の声がした。

雅の声が続く。

「お兄ちゃん……もうやめてよ、わたしが他の人の代わりになるから……」

「クククク……よく言っぜ……」

それは“お兄ちゃん”の声だった。

しかし、その声があったのは雅の口からではなかった。

細いタイヤが地面で擦り合い、激走する車椅子に乗った人影が現れた。

「雅の言ってることを……信じるんじゃねえぞ……」

車椅子に乗った男は不気味の仮面の奥でそう言った。

立ち尽くす雅から逃げ出した紅葉が叫ぶ。

「あなたは誰なの！」

男は答えず、車椅子に手も触れず走らせ、死骸となった早苗の傍らに來ると、自分の躰に巻かれた包帯を触手のように伸ばし、早苗の躰を包み込んで巻きつけた。

そして、不気味な仮面は裂けるほどに大きく口を開け、早苗を一口で呑み込んで咀嚼した。

耳障りな骨を砕く音が鳴り響く。

男は喉を鳴らし噛み砕いたモノを飲み込むと、軽くげっぷを出して車椅子から立ち上がった。

「肉を喰らってオレの肉体がだいぶ再生した。これでまともにしゃべれるぜ」

早苗の屍体を喰った理由。それは己の肉体を再生させるためだったらしい。

男の躰には包帯が巻かれているが、それとなにか関係があるのだろうか？

「オレが雅の本物の兄貴のタケルだ。ついでにもうひとつおもしろいことを教えてやるよ、雅はオレを殺しやがったんだ」

と、本物の雅の兄　タケルは言った。

雅の人格の中にいる“お兄ちゃん”。“早苗”の人格には、元となった母　早苗がいた。そう考えれば、本物の兄がいても可笑しくはない。

立ち尽くす三人に注視されながら、タケルは口から唾と一緒ににかを吐き出した。それは早苗がしていた指輪だった。

「クソ婆の肉は筋っぽくて不味かった。こんな躰にされなきゃ、あんな不味い肉喰わなくても済んだのになあ、雅？」

言葉を投げかけられた雅は震えた。

「わたし知らない……わたしなにも知らない……」

頭を抱えてしゃがみ込んだ雅にじわりじわりと近づくタケル。「おいお前ら知ってるか？」

とタケルは紅葉と愁斗に顔を向けて話を続ける。

「こいつがオレを殺してこんな姿にしたんだ。包帯グルグル巻きにして、呪符でオレが腐るのを食い止めた。なんでそんなマネをしたか知りたかねえか？」

紅葉と愁斗はなにも答ええない。ただじつとタケルを注視し、すぐにでも攻撃にできる体制だった。

なにも答ええないことをイエスと解釈して、タケルは雅から一メートルの距離で立ち止まり、見えない遠くを見上げながら記

憶を蘇らせた。

「そうだな、まずはオレと雅の関係から話すか」

饒舌にタケルは長い話を語りはじめた。

「オレは雅のことを世界で一番愛してる。だから何度も犯してやったんだ。こいつ最初は嫌がってたんだけどな、だんだんと女らしくなつてオレに抱かれることを喜ぶようになった。」

雅つて名前はこいつの本名の雅夫から字を取つてオレがつけてやったんだぜ。

そんな感じでオレらは兄弟仲良くやつてただけどよ、敵がいたんだ。クソ婆の母さんだよ。

オレは連れ子だったし、雅は苛めやすい体質でクソ婆に罵声を浴びせられるわ、暴力は振るわれるわ。で、オレと雅で協力して刺してやったんだよ。それで二人で逃げた。

それからだよ、雅の中に母さんの人格が生まれたのは。オレたちは母さんが死んだと思つて、雅はその現実を受け入れたくないから母さんを生きることにしたんだ。

それからいろいろあつてオレたちは帝都に来た。で、しばらくしてオレは雅に殺された。理由は嫉妬だよ、嫉妬。帝都って綺麗な女が多いだろ、だからオレの心がそいつらに捕られる前に雅はオレを殺した。

殺したあとで雅は後悔したんだ。いつも雅を守つてやってたのはオレだし、オレなしじゃ雅は生きていけない。だからオレのことも生きてることにして、雅の人格の中にオレが生まれたつてわけさ。

でもよ、雅のつくったオレや母さんは雅の幻想の産物だ。本物とはぜんぜん違うし、雅の欲望を反映させてたんだ。

オレの人格が女を犯すのは、雅が自分がオレにそうされたいって欲望からだっただし、母さんの人格が綺麗な女を襲って顔を剥いだりしたのは、自分が本当は男だってコンプレックスからだからな。

クククツ……オレは雅のことだったらなんでも知ってるんだぜ。ケツにほくろがあるってこともな」

と、武は長々と語って、最後に付け加えた。

「でもよ、雅がオレを殺したの正解だぜ。オレは紅葉に惚れちまったからな」

その言葉は雅の耳に届いた。

「イヤアアアアアアアツ！」

鼓膜が破れんばかりに叫んだ雅は走り出し、地面に落ちていた血の付いたナイフを拾い上げた。

紅葉が叫ぶ。

「やめて草薙さん！」

紅葉の制止も聞かず、雅はナイフの切っ先を自らの喉に突き立てた。

紅い鮮血の泡が口から吐き出され、そして雅は力なく地面に倒れたのだった。

吹き荒ぶ風が狂気を孕んだ。

低い笑い声が木霊した。

「クククツ……心配すんなよ、雅はオレの中で生かしてやる」
タケルは血の海に浸る雅の躰を抱きかかえ、不気味な仮面が
巨大な口を開けて、その深淵へと雅の躰を丸呑みにした。

紅葉よりも先に愁斗がおぞましい存在が顕現すると感じ、地
面を蹴り上げながら妖系を放った。

煌く輝線はタケルの首を刹那にして勿ねた。

しかし、相手はすでに死人。

地面に転がった生首から蜘蛛のような脚が出た。

あの仮面を壊さねばならぬことを悟った愁斗が構えた瞬間、
首と切り離された胴から包帯が触手のように伸び、愁斗を絞め
殺そうと飛んで来た。

何本もの意志を持った包帯を躲わすのは至難の業。

最初の一本を躲わした愁斗は包帯を妖系で切り刻もうとした
のだが、息を切らした肺が咳き込み喀血をして仮面の口から真
つ赤な血を吐いた。

「……こんなところで」

急激な運動によって内臓の損傷が悪化したのだ。

隙のできた愁斗の足首に包帯が巻きつき、なんと愁斗は宙吊
りにされてしまった。

包帯はすでに生き物と化し、その長さも自在と変えてうねり
回る。

瞬く間に愁斗は四肢を捕らえられ、蜘蛛の巣にかかった獲物
のように宙に吊されていた。

さらに包帯は愁斗の首を絞めようと巻きつき、ぎちぎちと巻

きつく力を強めていた。

愁斗の首から伸びる包帯に輝線が走った。

裁ち鋏を構えた 般若面。

跳躍しながら呉葉は華麗に舞い、次々と愁斗を拘束していた包帯を切り刻んだ。

小刻みされ舞い散る包帯が花びらのごとく宙を舞う。

首のない躰が拍手をして、その首に蜘蛛の脚を持った頭が乗った。

「すげえな、カツコイイじゃねえか」

感心したようにタケルは舌を巻いた。

「オレもカツコイイとこ見せなくちやな」

タケルの躰に起こるメタモルフオーゼ。首と両腕が天井に向かって長く伸び、両手はぶよぶよと蠢きながら頭部を形成した。

両手の変わりに生まれた頭部　そこに現れたのは喰われたはずの雅と早苗の顔であった。

二人の顔は苦悶に満ちている。

脳で木霊するおどろおどろしい声を呉葉は聴いた。

タスケテ……タスケテ……。

雅と早苗の混ざり合った声。二人の意識はタケルの中で生きていたのだ。

硬く裁ち鋏を握った呉葉がタケルに飛び込んだ。

タケルの躰から伸びた包帯が腕となつて縦横無尽に動き回る。

殺意を滾らせた呉葉の攻撃は確実に包帯を切り落とし、タケルの中心　不気味な仮面へと距離を縮めてようとするが、包

帯はいくら切り刻んでもタケルの躰から生え変わり、無限といふべき再生を続けていた。これでは近づけない。

驚異的な再生力を持った幾本もの包帯。その光景はまるで、日本神話に語られる八岐大蛇のようだ。

一方、愁斗は仮面の下から零れる血がローブに染み込み、地面に方膝を突きながら霞む目を凝らしていた。

包帯と舞い踊る呉葉はその場でステップを踏むのに精一杯だ。愁斗はあの不気味な仮面がエネルギーソースと知って、破壊する方法を模索した。

愁斗は立ち上がり指先を軽く動かした。問題は己の躰が持つかであった。

神速で振られた愁斗の手から放たれた輝線が宙に傷をつくる。闇色の裂け目の“向こう側”で、いつもよりも甲高く悲鳴が聴こえる。号泣する声が聴こえる。轟々と呻く声が聴こえる。どれも惨苦に満ち満ちている。

愁斗は気高く命じる。

「行け！」

空間の裂け目から飛び出した 闇 は荒ぶる風のように吹き、幾重にも伸ばされた包帯を侵食させながら不気味な仮面に絶叫を浴びせた。

闇 がタケルを呑まんと大きく魔の手を広げる。

不気味な仮面の雄たけびが空間そのものを震わせ、大きく裂けた口を 闇 に負けじと広げた。その口の中に続く暗い深淵。無限に続く闇がそこにはあった。

闇が、闇が不気味な仮面の口内へ吸い込まれていく。愁斗が愕然として、両手を地面についた。仮面の口から零れ落ちた血が地面で四散した。

闇を呑み込んだタケルは躰を膨れ上がらせていた。

それはまるで腫瘍が増殖していくように、ぶよぶよとした肉塊が次々と膨れ上がっていく。

呉葉はタケルが闇を呑み込んでいた隙に、すぐそこまで迫っていた。

「クタバレ怪物！」

渾身の力を込めて呉葉は不気味な仮面に裁ち鋏を突き刺した。はずだった。

そこにあつたはずの不気味な仮面は早苗の顔に変わっており、その瞳から血の涙を流していた。

イタイ……イタイ……。

呉葉の脳に流れ込む早苗の苦しむ意識。

わかつていても呉葉は両耳を強く塞いだ。

裁ち鋏から手を離してしまった呉葉の躰を掴もうとする長い包帯。

「クハハハツ、残念だったな今のはクソ婆だ！」

伸ばされた包帯は呉葉の残像を掴んだ。

バク転をしながら後ろに逃げた呉葉は、タケルの躰から伸びていた首のひとつから、早苗の顔が消えたことに気がついた。

不気味な仮面は早苗の魂を身代わりとして破壊されることを免れたのだ。

壁際まで逃げた呉葉は壁に背中を付けてもたれ掛かった。

呉葉は限界をとうに超えていた。間接に走る激痛、鉛のように重い躰、意識だけがはつきりしているのが救いだっただ。

愁斗もまた同じ。臓器の損傷が激しく、躰の内から死が滲み出していた。

倒れる寸前の二人とは対照的にタケルは力に満ち溢れ、その躰をさらに変化させていた。

包帯はいつしか赤黒い触手へと変わり、それが肉塊となったタケルの躰から毬藻のように生えている。触手の塊となった躰から長く伸びた首が二本。残る顔は不気味な仮面と、苦しみを浮かべる雅の顔。

不気味な仮面は触手の奥深くで嗤っている。

「オレは無敵だ、今なら世界征服もできそうな気分だけ」

「アタシひとりモノにできない野郎がよく言うよ！」

呉葉が叫んだ。

「あんたなんて核弾頭で一発よ、キャハハハハ！」

笑いながら呉葉はついに地面に座り込んだ。もう一步も動けなかった。

愁斗も地面にうつ伏せになったまま動かない。

死はすぐそこまで忍び寄っていた。

触手を蠢かせながらタケルがわさわさと近づいてくる。

呉葉は逃げることもできなかった。ただ、胸の奥で悔しさを噛み締めた。

赤黒い触手の先端が“紅葉”の胸に触れた。

妹の躰を弄ぼうとする触手を呉葉が握り締めた。そこまでが限界だった。触手を掴んだはずが、逆に手首は触手に巻きつかれてしまった。

先端から粘液を滴らせる触手が鍛えられた太腿を撫でた。

グチャリグチャリと音を立てる触手に首筋を舐められても呉葉は動けなかった。

突き出た豊満な乳房を巻き縛られ、その先端を触手が突付くように弄くる。

恥辱が 般若面 を恥辱色に染める。

妹を守るために黄泉返ったというのに、復讐に血を捧げたと
いうのに……。

いつか昔にも、こんなことがあったような気がする。

激しい雨が降りしきる日だった。

そのときも同じことを考えた。

こんなところで妹の貞操を奪われるわけにはいかなかった。

妹の心にこれ以上の傷を負わせるわけにはいかなかった。

あのとときも同じことを考えた。

神ではなく、悪魔の顕現を祈った。

その悪魔も今は地面に横たわり死の淵を彷徨っている。

触塊の中から一本の触手に 般若面 が鷲掴みされた。

般若面 は接合された顔の皮膚から、めりめりと音を立てて引き剥がされそうとしていた。

「やめろーッ！」

呉葉の絶叫も虚しく、般若面 は宙を舞って地面に墮ちた。

般若面 の下に隠された仮面のそのまた下の真実の顔。

おぞましく溶けた醜悪な素顔を紅葉は晒された。

大火傷を負ってケロイド状になった紅葉の顔半分。端正な才女の相はそこにはない。ただそこにあるのは見るにおぞましい顔。

顔に負った傷は心の傷。

「……ケケケツ」

ケタケタと嗤う声が響き渡った。

項垂れた紅葉の肩は小刻みに震えていた。

「ケケケケツ……ククク……クハハハハハハハハハハッ！」

狂気を孕んだ哄笑を躰全体から発し、紅葉の手が自分の躰を弄んでいた触手を握り潰した。

潰された触手はグチャリと白濁した汁を紅葉の顔に飛ばした。口の端の飛んだ汁を舌で舐め取った紅葉の瞳は鬼気を湛えていた。

触手は紅葉の躰を拘束しようと四肢に巻きつき、胸に巻きついて胸に伸びようとしていた。

紅葉は触手を鷲掴みにして、ゴムのように伸びた触手を噛み干切った。

「俺様を目覚めさせたな……雑魚がッ！」

紅葉はケタケタと嗤ってその躰を炎で包んだ。

紅蓮の炎に包まれた紅葉の服は刹那に燃えたが、白い柔肌は炎の中でいつまでも瑞々しさを誇っていた。

躰に巻きついていた触手を一瞬にして焼き尽くし、紅葉はゆ

つくりとゆつくりと触塊の中心へと足を運んだ。

その間も触手は次々と紅葉に魔の手を伸ばしたが、紅葉の炎が紅葉に触れさせることを拒んだ。

タケルの心が恐怖した。

怪物と化したタケルが、怪物が来ると恐怖した。いや、怪物ではなく鬼女だ。

怨念という炎を纏った鬼女紅葉。

紅葉の中で眠っていた闇が覚醒めたのだ。

不気味な仮面の前に立った紅葉はその燃え盛る手を伸ばした。と同時に、不気味な仮面は巨大な口を開けて紅葉に襲い掛かったのだ。

「オレ殺せるはずがないんだ！」

「すぐに地獄に送ってやる」

「させるか！」

不気味な仮面は瞬時に雅の顔へと変貌した。また身代わりにする気なのだ。

しかし、雅の顔は歪み再び不気味な仮面に戻っていく。

「オレに逆らう気か、お前はオレのモノなんだぞ！」

不気味な仮面は激怒して口を開けた。

口の中に広がる闇に燃え盛る紅葉の手が突っ込まれた。

刹那、地獄の業火が触塊に燃え移り、巨大な炎が天井まで達した。

「ぎゃあああああッ！」

軀中に生えていた触手を灰と変え、烈火の中でタケルは怒り

狂った。

「裏切ったな雅……ッ!!」

そして、異形と化したタケルの躰に輝が走り、輝の間から火焰が漏れ出し大爆発を起こしたのだ。

舞い散る黒い灰を浴びながら、紅葉はなおも全身を炎に包んでいた。

今の紅葉になれば世界を劫火で死の荒野にできるかもしれない。

「ケケケッ……復讐の炎で世界を焼き尽くしてやる」

ケタケタと嗤う紅葉。

もうそこにいるのは紅葉ではない。

横たわっていた愁斗は悪夢で目覚めた。怨念がこの場を呑み込もうとしていることに気づき、腕を動かそうとしたが、地面に躰が張り付いてしまったように持ち上がらない。

その腕が不意に上がったのだ。見えない糸に操られるように。

愁斗は操られるがままに宙に妖系で奇怪な魔法陣を描いた。

魔法陣の“向こう側”から、強大なそれがおぞましい呻き声をあげた。

世界はそれの呻き声によって恐怖し、魔法陣の“向こう側”から大鎌を持った黒い影どもが飛び出した。

黒い影どもが死臭と共に大鎌で紅葉の躰を八つ裂きにする。

大鎌は紅葉の躰を傷つけることなく貫通した。

違う、魂が八つ裂きにされた。

眼を剥いた紅葉が恐怖の形相を浮かべ、叫びも発せぬまま地面に倒れた。

甲高い叫びにも似た笑い声をあげて　黒い影ども　が還っていく。

そして、紅葉の躰を覆っていた炎が、命の灯火が途絶えるように弱くなって　消えた。

時間が凍ってしまったように、この場で動くモノはなにひとつなかった。

静寂を墮ちる。

麗らかな風が紅葉の頬を撫でた。

「あなたはわたしをはじめめて好きになった女の人でした」

白い影が紅葉に口付けし、霧のように消滅した。

紅葉の胸の奥で心臓が鼓動した。

瞳をゆつくりと開けた紅葉はなぜか切ない思いが込み上げ、

零した涙が頬を伝わり、地面の上で弾け飛んだ。

紅葉はまだ生きなければならなかった。

誰がために生きる？